静岡県博物館協会　研究紀要　第47号

# 研究紀要

令和5年度
第47号

静岡県博物館協会

静岡県博物館協会
# 研究紀要

第47号／令和5年度
表紙／企画展「いきもののかたち
ビュフェの“自然誌博物館”」展示風景

## 目　次


| | | | |
|---|---|---|---|
| 02 | 前近代における伊豆半島北部の東西交通の多様性について<br>ー「網代街道」を例にー | 熱海市立澤田政廣記念美術館<br>（熱海市教育委員会） | 栗木 崇 |
| 10 | 芹沢銈介と静岡の茶業 | 静岡市立芹沢銈介美術館 | 山田 優里 |
| 20 | 静岡近代美術年表稿　昭和戦後編 10 | | 立花 義彰 |
| 44 | 自然系博物館と美術館の連携<br>「いきもののかたち　ビュフェの“自然誌博物館”」展を例に | ベルナール・ビュフェ美術館<br>ベルナール・ビュフェ美術館<br>ふじのくに地球環境史ミュージアム | 雨宮 千嘉<br>井島 真知<br>岸本 年郎 |
| 54 | 浜松市美術館企画展<br>「みほとけのキセキⅡー遠州・三河のしられざる祈りー」<br>開催記念シンポジウム「仏像フロンティアー遠州地域の仏教文化圏ー」 | 成城大学<br>奈良教育大学<br>上原美術館<br>浜松市美術館 | 岩佐 光晴<br>山岸 公基<br>田島 整<br>島口 直弥 |
| 64 | 突撃！となりのミュージアム！ Vol.3<br>ー「有度丘陵の片隅で多分野の<br>ミュージアムの在り方を語る」篇ー（報告） | 一般財団法人 清水港湾博物館<br>東海大学海洋学部博物館（静岡県博物館協会事業推進グループ）<br>ふじのくに地球環境史ミュージアム<br>静岡県立美術館（静岡県博物館協会事務局） | 椿原 靖弘<br>手塚 覚夫<br>早川 宗志<br>貴家 映子 |
| 67 | 2022年度第2回講習会　博物館の防災を考える　歴史資料編<br>～「しずおか史料ネット」の設立に向けて～（報告） | 沼津市明治史料館<br>（静岡県博物館協会事業推進グループ） | 木口 亮 |
| 89 | 伊勢物語の風景　ー蔦の細道図の意匠と宇津の山ー | 一般財団法人 清水港湾博物館 | 椿原 靖弘 |

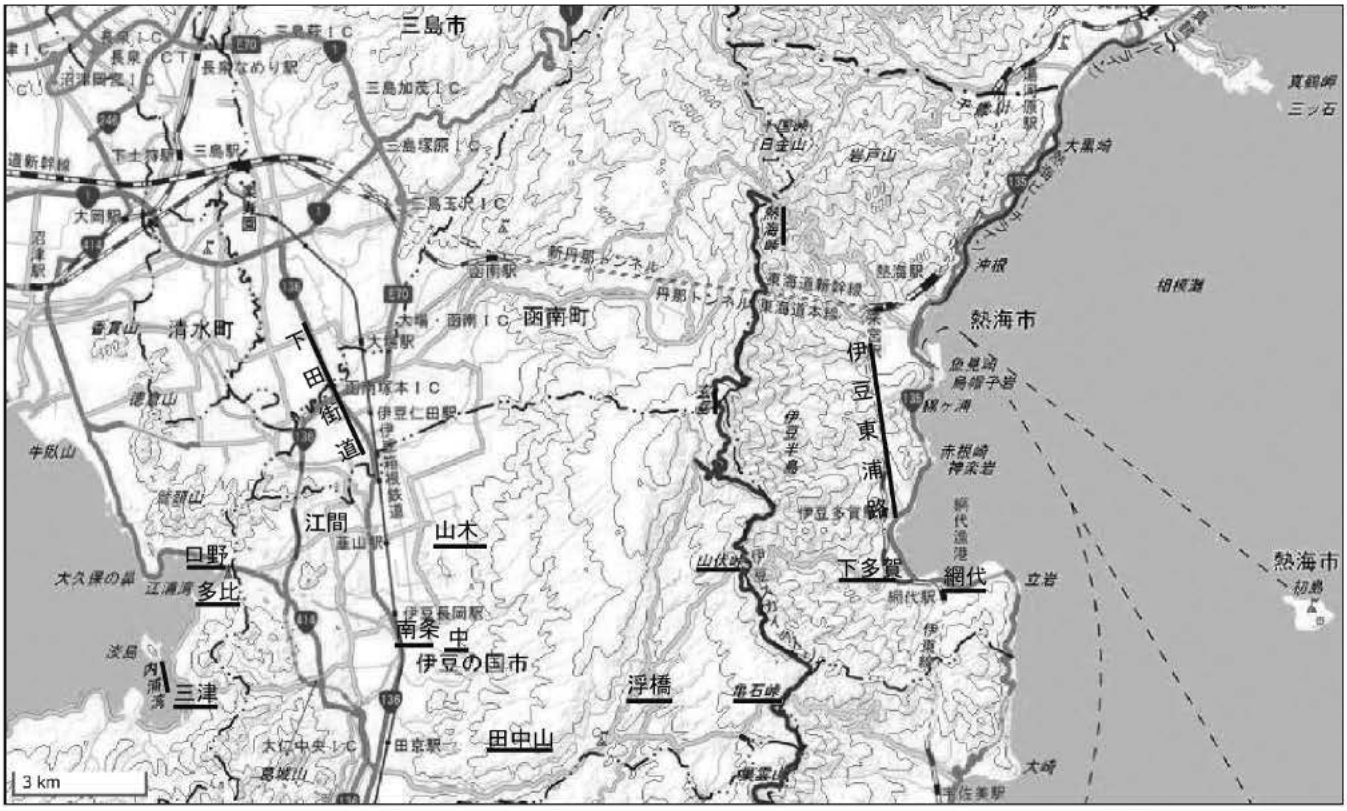
90　2023（令和5）年度　静岡県博物館協会　役員会、総会、事業報告
92　静岡県博物館協会　研究紀要投稿規程


編集・発行
静岡県博物館協会（事務局）
〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
静岡県立美術館内
電 話・054-263-5857　FAX・054-263-5742

デザイン　有限会社 サイズ
発 行 日　2024年（令和6年）3月31日
印　　刷　有限会社 橋本印刷所

# 前近代における伊豆半島北部の東西交通の多様性について―「網代街道」を例に―

熱海市立澤田政廣記念美術館（熱海市教育委員会）　栗木崇




第1図　網代街道関連地図（国土理院GSIMapsより作成）

## はじめに

伊豆半島は近世の重要街道である東海道の通る地域は少なく、三方を海に囲まれた平野部の少ない地形のため、海路に注目されがちだが、下田街道、伊豆東浦路（熱海～下田）といった街道があり、また村々を結ぶ峠道も数多く存在した。

「熱海峠」「山伏峠」「亀石峠」「冷川峠」などの峠には現在も地域の重要な自動車道路が通行しているが、多くの峠道は廃道となり忘れ去られた存在となっている。

この小稿では、そのひとつである伊豆半島北部の東西をつないだ、いわゆる「網代街道」を例に、先行研究、周知の史料や地域に残された歴史資料を見直すことによってその痕跡を明らかにし、前近代の地域間交通の多様性を示すことを目的とする。

## 1　網代街道とは

網代街道とは、伊豆半島北西海岸部の沼津市内浦地区周辺から半島北東海岸の熱海市網代地区を結ぶ道で、東浦路とも呼ばれていた。（註1）

内浦は半島西岸の駿河湾に面した漁村地域で、16世紀末の戦国時代は西浦と呼ばれ、小田原北条氏の直轄領として代官・小代官の支配を受けていた。内浦湾は淡島が湾口を塞ぐ、波風の少ない袋状の湾で、沿岸に多くの漁村が存在し、特に三津村が地域の流通の拠点として発展した（沼津市史編さん委員会2005・2007）。

網代は管見の限りでは文亀元年（1501）の伊勢道者職の売券「国道道者職売券」にある「あしろの里」が史料での初出で、16世紀の後半より港として史料に表れるようになり、『北条氏所領役帳』に記載がなく小代官が置かれて

いたことから、こちらも直轄領であったと考えられる。その背景には相模湾の深海が湾内至近に入り込み、波、風を防ぐ地形で良港の条件を持つため、戦国期の物流の増加、兵站輸送のために重要な港となったためと思われる。

近世の網代港は『天保国絵図伊豆国』などには廻船が60～70艘程停泊できる港と記載されており、これは、下田湊を除けば伊豆東海岸では群を抜く船数である。特に押送船と呼ばれる鮮魚類を江戸へ輸送することを主目的とした帆走・漕走併用の高速船は、網代が伊豆半島で最も早くから確認され、最も多く所有していたとされる（熱海市史編纂委員会1967・胡桃沢2014）。

こうしたことから網代街道は半島北部の東西の海をつなぐ道、特に「活鯛」を夜間に輸送した道として漁業・交通史、民俗学的立場からも注目さている（木村・神野1979・胡桃沢2014など）。

そのルートについては沼津市歴史民俗資料館が展示で示した『伊豆国絵図』などに描かれている内浦から中村（伊豆の国市）➡浮橋➡山伏峠➡下多賀➡網代というルートが一般的な理解になっていると思われ（沼津市歴史民俗資料館2022）、詳細については『韮山町史』『伊豆長岡町史』『大仁町史』などの自治体史の中で、橋本敬之氏が「田中山道」として述べられている。しかし、それらの先行研究は展示や自治体史という性格上、全体的な検討が十分でなく、漁業史等においても鮮魚の高速輸送という点が注目されることから、ルートについては十分な検討がおこなわれているとは言い難い。このような現状で、ルートが定まった一つの道のように語られることは問題があると思われる。

### 3　山伏峠越えルート

まず、各自治体史の中で述べられている山伏峠を超えるルートについてまとめると口野・多比、もしくは三津から花坂・戸沢を越えて長岡へ、狩野川を渡り、南条、そこから立花地区、浅間山の北麓を通り、田中山御林と入会地との境界を通っていき（田中山越え）、北条辻を経由、女塚で亀石峠へ向かう道と分岐し、韮山カントリークラブ南側の金井辻で浮橋に向かい、東の深沢川を越え、MOA大仁農場の中を通り、山伏峠を越えるルートとなる。

このルートを補足する資料として『大仁町史　資料編二　近世』に翻刻されている延文3年（1746）の紀年銘を有する「浮橋大沢地蔵碑刻文」には「其昔自田方東浦往還之通路云大沢野網代海（街）道…」とあることから浮橋大沢地区から網代に向かう道があったことを示している（図2）。

第2図　大沢地蔵堂

伊豆半島東側では熱海市下多賀の伊豆東浦路と山伏峠に向かう道との三叉路（現下多賀バス停付近）に秋葉燈籠（現在は国道135号線沿いに移設）があった。「右　伊東下田道　向　みしま道　左　あたみ道」とあって右下の距離を示す地名の中に「南條江　四里」とあり、南条が東海岸との通路の基点の一つとなることを裏づけている（図3）。また、網代共有文書で『熱海市史資料編』に翻刻されている「治左衛門魚荷一件済口証文写」では網代村百姓の治左衛門が豆州・駿州からの魚荷物が下多賀村を通過した際に馬士の松明取り扱いが原因で荷を奪われたことを訴えており、山伏峠を越え下多賀を経由し、網代に至るルートを裏づけている。

第3図　下多賀秋葉山灯籠

山葉秋

奉燈

向みしま道

左あたみ道

右伊東下田道

是従

下田町江十六里

伊東江三里

三嶋駅江六里

南條江四里

あたみ江二里

小田原江八里

天保三壬辰初秋建之

史料1　下多賀秋葉山灯籠

一方、この他のルートの存在を示すものとして、胡桃沢氏も引用しているが（胡桃沢2014）、『韮山町史第五巻下』に翻刻されている「江戸廻り魚荷差送り引請状（文化四年）」（史料2）は、差出人の中に「駿東郡口野村　魚荷物出口世話人　彦兵衛」が記され、「是迄中村道より東浦」とあることから、口野を出発点とし、中村経由で網代方面へ行く道があったことが確認される。また、宛所が「山木村」の名主で「御村方山道筋」を通ることをお願いしており、「御林続き之御山道」で馬士に松明も使わせない等の文言から、山木村を通り東側の山地に向かう道のことであると思われる。明治時代の地図を参考にそのルートを考えると、「中村道」は中村を経由して北条辻で田中山越えの道に合流する道となり、山木を通る道は口野からの場合は江間から狩野川を渡り、山伏峠で合流するような道になると想定され、山伏峠越えルートでも、別ルートが存在したと考えられる（図4）。

### 4　亀石峠（付近）越えルート

先行研究では山伏峠を越えるルートしか示されていないが、亀石峠周辺を超える網代街道も存在したと思われる。

『大仁町史　資料編二　近世』に翻刻されている「東浦へ差送り魚荷物通路差留一件内済証文（天保五年）」（史料3）は下畑村に出された東浦への魚荷物を差留めた件についての内済証文で、この証文から天保5年（1834）に三津から下畑村を通る通路があったことがわかる。

この史料では下畑を通ることでだけで、その他の通過地点は不明であるが、『田中村誌』には下田街道を境に西は内浦街道、東を網代街道として、御門から川西村を経て内浦へ、三福から北狩野村を経て網代村を通る道と書かれている。また 同書の「田中村全図」（図5）に狩野川の西岸、小坂地区にあたりに「至内浦」と記され、現在の大門橋のところ「小坂の渡」（木村・神野1979）が渡河点であったかと思われる。

小坂より西側の長瀬から三津へ道は明治7年の段階で幅1丈2尺（約4メートル）と当時1丈であった下田街道より幅が広かった（伊豆長岡町教育委員会2000）ことから、重要な交通路であったと考えられる。

差出シ申書附之事

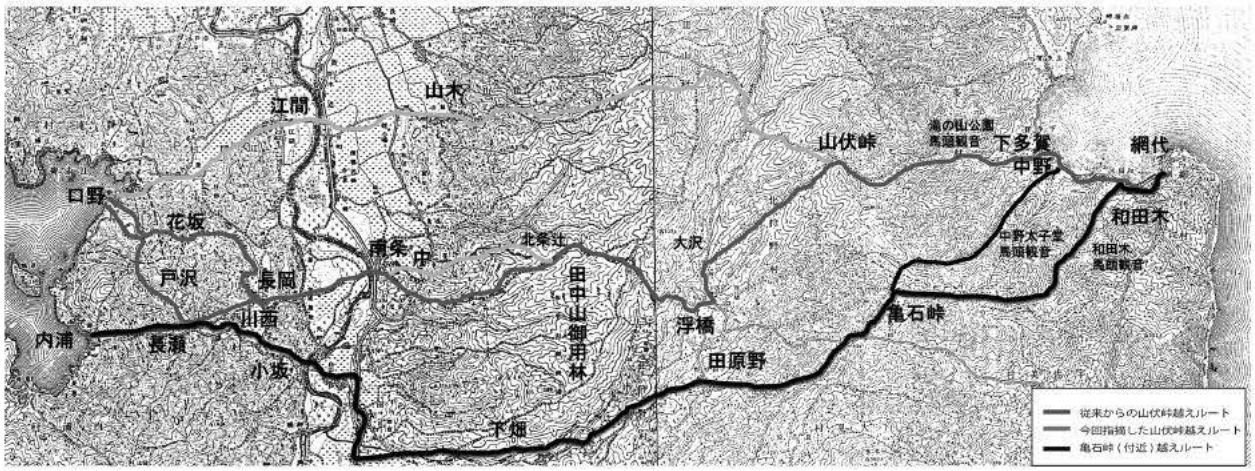
一当浦江戸廻り魚荷之儀、是迄中村道より東浦□差送り申候所、此度少々故障之儀、出来い［　］当時荷主幷世話人其外最寄魚荷馬世話人一同難渋いたし候ニ付、中村道魚荷物馬通路是迄之通ニ被成下度旨掛合中ニ御座候得ども、今以相済兼、右ニ付只今ニも魚荷物等有之候節者、差掛り難□いたし候間、御村方山道筋最寄魚荷馬御通被下度相願候処、格別之以御勘弁中村道通路掛合相済候迄、近内差掛り魚荷物者、御通し可被下旨御承知被成下添奉存候、然上者御林続き之御山道ニ御座候得者我等方ゟ馬士□急度申付、松明等決而不相成万事穏便ニ通ひ度候、道筋猥ケ間敷儀無之様之可取計旨是又被仰聞承知仕候、且御道筋ニ而馬士とも万一心得違ニ而猥之義出来いたし候共、私とも引請御村方へ□御苦労相掛申間鋪候、尤右道筋之義者是迄通行不致道筋ニ付、何時御差留被成候とも、其節者決而通行為致間敷候、依之一同連印を以引請書付差出シ申所如件

文政四年
巳正月

駿東郡口野村
魚荷物出口世話人　彦兵衛㊞
豆州原木村馬世話人　喜三良㊞
同国塚本村　同　友七㊞
同国北條村　同　九七㊞
同国北江間村　同　源蔵㊞
同国韮山村　同　平七㊞

山木村
御名主中

史料2　江戸廻り魚荷差送り引請状（文化四年）『韮山町史第五巻下』P203より転載




第4図　1/5万地形図『沼津町』明治28年・『熱海』明治29年（大日本帝国陸地測量部）を元に作成

為取替申書付之事

一　此度三津村ゟ下畑村江相掛り韮山　御役所江願立いたし候者、当月朔日東浦江差送り候魚荷物、下畑村ニ而通路差留候ニ付、御分一御上納ニ茂相拘り候由を以申立候間、下畑村被召出御糺し御座候処、右者無謂差留候義ニ而者無之旨申立候処申争之義ニ付、扱人貫請向後之義者夜分たり共無滞通路いたし可申上、小前之者者御公儀様江御分一等上納ニ相成候義も不弁、此度取計方茂可有之処、及断候ゟ事起り候段心得違ニ而魚荷物腐肉いたし候分、金五両下畑村ニ而差出し一同取悩候事

右之趣ニ而内済いたし候上者向後相互ニ実意を以差支無之様可致候、依之為取替申所如件

天保五年午年四月

三津村
商人総代
任右衛門　㊞
弥　吉　㊞
喜兵衛　㊞
利兵衛　㊞
御通御請負人
名主
儀右衛門　㊞
吉田村
名主
立入人　甚左衛門　㊞
三福村
名主
同　縫　平　㊞
郷宿
同　文五郎　㊞
同
同　俊　助　㊞

下畑村
名主
良　蔵殿
百姓代
豊　八殿

史料3　東浦へ差送り魚荷物通路差留一件内済証文（天保五年）『大仁町史　資料編二　近世』P649より転載

海岸連絡中央街道速成同盟趣意書

地方ノ開発ハ交通機関ノ完備ニ俟ツ、道路ヲ開拓シテ交通ノ便ヲ図リ、以テ其ノ地方物資ノ集散ヲ迅速円滑ナラシムルニ依リテ、其ノ効果ヲ収メルモノナリ、

曩ニ県費ノ補助ヲ仰ギ、網代、多賀、宇佐美、北狩野、田中各村有志茲ニ見ル所アリ、旧網代街道ヲ修築シテ交通ノ便ヲ謀リ、以テ地方利源ノ発達ヲ企画シ、網代改良道路組合ナルモノヲ組織シテ、之レガ修築ニ努力シタリシモ、漸ク北狩野村下畑地先ニテ工事ヲ中止シ、残余ハ継続事業トシテ時期ノ到ルヲ待チタリシモ、遂ニ其俱ト相成、空シク八ケ年星霜ヲ経ルニ至ル、誠ニ遺憾ノ至リナリ

今回再ビ其当初ノ目的ヲ継続シ、東海岸ヲ走ル県道ニ合センガ為メ、先以テ宇佐美村ニ貫通連絡スル道路ヲ改築シ、次デ、亀石峠ヨリ多賀村ヲ経テ網代港ニ到ル道、及ビ宇佐美村向原田上ヨリ字峯ニ出デ、塩木道ヲ経テ横磯ニ至リ、伊東町ニ達スル道路ヲ改築セントス、幸ニ関係町村ノ有志各位ヲ挙ニ賛シ、声ヲ大ニシテ県費ノ補助ヲ仰ギ、速成同盟会ヲ起シテ之ガ完成ヲ期セントス

速成同盟会略則

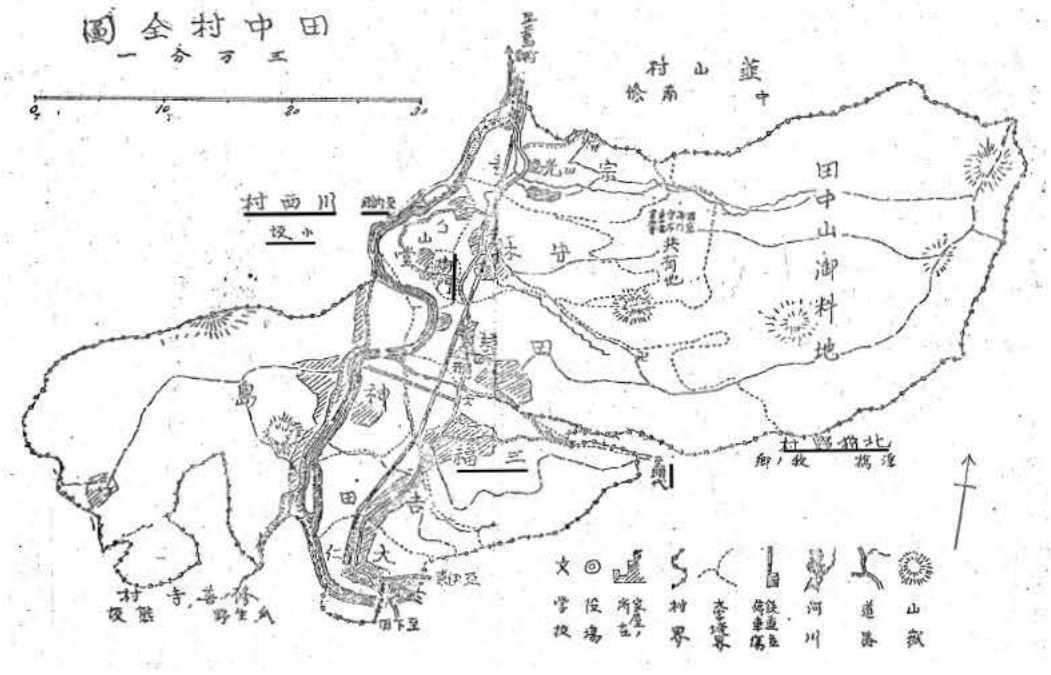
一、本会ヲ東海岸連絡中央街道速成同盟ト称ス

一、本会ノ目的ハ県費ノ補助ヲ仰ギ、旧網代改良道路修築ノ終点北狩野村下畑地先ヨリ、浮橋、田原野間字字間ノ峯ヲ改築シ、自動車、自動車、馬車、荷車等ノ往復ニ弁ナラシムルニアリ、猶進デハ多賀村ヲ経テ網代港及亀石峠附近ヨリ右折シテ、塩木道ヲ経テ横磯ノ県道ニ連絡スルモノトス

右ノ目的ヲ達成センガ為メ、本部長ヲ会長ニ推戴シ、関係各町村長ヲ副会長トス

（以下省略）

史料4　東海岸連絡中央街道速成同盟趣意書（昭和初期）『大仁町史　資料編三　近現代』P233より転載




第5図　田中村全図 『田中村誌』より転載

『大仁町史　資料編三　近現代』に翻刻されている「東海岸連絡中央街道速成同盟趣意書」(史料4)は昭和初期の東浦路へ接続する道路開発を目的とした会の趣意書である。

「旧網代街道ヲ修築シテ交通ノ便ヲ謀リ」とあり、新しく道を造るのでなく、昔からあった街道を修復すると述べられている。そして、「先以テ宇佐美村ニ貫通連絡スル道路ヲ改築シ、次デ、亀石峠ヨリ多賀村ヲ経テ網代港ニ到ル道…」とある。ここでいう旧網代街道は亀石峠から多賀村を経て網代港に至る道であって、山伏峠を越える道ではないということになる。

地図上で見ても下畑から山伏峠へ向かうと北への遠回りになり、また、山伏峠の標高は509m(以下、国土地理院GSIMapsによる)であるが、亀石峠の標高は444mと低く、伊豆の国市板橋地区と熱海市の林道中野線を下る市境あたりを峠と想定しても476mである。特に「活鯛」など鮮魚を押送船で網代から運ぶ場合はできるだけ早く運ぶ必要があり、下畑を通るルートは距離が短く、標高が低くなる亀石峠近くを通行した蓋然性が高いと思われる(註2)。その一部は鹿ヶ谷ハイキングコースして近年まで活用されていたようである(図6)。

明治期の地図を見ても田方平野から浮橋盆地を経て東海岸への山道が多数確認でき、前近代においては日常の交通路として存在していたと思われる。

こうした峠道の東海岸集落へ降りていく途中には、近世の馬頭観音が確認できるところもある。

和田木の集落より水神川上流にある馬頭観音は小田原合戦の際に豊臣秀吉軍が軍馬の徴発を行ったという伝承があり、近代の日清・日露戦争でも軍馬の検査場であったとされる(図7)。下多賀中野(かつての中村)の集落より仲川上流にある太子堂の敷地にある馬頭観音の中には文化9年(1812)の紀年銘も存在する(図8,9)。また山伏峠へ向かう宮川上流にある滝の山公園の道路沿いにある馬頭観音の中にも近世と思われる三面の馬頭観音が確認できる(図10,11)。これらは集落より東の峠道に向かう途中で川筋という水場が置ける立地が共通しており、峠道の傍証となる可能性があろう。

また、この地域と多賀、網代地区の交流を示すものとして田原野の子神社の棟札がある(表1・表2)

納められた棟札の中に「和田木村　大光院」が確認できるが、大光院は当山派末の修験寺院であった(『豆州志稿』)。他にも浮橋の賀茂神社に合祀されている稲荷神社には明和9年(1772)の棟札に「網代　大工　清六　大仁善左エ門(網代村の岡本善左エ門か)」の名前が確認され、また『大仁町史　資料編二　近世』に翻刻されている「豆州長者ヶ原新開御免藺試植付伺書」には文化2年(1805)に下多賀村の多右衛門が開墾を試みたことが記述されており、峠を越えた交流の一端を見ることができる。

第6図　鹿ヶ谷ハイキングコースの標識

第7図　和田木馬頭観音

第8図　中野太子堂

第9図　中野太子堂の文化9年紀年銘を有する馬頭観音

第10図　滝の山公園馬頭観音群

第11図　滝の山公園内の古い馬頭観音

表1　田原野子神社の大光院棟札一覧

| 棟札年号 | 目的 | 多賀・網代村関連の人名 |
|---|---|---|
| 嘉永 7.4.14 | 再建遷宮 | 行者 和田木村 大光院城達 |
| | | 大工 網代村 兵治良 |
| 嘉永 7.4. 吉 | 山王権現再建 | 行者 和田木村 大光院城達 |
| 嘉永 7.4. 吉 | 天照皇大神宮再建 | 行者 和田木村 大光院城達 |

表2　田原野子神社別殿の大光院棟札一覧

| 社名 | 棟札年号 | 多賀・網代村関連の人名 |
|---|---|---|
| 水神社 | 嘉永 7.4. 吉 | 行者 和田木村 大光院城達 |
| 金毘羅権現 | 天保 8.10. 祭日 | 行者 大光院 |

伊豆の国市教育委員会2009より作成

**おわりに**

この小稿では従来より示されている山伏峠越えルートを裏づける地域に残る資料の紹介とともに、別ルートの存在について指摘し、さらには南側の亀石峠を越える網代街道が存在した可能性が高いことを指摘した。

こうした多数のルートが存在したことは、今回取り上げた史料も村落間のトラブルがきっかけで作成されたものであり、史料2で中村を通るルートから山木への変更があったように、当時の道は社会的状況によっては、容易に通れなくなる可能性が存在していたことも一因である。

また、前述の浮橋大橋地蔵碑刻文には「在地蔵堂其上亥年諸国一統大洪水田畑民□悉破壊而尊像□埋止通路…」と続いているように、自然災害によっても道は通れなくなるリスクも常に存在していた。

このように前近代社会において、村落間の対立や災害などのリスクを分散するためにも交通路はいくつかの選択肢が必要であったと思われる。

また、鮮魚を夜通しで急いで運ぶ場合と、通常の運送、日常の地域間の交流、旅行など、その目的によっても道の選択は変わるはずであり、多様性が存在したのであろう（註3）。

ある意味では当然の事であり、道の違いなど取るに足らない話なのかもしれない。しかし、こうした小さな歴史的な痕跡は今、何らかの形で伝えていかなければ、消滅してしまう可能性がある。『伊豆東浦路の下田街道』の巻末で加藤清志氏・田畑みなお氏が述べられた「伊豆東海岸に江戸時代かられっきとした道路があったことを、歴史から消し去ってはならない。地元の人間がそれを記録にしなかったら、永久にわすれさられてしまう」という危惧は、東浦路より周知されていない網代街道については一層当てはまることである。

急速な超少子高齢化社会に突入している現在において、博物館等にも文化財散逸の危機を救済したり，地域の文化財のデータバンクとなったり、地域の特色を生かした地域振興，観光振興策と連携することも必要である。といった社会的な意義・機能が求められている（文化審議会2017）。

好むと好まざるとに関わらず文化財や博物館関係者は社会的変化や要請に対応せざるを得ない中ではあるが、地域博物館においては、このような時だからこそ、地域が注目しなければ、消滅してしまうような資料の情報収集、可能であれば保存していくことが重要かと思われる。そうした資料の積み重ねが地域の特性を再発見することになり、そのことが地域の博物館的施設の存続、活用にもつながっていくと思う。

註1　東浦路は宇佐美へ行く道も含めて指す場合もある。本文で述べた田中村の例以外にも、「三津往還」「内浦往還」「南条往還」などあり、村々で呼び名は様々であったと思われる。

註2　明治期は網代から病人を三島方面に運ぶ場合は亀石峠を越えて伊豆長岡へ出たという話も伝わっている（伊東市北中学校郷土研究部編1971）

註3　旗本酒井家家臣の箕川墨江が天保5年（1834）に領地の視察検分のため伊豆を訪れた紀行文『伊豆の国懐紀行』では、丹那から熱海へ行くのに熱海峠ではなく、玄岳を超えている。また浮橋を訪れた時の記述「爰は伊東網代の濱方などの通路なり。魚商人馬荷なども行きかふて少し賑ひて見ゆ…」と、その賑わいが先行研究でも引用されることがあるが、夜間に半日足らずで行う活魚輸送の場合、浮橋集落内を通過したかどうかは検討の余地があると思われる。また、今回は道の歴史的変遷については、資料的な限界もあり、ほとんど言及できなかった。機会があれば改めて検討してみたい。

**参考文献**

田方郡田中村1913『田中村誌』

伊東市北中学校郷土研究部編1971『家族の歴史（祖母・父・母）網代峠の研究』（復刻版：森山俊英2004）

熱海市史編纂委員会1967『熱海市史』上巻

熱海市史編纂委員会1972『熱海市史』資料編

大高吟之助1972『郷土多賀村史』

大高吟之助1974『網代郷土史』

南条区誌編纂委員会1976『伊豆韮山南條区誌』

木村博・神野善治1979『狩野川－その風土と文化』

中田祝夫編1988『江戸時代の伊豆紀行文集』

熱海市教育委員会1989『下多賀神社水浴せ式－伊豆・駿河の水祝い－』

韮山町史編纂委員会1991『韮山町史第五巻下』

静岡県1996『静岡県史 資料編8中世四』

伊豆長岡町教育委員会2000『伊豆長岡町史　中巻』

加藤清志・田畑みなお2004『伊豆東浦路の下田街道』

浮橋村史編纂委員会2005『浮橋村史』

田原野村史編纂委員会2005『田原野村史』

沼津市史編さん委員会2005『沼津市史　通史編　原始・古代・中世』

沼津市史編さん委員会2007『沼津市史　通史別編　漁村』

伊豆の国市教育委員会2009『大仁町史　資料編二近世』

伊豆の国市教育委員会2011『大仁町史　資料編三近現代』

伊豆の国市市長戦略部観光文化局文化振興課2014『大仁町史　通史編二　近現代 民俗 美術』

胡桃沢勘司2014「伊豆の水陸連携魚輸送－馬士と押送船－」『民俗文化』No.2　近畿大学民俗学研究所（胡桃沢勘司2019『押送船－江戸時代の小型快速船』）に所収

文化審議会2017『文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について（第一次答申）』

三島地域資料研究会2017『武田善政作　伊豆国全図　三島地域資料研究会史料集1』

沼津市歴史民俗資料館2022『生魚、走ル！～沼津の海産物輸送と交易～』

# 芹沢銈介と静岡の茶業

静岡市立芹沢銈介美術館　山田優里

## 1　はじめに

静岡市生まれの芹沢銈介は、染色家として民藝運動に参加して数々の作品を生み出し、1956（昭和31）年に「型絵染」の重要無形文化財保持者（人間国宝）として認定されたことから、民藝運動の作家、染色界の巨匠として広く知られている。実際にこれらの側面で残した功績は大きく、決して間違いとはいえないが、それのみで芹沢を理解するのには偏りがあるように思える。34歳で染色家としてデビューし、39歳で東京の蒲田へ上京した芹沢だが、静岡にいた20代の頃はデザイナーとして活動していたことがわかっている。今回その具体的な例として、ポスター懸賞の当選や静岡県茶業組合連合会議所に関する仕事が明らかとなり、これらが後の創作活動に大きな影響を与えていたことがわかった。特に後者は、静岡の産業として知られる茶業の最盛期にその広報活動に携わっていたという点で興味深い内容といえる。本稿では、これらの仕事が後の芹沢に与えた影響の大きさを考え、芹沢銈介という作家を改めて見つめなおす機会としたい。

## 2　ポスター懸賞への応募

1895（明治28）年5月13日、静岡市本通一丁目の呉服太物卸商・大石商店に生まれた大石銈介は、幼少期から絵を得意とし、静岡中学校（現：静岡県立静岡高等学校）在学中も画家になることを夢見ていた。しかし卒業間近に裕福な実家が火災に遭ったことで、手に職を持つため東京高等工業学校（現：東京工業大学）工業図案科への進学を決め、デザインの道へ進む事になる。卒業後は静岡へ戻り、1918（大正7）年から静岡県工業試験場の技手として地元の職人や業者に図案指導を行い、1919（大正8）年からは静岡県立静岡工業学校（現：静岡県立科学技術高校）の教授嘱託として学生への図案の指導にあたるなど、いくつかの職を兼務していた。一方、プライベートでも様々な活動をしていたが、中でも積極的に取り組んだのがポスターなどの懸賞応募である。1921（大正10）年1月には、大阪府立商品陳列所のポスター懸賞に入選したことで同所から招聘され、図案課の技手として勤務することになる。翌年1922（大正11）年10月には依願退職し帰静するが、その後にかけて懸賞応募は続けられたようで、芹沢はこの頃について、「商業デザインのいろんな懸賞に応募し（中略）あまりそういうことで稼ぐのが恥ずかしいくらい[1]」にたびたび入賞したと語っている。これまでその具体的な内容は不明であったが、今回、実際の当選例が2つ明らかとなったため、以下に記す。

まず一つ目は、1923（大正12）年に実施された貯金局の「貯蓄奨励ポスター」懸賞で、芹沢は二等一席に入選している［図版1[2]］。これは旧郵政省の一つ貯金局が勤検貯蓄の奨励を目的として募集したもので、全国から集まった約1000点の作品は貯金局にて予選を行った後、帝国美術院・黒田清輝に審査が委嘱された。当選者は「逓信協会雑誌」5月号に掲載され、その中に「二等　静岡　芹澤銈介　二九　図案自営　東京高工図案科卒」と記されている。黒田からは、「この図案はポスターとして最もまとまりの付いたもので、描き方にも面白味があるが絵と標語とのつなぎがたりないようである[4]」との評を受けている。当時、貯金局のポスターは「官庁で出したポスターと名付けらるべきものの内の嚆矢と云ってよい[5]」ほどの定評があり、アメリカの新聞にも「ポスター芸術上、世界のそれと歩調を共にして進んでいる[6]」と評されていたという。28歳の芹沢がこの先進的な懸賞応募に挑戦していたのは興味深い事実であり、その評価は全国的に見ても高い水準に達していたが、まだ未熟な点も指摘されていたことがわかる。

【図版1】貯蓄奨励ポスター懸賞で入選した作品

【図版2】能率展覧会ポスター懸賞で二等に入選したと思われる作品

二つ目は、1924(大正13)年に実施された能率増進研究会の「能率展覧会」ポスター懸賞で、兄・大石祥一との連名で二等に入選し、太田三男との「文金図案社」で選外佳作に選ばれている。当選者は「能率増進研究」第十号に掲載され、「入選　二等　大阪府東成郡古市村千林一二五一　大石　祥一、静岡市安西一丁目　芹澤　銈介」、「選外佳作　静岡市　文金図案社[7]」と記されている。これについては募集の詳細が不明だが、当選図案のうち一等と二等は同誌の別頁に図版が掲載されている。キャプションがないため判別がつかないが、掲載の順番や頁内の構成から判断すれば、おそらく[図版2[8]]が二等であると思われる。兄の祥一について芹沢はほとんど語っていないが、1917(大正6)年頃から銈介が考案した木工玩具を製造・販売したり、1937(昭和12)年に「染色屏風の会」と題した芹沢の型染作品の頒布会を行うなど、兄弟で親しく活動していたようである。また太田三男は、静岡市清水区興津にあった静岡県紙糸工業組合に所属し「紙布」を制作、民藝運動にも関わった人物である。1918(大正7)年頃に芹沢と「文金図案社」を興し、広告図案や店舗の飾りつけを手がけたり、広告祭で「花車まで造って大はしゃぎ[9]」するなど楽しんでいたようである。1928(昭和3)年には「千草糸[10]」による袋物の製品を共同で制作し、これは後に市内の内職品になったという。この当選はいずれも芹沢個人の応募ではないという点が注目される。この頃から人と協力してもの作りをすることも嫌いではなかったようで、その一つに懸賞応募があったことがわかった。1つの懸賞に少なくとも2通りの応募をし、いずれも審査員の目に留まったのだから、やはりその技術はある程度高かったと考えられる。

2年連続となる当選例が判明したことにより、先述の芹沢の回想が裏付けられた。他にも、1923(大正12)年9月に「丸見屋商店寄贈 伊東胡蝶園寄贈 歌舞伎座緞帳」懸賞に応募しようとしたが、9月1日の関東大震災により中止となったことがわかっている[11]ほか、「朝日新聞のポスター[12]」や「足袋屋の懸賞[13]」、「その他、新聞広告、各府県等の懸賞[14]」で入選したとも回想しており、その例はさらに多かったものと思われる。芹沢が当時ポスター懸賞に高いアンテナを張って挑戦した背景には、東京高等工業学校や大阪府立商品陳列所での学びや経験があった。そこで培った腕を試し、また技を磨く場として、懸賞応募を積極的に活用していたのではないだろうか。後に型染でポスターやマッチラベル、書票などの作品を数多く制作することになるが、その根底には染色を始める以前のこうした活動があるということを知っておく必要があるだろう。

## 3　芹沢が過ごした時代の静岡の茶業

さて、このころ芹沢は静岡市の安西や北番町に住んでいた。芹沢の静岡時代の居住地を整理しておくと、本通一丁目(1895-1913)、新通(1913-1917　※1913年7月～1916年7月は東京)、安西一丁目(1917- 1924 ※1921～1922は大阪)、北番町(1924-1927)、鷹匠三丁目(1927-1930)、三番町(1930-1934)の6箇所だが、本稿ではこのうち安西や北番町に住んでいたことに注目したい。安西と北番町は当時茶業で繁栄した地域であり、ここで生活していたことが後に茶業の仕事に携わるきっかけになったと考えられる。ここでまず、当時の茶業について簡単に記しておく。

静岡の茶業は、1899（明治32）年に清水港が国際貿易港として開港し、1906（明治39）年に輸出船の寄港が可能になったことにより飛躍的に発展した。それまで横浜まで運んで輸出していた茶を、集散地の安西・北番町により近い清水港から輸出できるようになったことで、明治末期から大正初期にかけて製茶会社は次々に横浜から静岡へ移転した[15]。これに伴い鉄道網も発達し、1929（昭和4）年には安西−静岡駅−新静岡をつなぐ路面電車[16]も開通した。県内各地から安西・北番町に集められた茶は清水港へ運ばれ、主に米国へ大量に輸出された。清水港の貿易統計によると、1911（明治44）年は輸出総額872万円のうち99.2％の865万円が、1924（大正13）年は1352万円のうち86.1％の1164万円が緑茶[17]で、静岡県の産業の中でも群を抜いていたことがわかる。また北番町には大きな製茶工場が軒を連ねていて、そこで働く人は5千人以上にのぼり、毎朝5時半から夜遅くまで出入りしていたという[18]から、雇用の面でも茶業は大きな存在だったといえる。それだけでなく、付随する飲食業などでも茶業が静岡の産業を支えていた。例えば外商が毎年茶の時期に合わせて来静するが、その際には必ず浮月楼や求友亭といった一流料亭で接待が行われた。当時の県庁などの宴会費が一人1円50銭ほどであったのに対し茶業の接待は一人5円ほどを費やした[19]というから、その豪勢さや経済への影響がどれほどのものだったのかが伝わる。

芹沢は1917（大正6）年に芹沢たよと結婚し芹沢姓となったが、その芹沢家があったのは現在の安西一丁目で、「安西通り」（県道354号）に面していた。たよ夫人は当時の様子を次のように回想している。「私の家は（中略）その頃はしもた屋でした。茶商が多く集まった町で、ずいぶんと賑わっていましたよ。うちのあたりは肉屋、ブリキ屋、居酒屋なんかが並んで、それで向側は茶商、棒屋、紺屋……、才取りなんかの往き来でもう忙しくてね[20]」。また、向かいに住んでいた知人は次のように話す。「お茶時ともなれば朝、県内各地からの生産者が静岡駅に降り、待ち受ける才取衆に見本缶袋を渡します。それを受け取った彼らは自転車に飛び乗り目指す問屋へまっしぐら。一足も早くと競い、「ハヤ」と呼ばれて壮観でしたが怖かったものです。（中略）そこここの製茶工場からは、むんむんするお茶の匂いの中より重い茶箱を担ぐ「ヤレコノサンヤドッコイキタサンヨ」の威勢の良い掛け声が通りに流れ、お茶師さんたちと茶箱を積んだ大八車、馬力、リヤカーなどが行き交い、町に活気が溢れます[21]」。こうした回想からも、茶の集散地であった安西界隈の賑わいぶりが伝わる。たよ夫人も「棒拾い」の内職をしていた[22]というし、町全体が茶業で成り立っていたといえるだろう。芹沢はまさにその最中でデザイナーとして活動していたのであった。

## 4　静岡県茶業組合連合会議所の仕事

### 4−1 博覧会のディスプレイ

では、芹沢は具体的にどのように茶業に関わったのだろうか。まずはその関わりを知るきっかけとなった3つの記述を以下に記す。

①「昭和三年　上野公園の大礼記念国産振興博覧会の静岡県茶業組合連合会の展示をデザインし実施する。」（芹沢銈介自筆年譜／『自選芹沢銈介作品集 下』築地書館 1968）
②（聞き手：昭和三年、上野公園で開かれた、大礼記念国産振興博覧会ですね、これに静岡県茶業組合連合会が参加して、先生はその間割、展示、陳列を受け持たれたと伺いましたが。）「芹沢：この博覧会も私にはなかなか忘れられないものです。第一にこの陳列を初めとして、以後各地、北海道や朝鮮その他に出張して陳列をやりました。みんな楽しい思い出です。」（「回想3　静岡を離れるまで」／『芹沢銈介全集』月報3第10巻　昭和55年10月　中央公論社）
③「私の関係する茶業界は静岡の産業の中では新しい知識を取り入れた方で、昭和三年上野公園で開かれた大礼記念国産振興博覧会では静岡県茶業組合連合会のデザインと実施を芹沢君にお願いして、斬新さでアッと云わせたことがあった。」（大石鵜一郎「旧制静岡中学校時代の芹沢銈介氏」／「芹沢銈介小品展」図録　昭和53年10月　西武美術館）

ここから、1928（昭和3）年に東京の上野公園で開催された大礼記念国産振興博覧会において、静岡県茶業組合連合会の出展に関する企画・実施を芹沢が担当したということがわかる。同所は1928（昭和3）年3月24日から5月27日まで開催されたこの博覧会に出展しており、その様子は同所が発行する機関誌「茶業界」に掲載されているため、以下に引用する。

「静岡県茶業組合連合会議所の出品は第一会場西二号館

の一廓にあり日本楽器、帝国製帽両会社と共に独立したる区域を占め他の出品物に対し斬然一頭地を抜き陳列の様式は陳列箱の左右に雛壇を設けこれに県下各郡市茶業組合員の出品したる各種製茶を蛸罎に納めて調和よく揃べ中央に『お茶は静岡、山は富士』の標語を現わし其下前面に二段の棚を作り上段には汽船数隻、下段には汽車数個を置き電動機に依りて相異なる方向に進行せしめ以って一ヶ年間の静岡茶輸移出数量を説明するの仕掛けとなし興味深く全国に於ける静岡茶の地位を会得するように施されたり、然も加うるに色彩採色の調和を入念になしあり、最も清新にして最も明るい感じを漂わしめ居れり[23]。」

【図版3】大礼記念国産振興博覧会の展示風景(1928)

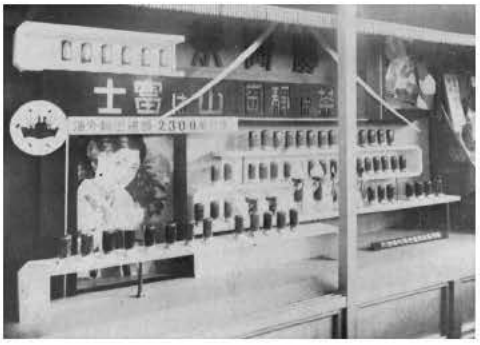
先の3つの記述によれば、この展示を芹沢が務めたということになる。採色の調和が入念で「最も清新にして最も明るい感じ」を漂わせたという点は、後の型染作品に通ずるものがあるようにも思える。電動の汽船や汽車を使った演出をするなど、当時としては斬新だったこの展示は、来場者の注目を集めたようだ。「静岡の産業の中では新しい知識を取り入れた方」だったという同所の広報活動において「斬新さでアッと云わせた」のだから、芹沢の展示は高く評価されたのだろう、これを機に茶業組合の仕事に携っていくことになる。ではここで、依頼者である静岡県茶業連合会議所や、そのきっかけを作ったと思われる③の大石鵜一郎について簡単に記しておく。

静岡県茶業組合連合会議所は、1884(明治17)年に創業した静岡県茶業組合取締所が、1887(明治20)年の茶業組合規則発布とともに廃止され、代わりに創設された組織である。幕末の日本開港以降横行していた不正粗悪茶を取り締まり、組合に強制加入させた茶業者を監督するとともに、静岡の茶業の発展のため、博覧会出展を含め様々な活動を行っていた。茶業の繁栄と並行して同所は県内でもトップクラスの組織となり、その繁栄ぶりは「茶商組合連合会議所の会頭には、歴代の知事も頭が上がらなかったと噂され、財政的に豊かな同連合会は、県の助成金など全く当てにしていなかった[24]」といった逸話がのこるほどであった。当時の茶業界を牽引する存在だったといえる。

次に大石鵜一郎(旧名:勝太郎)は、芹沢とは静岡中学校時代の同級生(28期生[25])で、③は1978(昭和53)年に西武百貨店静岡店にて開催された静中・静高創立百周年記念「芹沢銈介小品展」図録に寄せられた文章[26]の一部である。1895(明治28)年に横浜で生まれ、横浜居留地36番館の貿易商「エブリル商会」の工場長であった父・鵜一郎[27]の下で育つ。1909(明治42)年に静岡市へ転居し、1908(明治41)年に静中へ入学、5年のうち3年程は銈介と同じクラスだった[28]という。卒業後は吉川合名会社北番町工場に入社し、1920(大正10)年には丸一大石商店製茶販売として独立、以後88歳まで茶業に携わった[29]。静中時代の関係性から考えても、茶業関係者である大石が芹沢に仕事を依頼した、または推薦した可能性が高い。学生時代から「絵の代作をやってもらった連中もあった[30]」というほど絵がうまかった芹沢が、同じ町で現役のデザイナーとして活動していることを知り、依頼したのではないだろうか。

さて、②で自身が「以後各地、北海道や朝鮮その他に出張して陳列をやりました」と述べていることから、これ以降の同所の博覧会出展状況と芹沢の年譜を照らしてみた結果、少なくとも以下の4つの博覧会と芹沢の旅先が一致していることがわかった。

【図版4】朝鮮博覧会の展示風景(1929)



【図版5】開道五十年記念北海道拓殖博覧会の展示風景(1931)

【図版6】海港博覧会の展示風景(1931)

【図版7】満州大博覧会の展示風景(1933)

A　朝鮮博覧会[図版4][31]
期間:1929(昭和4)年9月12日～
場所:朝鮮京城府景福宮

B　開道五十年記念北海道拓殖博覧会[図版5][32]
期間:1931(昭和6)年7月12日～8月20日
場所:北海道札幌市中島公園、北海道物産館

C　海港博覧会[図版6][33]
期間:1931(昭和6)年7月12日～8月20日
場所:北海道小樽市

D　満洲大博覧会[図版7][34]
期間:1933(昭和8)年7月23日～8月31日
場所:大連市

当時は全国的に博覧会が頻繁に開催されており、日本を代表する茶業組織として国内外に積極的な広報活動をしていた静岡県茶業組合連合会議所は、かなりの割合で出展していたようである。上野の例と同様にこの4例も記事に芹沢の名は記されていないが、同時期に同地に赴いていることに加え、1～3の朝鮮と北海道は芹沢の発言から、4の大連は同時期に同地で芹沢の個展が開催されている[35]ことから、ほぼ間違いないと考えてよいだろう。このことから、少なくとも1928(昭和3)年から1933(昭和8)年までは静岡県茶業組合連合会議所の博覧会展示を任されていたことがわかる。では、上野で好評だったという展示の観点からこれらの内容を見ていくことにする。

「茶業界」に掲載された写真をみると、どれも異なる構成でそれぞれに趣向を凝らしているのが伝わる。ウィンドウディスプレイという広報媒体は明治末期から昭和の初期にかけて流行し、商店などがその手法や効果をこぞって追求した。芹沢が勤めた大阪府立商品陳列所でも特に力を入れていたようで、同所で1918(大正7)年に竣工した広告館には長さ40mのショーウィンドウがあり[36]、「一大飾窓が大阪第二の盛況と称する松屋町筋に延々として長蛇の横はれるが如く[37]」という様子で注目を浴びていたという。芹沢は図案課に技手として勤めたが、業務内容には「意匠図案並に商品広告等に関する展示・指導」があったから、こうした設備も手がけていただろう。芹沢が勤める前年の1920(大正9)年12月には、創立30周年を迎えた同所で大阪広告協会主催の大阪店頭装飾競技会が開催され、資生堂や白木屋などの商店がウィンドウディスプレイの技を競った。同所が発行する「通商彙報」には審査委員長(中澤工学博士)の評が掲載されており[38]、7つの審査項目が挙げられて

いる。それは①直感的見た目②色と形の取り扱い方③中心点④店舗の構造（永久的なもの）と店頭の装飾(一時的なもの）との関係⑤商品に相応しい装飾⑥独創性⑦照明の扱い方、である。これを［図版7］の満洲の展示に照らしてみると、少なくとも4つの項目において合致する点が認められる。

まず主題の「静岡茶」の文字を大小3つの円に収めてリズミカルに配置し、コントラストの高い太字で目立たせている点や、小さいうえ複数並べる必要がある商品の茶を雛壇に陳列することで、縦方向に目線を広げて見やすくしている点は、②の工夫である。次に、中央上部に最も目立つかたちで「茶」の文字を配置し、次に日本の茶摘娘と茶椀を持つ中国服の女性を左右に大きく配置することで、主題を頂点とする三角形を作り全体のバランスを保っている点は、③を意識しているといえる。そして同所の標語「お茶は静岡、山は富士」を示す茶と富士山（右部背景）や、日本と中国の茶貿易を表す両国の女性像によってテーマを明快に伝えている点、さらに当時欧米で流行していたという「ショーカード」と呼ばれるものを用いて、製茶産額や輸出額などの情報を明示している点は、⑤であるといえる。そして中央の「静岡茶」の部分を電気点滅式の仕掛けとし、当時の先進的な技術を積極的に用いて人目を引く工夫をしている点は、⑥につながっている。

こうしてみると、当時のウィンドウディスプレイの要点は確かにおさえられているようである。2年足らずではあったが、十分な設備のもとで最先端の情報を得られた大阪での経験は、茶業の仕事で大いに活かされたといえるだろう。「茶業界」に掲載された他の博覧会の展示風景を見てもこれらの項目に合致するものが多く、自身も「以降各地」「その他」で陳列をしたと述べていることから、芹沢が手がけたのは実際には4ヶ所だけではなかったかもしれない。上野の展示が成功した結果、以降の展示も続けて任された可能性は高いといえるだろう。

後に芹沢は陳列を作品と考え、自らの作品や収集品を用いて熱心に陳列を行い、それは芹沢の特徴的な仕事の一つとなった。1936（昭和11）年に開館した東京の日本民藝館では、柳宗悦からその腕を認められ展示の多くを任されたし、後年に開催されたパリ展など芹沢の個展では、徹底的なこだわりを見せ、その妥協のなさで周囲の関係者を困惑させたこともあったという。それほどまでに展示に対して並ならぬ思いを持っていたが、その原点は26歳、27歳の大阪時代にあり、それを数々の博覧会で実践したことで、陳列の技術や創造性を体得していったのかもしれない。上野の展示から53年後の1981（昭和56）年、静岡市立芹沢銈介美術館が開館した際のインタビュー[39]で、聞き手の「我々ですとディスプレイと簡単に一言で言ってしまいますけれども、やっぱりかなりの細かい配慮ってものが必要なんですね。」という問いかけに対し、86歳の芹沢は次のように語っている。「やっぱり商店のディスプレイだってね、こう置けば売れるとかね、そういう商店の感覚ってものが特別にあるんですよ。それは自然にただ並べるだけじゃ、商売にならない。それと同じようにね、僕らのもそうですね」。上野の博覧会と同じころ柳宗悦に出会い、以降の「陳列」は商業的陳列とは一線を画すものとなったが、晩年に「陳列」を改めて商品のそれに例えていることは興味深い。大阪府立商品陳列所や静岡県茶業組合連合会議所での仕事は、いわば「陳列という名の創造」のきっかけとなり、展示の基礎としても生涯忘れられないものだったのだろう。

### 4-2 機関誌の装幀

芹沢が任されたのは博覧会の展示だけではなかった。静岡県茶業組合の機関誌「茶業会」の装幀も数年間にわたって手がけたようである。「茶業界」は、1907（明治40）年に設立された茶業研究会の会報「茶業の友」を、1910（明治43）年に静岡県茶業連合会議所が「茶業界」と改題し刊行したものである[40]。現存する1910（明治43）年から1940（昭和15）年までの「茶業界」を確認したところ、1936（昭和11）年1月から1940（昭和15）年3月までの5年間計51冊（各年12か月は同じ図案）は目次に「表紙　芹澤銈介」と明記されており、芹沢が手がけたことがわかった［図版8[41]、9[42]、10[43]など］。しかし実際は、1929（昭和4）年ころから表紙や小間絵［図版11[44], 12[45]など］、挿絵［図版13[46], 14[47]など］に芹沢の作風が見られるため、その頃からすでに手がけていた可能性もある。博覧会の展示を1928（昭和3）年から任されたことを踏まえると、1929（昭和4）年から装幀を任されたとしても不思議ではない。確証はないものの、もし仮にこれが正しければ、1936（昭和11）年1月から1940（昭和15）年3月までの5年間に加えて、1929（昭和4）年から1935（昭和10）年までも手がけていたことになり、計12年間は「茶業界」の装幀に携わっていたことになる。芹沢は生涯に500冊以上の装幀を手がけ、ブックデザイナーとしてもよく知られているが、「茶業界」の装幀はそのごく初期の例であるといえる。

【図版8】
「茶業界」昭和11年1月号表紙

【図版9】
「茶業界」昭和12年2月号表紙

【図版13】
「茶業界」昭和10年1月号扉

【図版14】
「茶業界」昭和11年1月号扉

【図版10】
「茶業界」昭和13年2月号表紙

【図版11】「茶業界」
昭和14年2月号小間絵

【図版12】「茶業界」
昭和14年1月号小間絵

芹沢の装幀は現代でも多くの人を魅了しているが、その基礎となっているのはおそらく20代を中心に鍛えたグラフィックデザインの技術である。懸賞でたびたび入選するほどのノウハウをもっていた芹沢が、装幀の世界でもそれを活かしながら、型染や肉筆などの技法、そして布、紙などの素材を用いて、独自の表現スタイルを確立していったといえる。茶業組合連合会議所の仕事は、当時の茶業の状況から察すれば経済的にも良い仕事であったかもしれないが、グラフィックデザインの技術を実地で活かすことのできるよい機会であったのは間違いないだろう。

以上、陳列と装幀という2つの仕事から、少なくとも鷹匠町に住んでいた1928(昭和3)年から蒲田に上京した後の1940(昭和15)年まで、芹沢はデザイナーとして静岡県茶業組合連合会議所の仕事に携わっていたことがわかった[48]。18歳から32歳までの15年間に東京、安西、大阪、北番町で経験を積んだことが、33歳から45歳までの13年間に茶業の仕事で実践されたといえる。32歳頃から民藝運動に参加し、34歳で染色家としてデビューした芹沢は、39歳で東京の蒲田へ上京するが、その間も茶業の仕事は続けられた。民藝運動と並行しながら茶業の仕事が行われたことは、その後の作家活動に大きな影響を与えたといえる。

実際、博覧会の出張の帰途様々な場所を訪れたことも、民藝運動の仕事に役立った。個人では経済的な限界がある旅もこの出張に合わせることで可能になり、その後民藝運動において関わることになる人物や、収集の対象となる物、そして模様の種となる風物など、多くの出会いや発見を

することができた。国内外各地での博覧会は、芹沢にとって知見を広げるという点でも重要な経験になったといえる。

さらに、後に芹沢が残した型染作品にも、茶業の仕事の存在を垣間見ることができる。「伸びゆく静岡」[図版15]、「観光の静岡県」[図版16]、「昭和48年11月型染カレンダー」[図版17]の3点は、静岡が主題の作品であり、静岡に関連したモチーフがそれぞれに表されているが、いずれも富士と茶、茶の花や木が主役となっている。もちろんこれは静岡を象徴するものであるから主役として当然かもしれないが、過去を遡れば、静岡県茶業組合の標語や宣伝に用いられるなど、今私たちが思っている以上にこの町の歴史において重要な役割を果たした存在といえるかもしれない。デザイナーとしてそれを何度もモチーフとして扱っていた芹沢が、40～50年後に型染によるグラフィックデザインとして再び表現した「富士と茶」には、茶業の仕事の思い出が込められているように思える。

そもそも芹沢が染色家を志すきっかけの一つとなった紅型の風呂敷は、1928(昭和3)年の上野の博覧会で柳宗悦らが出展していた「民藝館」で目にしたもので、同じ博覧会で茶業組合の展示を任されたことで見る機会を得たのかもしれない。そう考えると茶業の仕事は多くの点で芹沢にとって「きっかけ」を作ったといえる。85歳の芹沢は、「なんでもむこうから話が来て、それでそれにのっかってうまくいきますね、仕事でもなんでも。(中略)民芸も図案もそうなんですね。[49]」と回想しているが、この茶業の仕事もまさにその一つといえるのかもしれない。様々な創作の原点が詰まった「忘れられない」「楽しい思い出」は、静岡だからこそ生まれたものであり、芹沢が静岡で生活した意義の大きさが改めて感じられる。

【図版15】「伸びゆく静岡」(1969)

【図版16】「観光の静岡県」(1961)

【図版17】「昭和48年11月型染カレンダー」(1972)

## 5　おわりに

染色家の人間国宝や民藝運動の作家として知られる芹沢銈介だが、それ以前に芹沢を育んだ別の要素の影響は、これまで考えていた以上に大きなものであった。民藝との出会いが人生の方向を定める重要なものになったことは間違いないが、民藝運動の染色家としてだけではこれだけの多彩な作品は生まれ得なかったかもしれない。今後はその仕事の根底にあるものをみつめながら、芹沢銈介という人物を多角的に理解していくことで、その顕彰につなげたい。

付記

本稿への芹沢銈介作品の掲載にあたり、芹澤惠子様の格別のご高配を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

3　実際の年齢は28歳であるため、数え年の表記と思われる。

4　黒田は応募全体の評として、ポスターとしての使命を果たしているものが少なかったとしたうえで、金という主題に囚われすぎてポスターの意義を没却していること、色彩が幼稚なこと、デッサンが正確でないこと、真剣味のないことを挙げている。

5　同局がポスターによる宣伝を始めたのは1918（大正7）年で、その際のポスター2種はいずれも杉浦非水が手がけたものである。

10　雁皮紙を撚った糸で、太田が製造し芹沢が編み物に応用した。1928（昭和3）年の主婦の友社主催「家庭手芸品展覧会」にこのはな会として出品し、耐水性や強度が高いとして評価された。

15　安西、北番町が選ばれた理由は、元々茶の集積地であったことに加え、1902（明治35）年に富士製茶合資会社社長の原崎源作と出資者の尾崎伊兵衛が北番町の自己の土地の提供を受け、輸出茶再製工場と倉庫を建設したことなどによる。

16　静岡鉄道の静岡市内線と呼ばれた。もとは静岡清水線の一部として1922（大正11）年に静岡駅前から鷹匠町（現在の新静岡）までが開通し、その後段階を経て静岡駅前から安西までが開通した。また1916（大正5）年には東海道本線の貨物支線として江尻駅（現在の清水駅）から清水港駅までが開通している。

17　緑茶以外にはミカン、大豆油などがあった。茶の割合が減っているのは工業化に伴い大豆油の生産に力を入れ始めたことによる。

19　国勢調査によると1920（大正9）年の静岡市の人口は74,093人であるから、少なくとも市民の6%弱が茶業に従事していたと考えられる。

22　棒拾いとは、収穫した茶から古い葉や茎を取り除く作業のことで、後に機械が発明されるまで近隣の主婦の間ではきれいな内職として歓迎されたという。

27　父は横浜時代に茶精製機を発明し、日本の製茶業界の発展に貢献した人物である。

35　1933（昭和8）年7月に大連で個展を開催したことがわかっており、いずれも永原織治の尽力によると記されている。帰途、満州朝鮮の各地を旅したという。

36　同所で最も注目される活動が広告館の運営で、このショーウィンドウは陳列に用いるためだけでなく。商工業者に店頭装飾の実技研究として利用してもらうために設置されたという。

48　1936（昭和11）年に同所で農林省委任国営検査に準ずる検査に従事する職員等のマークを懸賞募集した際、募集要項に「審査員　香取正彦氏、芹澤銈介氏及本所役員」と記されていることからも、芹沢が同所でデザイナーとして信頼をおかれていたことは推測できる。香取正彦は1899（明治32）年生まれの鋳金作家で、1977（昭和52）年に梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている。

**参考文献**


- 「回想1　静岡時代あれこれ」(『芹沢銈介全集』月報1 第1巻　1980　中央公論社)[1、2]
- 「回想2　静岡、大阪また静岡」(『芹沢銈介全集』月報2 第7巻　1980　中央公論社)[1、9、10、12、13、20]
- 「回想3　静岡を離れるまで」/『芹沢銈介全集』月報3 第10巻　昭和55年10月　中央公論社)
- 芹沢銈介美術館監修『芹沢銈介の静岡時代』(2016 静岡新聞社)
- 『逓信協会雑誌』5月(179),逓信協会,1923-05. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2776479 [2、3、4、5、6]
- 能率増進研究會[編]『能率増進研究』(10),能率増進研究會,1924-03. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1552427 [7、8]
- 芹沢銈介自筆年譜(『自選芹沢銈介作品集 下』1968 築地書館)[14、35]
- 「主婦の友」(12)(7)夏季特別号(1928　主婦の友社)[10]
- 『静岡県茶業史』(1926　静岡県茶業組合聯合会議所)[40]
- 大石鵜一郎著『貿易茶物語』(1990　私家本)[15、18、19、29]
- 鈴木繁三著『わが郷土　清水』(1962　戸田書店)[17]
  遠藤英男、若林敦之、南信一、鮫島輝彦、曽根俊一、向坂鋼二、河原崎次郎、笹津海祥、望月董弘『ふるさと百話 第九巻』(1973　静岡新聞社)[24]
- 鈴木梢月「芹沢家と私」(『ある静岡の女性Ⅱ-芹沢たよの生涯-』1995　静岡女性史を学ぶ会)[21]
- 是永倫「芹沢たよの生涯-流れに沿って流されず-」(『ある静岡の女性Ⅱ-芹沢たよの生涯-』1995　静岡女性史を学ぶ会)[22]
- 大石鵜一郎「旧制静岡中学校時代の芹沢銈介氏」(静中・静高創立百周年記念『芹沢銈介小品展』図録 1978　西武美術館)[26、28、30]
- 『静中静高同窓会会員名簿(創立100周年記念号)』(1978　静岡県立静岡高等学校同窓会)[25]
- 『茶業界』23(5),静岡県茶業組合連合会議所,1928-05. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589827 [23]
- 『茶業界』24(10),静岡県茶業組合連合会議所,1929-10. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589844 [31]
- 『茶業界』26(8),静岡県茶業組合連合会議所,1931-08. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589866 [32、33]
- 『茶業界』28(9),静岡県茶業組合連合会議所,1933-09. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589891 [34]
- 『第五回内国勧業博覧会審査報告』第8部(1904　第五回内国勧業博覧会事務局編)[27]
- 三宅拓也著『近代日本〈陳列所〉研究』(2015　思文閣出版)[36]
- 『通商彙報』第7年度(2)(15)(1918　大阪南方院)[37]
- 『通商彙報』大正9年度(12)(49)(1921　大阪南方院)[38]
- 「式場隆三郎編芹沢銈介年譜」/「工藝」第76号(1937 日本民藝協会)[35]
- 静岡市立芹沢銈介美術館開館時の芹沢銈介インタビュー(1981　静岡けんみんテレビ)[39]
- 『茶業界』31(1),静岡県茶業組合連合会議所,1936-01. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589919 [41]
- 『茶業界』32(2),静岡県茶業組合連合会議所,1937-02. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589932 [42]
- 『茶業界』33(2),静岡県茶業組合連合会議所,1938-02. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589944 [43]
- 『茶業界』34(2),静岡県茶業組合連合会議所,1939-02. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589956 [44]
- 『茶業界』34(1),静岡県茶業組合連合会議所,1939-01. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589955 [45]
- 『茶業界』30(1),静岡県茶業組合連合会議所,1935-01. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589907 [46]
- 『茶業界』31(1),静岡県茶業組合連合会議所,1936-01. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1589919 [47]
- 「茶業界」昭和11年4月号(1935　静岡県茶業組合連合会議所)[48]

# 静岡近代美術年表稿　昭和戦後編10

立花 義彰

**1976 昭和51年**

1/ 1　山口源《白い朝》(沼津朝日1/1)

1/ 2　五所平之助色紙展於沼津ギャラリーほさか(-6)。(静岡S50.12/25, 1/3, 5)

1/ 2　吉田豊写真展於静岡谷島屋書店(-6)。(毎日中部版S50.12/28, 朝日静岡版S50.12/31)

1/ 2　藤田渓月日本画展於静岡西武(-7)。(毎日中部版1/1, 静岡1/1)

1/ 3　「美しい人生の年輪 芹沢銈介」(静岡1/3)

1/ 3　市川正三個展於静岡ラ・フォリア(-31)。(静岡1/5, 17, 朝日静岡版1/7, 読売静岡版1/10, 3/20)

1/ 3　宮下寿紀個展於浜松松菱(-12)。(毎日遠州版1/1, 静岡1/1, 8, 中日駿遠版1/7, 朝日遠州版1/10)

1/ 3　安田酔丈展於浜松松菱(-7), 於静岡松阪屋(-13)。(朝日遠州版1/1, 静岡1/6, 8)

1/ 6　高木倶展於東京お茶の水画廊(-24)。(読売静岡版1/10)

1/ 6　ニュー天心画廊オープン。旧フジ画廊を改装。(沼津朝日S50.12/31, S51.1/14, 7/14)

1/ 6　小山勇油絵個展於浜松谷島屋書店(-11)。(静岡1/1, 8, 朝日静岡版1/6)

1/　県油彩美術協会会友小品展於静岡谷島屋書(-13)。(静岡1/10, 読売静岡版1/10)

1/10　「わが素描」連載。市川正三(静岡1/10), 青木達弥(静岡1/17), 鈴木慶則(静岡1/24), 寺平誠介(1/31), 伊藤勉(静岡2/7)

1/10　「あの人この人」連載。高木倶(読売静岡版1/10), 半田昌雄(1/17), 増田大咢(1/24), 伊藤豊成(2/28), 猪飼重明(3/6), 市川正三(3/20)水野欣三郎(3/27), 土橋妙子(4/10), 吉田進(4/17), 平馬学(4/24), 勝間田哲郎(5/8), 野中弘士(5/22), 安藤節雄(5/29), 小山もと子(6/12), 青木幽渓(6/19), 伊藤勉(6/26), 平井俊男(7/3), 森下正夫(7/10), 永井正御(8/28), 日下泰輔(9/4), 月見里茂(9/11), 寺田伊勢男(10/9), 清水秀耕(10/30), 江崎敏夫(11/13), 松田裕康(12/11), 滝沢清(12/25), 細谷泰茲(S52.3/26), 大村政夫(4/16), 仲安銀蔵(5/14), 前田守一(5/21), 寺平誠介(9/3), 原田康次(9/10)、求正美(10/22)、辻弘(11/1)、山本利治(11/15), 杉山良雄(11/29)

1/11　佐々木古桜《絵日記から》(中日静岡版S49.7/4, 沼津朝日1/11, 13, 14, 15, 17, 18, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 30, 31, 2/1, 3, 4)

1/12　海野光弘木版画展於東京村上画廊(-24)。(静岡1/10)

1/14　第1回零の会展於島田市民会館(-16)。(中日駿遠版1/11)

1/15　山口源版画展於沼津ギャラリーほさか(-18)。(沼津毎日1/7, 静岡1/8, 朝日伊豆岳南版1/10, 沼津朝日1/15, 朝日静岡版1/17)

1/15　高野良之助油彩展於沼津ニュー天心画廊(-21)。(沼津朝日1/14)

1/15　藤田清司油絵個展於清水戸田書店(-20)。(清美協no.140)

1/15　佐野修・篠みさを展於静岡谷島屋書店(-20)。(読売静岡版1/10)

1/18　ピカソ《愛の暴力》展於静岡ギャラリー春野(-25)。(朝日静岡版1/17, 24, 静岡1/22)

1/18　岸田劉生とその周辺展於浜松市美術館(-2/5)。(読売静岡版S50.12/20, 中日遠州版1/6, 7, 8, 9, 11, 15, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 29, 2/4, 7, 9, 静岡1/10, 朝日静岡版1/17, 毎日遠州版1/18)

1/18　堤達男《**半場良平胸像**》除幕式。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版1/12)

1/20　井上恒也日本画展於東京三越(-25)。

1/20　岐部兆治・坂田和之二人展於静岡ガスサロン(-25)。(読売静岡版1/17, 静岡1/22)

1/22　川口潔近況。(沼津朝日1/22)

1/24　吉田和代遺作展於冨士市民会館(-26)。

（朝日伊豆岳南版1/23）
1/　石田善彦近作油絵展於沼津ギャラリータケイ（-31）。（静岡1/29）
2/ 1　ピカソ《青の時代》展於静岡ギャラリー春野（-）。（毎日中部版1/28, 静岡1/29, 朝日静岡版1/31）
2/ 3　平井俊男個展於静岡ガスサロン（-8）。（静岡1/29, 2/5, 毎日中部版2/4, 11, 朝日静岡Ⅱ版1/31）
2/ 5　志賀旦山「まどべ」（静岡2/5, 12, 19, 26, 3/4, 11, 18, 25, 4/1, 8, 15, 22）
2/ 5　佐々木古桜逝去。84歳。（沼津朝日2/6, 8）
2/ 9　岩田専太郎挿絵展於沼津ニュー天心画廊（-20）。（朝日伊豆岳南版2/7, 沼津朝日2/17）
2/11　井上市三郎スケッチ展於浜松松菱（-19）。（朝日遠州版2/10）
2/12　岩田猛陶芸展於静岡谷島屋書店（-17）。（毎日中部版2/4, 11）
2/12　佐藤真一個展於浜松画廊（-19）。（朝日遠州版2/12, 静岡2/12）
2/　永瀬義郎展於沼津西武（-25）。（朝日伊豆岳南版2/14）
2/15　アトリエC-126版画展於浜松ナカムラ画廊（-21）。（朝日遠州版2/14）
2/18　岩田専太郎展於浜松松菱（-23）。（朝日遠州版2/18）
2/19　佐野丹丘展於沼津ギャラリーほさか（-24）。（沼津毎日2/19）
2/19　池田遥邨日本画展於浜松松菱（-24）。（朝日遠州版2/19）
2/20　小川龍彦 思い出の静岡展於新静岡センター（-24）。（中日静岡版2/21）
2/23　佐々木真夫展於沼津ニュー天心画廊（-28）。（沼津朝日2/20）
2/26　黒田秋夫木版画展於浜松松菱（-3/2）。（朝日遠州版2/25）
2/27　市川雅道個展於清水銀座会館（-3/1）。（静岡2/21）
3/ 1　末房貞樹鉛筆画展於東京みゆき画廊（-6）。（静岡3/1）
3/　上田毅八郎展於浜松三菱信託浜松支店（-31）。（中日遠州版3/5）
3/ 2　大畑やすひこ個展於静岡ガスサロン（-7）。（静岡2/26, 3/1, 4, 読売静岡版2/28, 毎日中部版2/29, 朝日静岡版3/2）
3/ 2　足立利行・小木国広二人展於浜松市美術館（-7）。（静岡2/26）
3/ 4　日展特撰受賞作家新作洋画第7回展於静岡松坂屋（-14）。（静岡3/3, 読売静岡版3/5）
3/　はなわ憲嗣個展於静岡ラ・フォリア（-31）。（静岡3/6）
3/ 5　杉村孝近況。（静岡3/5）
3/ 5　清水の風景展於清水西友ストア（-10）。（静岡3/6, 清美協no.141）
3/ 7　崋山とその弟子達展於浜松市美術館（-28）。（静岡3/1, 4, 17, 25, 中日遠州版3/1, 6, 読売静岡版3/6, 毎日静岡版3/11）
3/ 9　見城春男スケッチ展於静岡ガスサロン（-14）。（静岡3/4, 8, 11, 読売静岡版3/6, 朝日静岡, 遠州版3/9, 毎日中部版3/10）
3/11　山口午朗油絵展於沼津ギャラリーほさか（-16）。（静岡3/11）
3/11　井上市三郎スケッチ展於浜松松菱（-16）。（朝日遠州版3/10, 静岡3/11, 読売静岡版3/13）
3/13　伊藤勉「大正版画」（静岡3/13）
3/13　栗原幸彦展於浜松市美術館（-16）。（静岡3/11）
3/　鈴木雅子展於静岡幸文堂（-18）。（読売静岡版3/13）
3/14　葵会第1回展於静岡永田画廊（-21）。（静岡3/13）
3/16　柴原雪展於静岡ガスサロン（-21）。（静岡3/6, 19, 読売静岡版3/13, 朝日静岡版3/15）
3/16　神田秀世志油絵個展於静岡珈琲館（-31）。（静岡3/13, 朝日静岡版3/14, 毎日中部版3/17, 読売静岡版3/27）
3/18　山田収《雄志》除幕式於富士吉原第一中学校。（静岡3/19）
3/18　杉村孝《翔》除幕式於藤枝瀬戸谷中学校。（静岡3/19）
3/23　遠州美術第20回展於浜松市美術館（-28）。（静岡3/18, 25, 朝日遠州版3/27, 読売静岡版3/27）
3/24　第36回美術文化協会展於東京都美術館（-4/6）。入選者発表。（中日駿遠版3/28, 静岡3/29, 4/3）
3/24　第28回三軌会於東京都美術館（-4/6）。入選者発表。（静岡4/3）
3/25　青木達弥素描展於静岡画廊しずおか（-30）。（静岡3/20, 27, 読売静岡版3/27）
3/26　二科入選作家展於県庁西館展示室（-28）。（静岡3/20, 毎日東, 中部, 遠州版3/24, 読売静岡版3/26）
3/26　安井賞受賞作家展於沼津西武（-4/7）。（静岡3/25）
3/30　一向会展於浜松市美術館（-4/4）。（読売静岡版3/2）
4/ 1　高木倶個展於沼津ギャラリーほさか（-6）。（沼津朝

日3/27, 4/1, 静岡3/29, 毎日東部版3/31, 読売静岡版4/3）

4/ 1　郷土ゆかりの絵と書遺作展於静岡松坂屋（-11）。（静岡4/1, 朝日静岡版4/4）

4/ 1　吉田豊富士写真展於静岡三菱信託銀行静岡支店（-15）。（静岡4/1, 8, 毎日中部版4/4）

4/　現代巨匠版画展於静岡ラ・フォリア（-30）。（朝日静岡版4/10, 静岡4/17）

4/ 2　巨匠ブールデル展於富士美術館（-6/25）。（毎日東, 中部, 遠州版3/25, 4/2, 5/3, 静岡4/1, 2, 5, 5/1, 朝日伊豆岳南版4/2）

4/ 4　二紀会展於浜松市美術館（-11）。（朝日遠州版4/3, 読売静岡版4/3, 静岡4/8）

4/ 3　渡辺俊明版画展於浜松遠鉄（-11）。（静岡4/1, 8）

4/ 6　大木茂美写真展於沼津ギャラリータケイ（-8）。（沼津朝日4/2, 3, 6, 静岡4/1, 毎日東部版4/4, 7）

4/ 7　第6回日彫展於東京都美術館（-24）。浅井行雄《立像》大村政夫《アッシジの尼僧》澤田政廣《禅の達磨》下山昇《長閑な》杉本宗一《裸婦》堤達男《苞》飛岡文一《51・no.1》平野敬吉《髪》平馬学《春の使者》松田裕康《春陽》山本利治《男の首》和田金剛《牛頭》

4/ 8　第44回日本版画協会展於東京都美術館（-25）。中川雄太郎《海獣》《原始への夢》遺作展示。伊藤勉《花かげ》《笑いの季節》海野光弘《縁通し（夏日）》《追い陽》栗山茂《或る風景》《或る風景》西貝和子《作品A》《作品B》前田守一《空（海辺）》《空（海辺）》柳澤紀子《Dry Illusion》《Love》

4/ 8　第26回モダンアート展於東京都美術館（-25）。戸塚秀三《RUMOR-OF THE SEA》

4/ 8　澤田政廣《山田弥一胸像》除幕式於熱海大月ホテル。（静岡4/9, 朝日静岡Ⅱ版4/22）

4/ 8　守時大融書展於沼津ギャラリーほさか（-13）。（静岡4/8, 10, 沼津朝日4/13）

4/ 8　野中弘士個展於浜松松菱（-13）。（朝日遠州版4/8, 静岡4/8, 読売静岡版4/8）

4/ 9　第62回光風会展於東京都美術館（-25）。新入選者発表。（静岡4/3, 中日駿遠版4/3, 遠州版4/4）

4/ 9　郷土版画家選抜5人展於沼津ニュー天心画廊（-14）。（毎日東部版4/11, 沼津朝日4/9, 14）

4/10　太田昭個展於県庁西館展示室（-14）。（静岡4/10, 読売静岡版4/10）

4/　増田猪富展於静岡中島屋（-15）。（静岡4/10, 朝日静岡版4/10, 読売静岡版4/10）

4/　山田安展於静岡珈琲館（-15）。（朝日静岡版4/10, 読売静岡版4/10, 静岡4/11）

4/　松木寿雄《祭の終った朝》下田市立図書館に寄贈。（静岡4/12, 朝日伊豆岳南版4/17）

4/15　赤堀尚個展於沼津ギャラリーほさか（-20）。（沼津毎日4/8, 14, 毎日東部版4/14, 朝日伊豆岳南版4/15, 静岡4/15, 19, 読売静岡版4/17, 沼津朝日4/8, 10, 15, 18）

4/15　川端政雄個展於清水戸田書店（-20）。（読売静岡版4/10, 17, 毎日中部版4/11, 静岡4/12, 朝日静岡版4/15）

4/15　佐藤昌美展於浜松松菱（-20）。（静岡4/15, 朝日遠州版4/15）

4/　杉本三男個展於静岡幸文堂（-20）。（静岡4/17）

4/16　市民の美術展第1回展於清水西友ストア（-21）。（静岡4/17）

4/16　久保田信道個展於清水西友ストア（-21）。（静岡4/17）

4/　鈴木英利個展於静岡三菱信託銀行静岡支店（-30）。（静岡4/22）

4/18　中川寿一「赤堀尚先生と私」（沼津朝日4/18）

4/18　堤達男《**鈴木伊三郎胸像**》除幕式於黄金崎。（朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/19）

4/20　さとうももえ・森山宗昭二人展於浜松市美術館（-25）。（読売静岡版4/17, 朝日遠州版4/19, 静岡4/22）

4/22　八木敏裕・渡辺百合子・杉山重雄三人展於沼津ギャラリーほさか（-27）。（毎日東部版4/21, 静岡4/22, 朝日伊豆岳南版4/22）

4/22　成川勝己個展於沼津ギャラリーほさか（-25）。（沼津朝日4/12, 静岡4/22）

4/22　増田大咢個展於静岡幸文堂（-27）。（静岡4/17, 毎日中部版4/21, 朝日静岡版4/22, 読売静岡版4/24）

4/26　県美術家連盟第13回展於県庁西館展示室（-29）。（読売静岡版4/10, 24, 静岡4/12, 毎日中部版4/21, 朝日静岡版4/24, 中日駿遠州版4/29）

4/27　中部一陽会第2回展於浜松市美術館（-5/2）。（静岡3/15, 4/22, 28, 29, 5/1, 読売静岡版5/1）

4/　湯浅猛・山田牧2人展於沼津ギャラリーほさか（-5/5）。

（沼津朝日5/1, 読売静岡版5/1）

4/　山田桂幸《竹内正俊肖像》浜北赤佐小学校に寄贈。（静岡4/29）

4/28　第12回現代日本美術展於東京都美術館（-5/14）。長岡宏《Past-Present-Future》鈴木久雄《P3817足のある風景》

4/28　第50回国画会展於東京都美術館（-14）。伊藤勉《十字路》《熱いコーヒー》栗山茂《早春郊外》《早春風景》中川雄太郎［遺作］《伝説「切石の詩」》《道祖神》野田好子《木の精・空の精》（静岡5/8）

4/29　梁川剛一さし絵原画展於清水戸田書店（-5/5）。（静岡4/30, 読売静岡版5/1）

4/29　小林清親版画展於静岡松坂屋（-5/5）。（静岡4/28）

4/29　藤野嘉市個展於静岡幸文堂（-5/4）。（静岡4/26, 朝日静岡版4/28, 読売静岡版5/1）

4/　鈴木貞夫展於浜松西武（-5/5）。（読売静岡版5/1）

5/ 1　細谷泰茲、小山もと子、県文化奨励賞受賞。（毎日東, 中部, 遠州版4/20, 読売静岡版4/20, 朝日静岡Ⅱ版4/23）

5/ 1　創型会展於県庁西館展示室（-9）。（朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/24, 読売静岡版5/8）

5/ 1　吉野不二太郎個展於静岡産業会館（-6）。（静岡4/24, 5/1, 朝日静岡版5/1）

5/　浦田周社展於静岡東海銀行静岡支店（-15）。（静岡5/1, 読売静岡B版5/1, 8, 毎日中部版5/5, 朝日静岡版5/8）

5/　松島達太郎小品展於浜松ギャラリー花菱（-6）。（朝日遠州版5/1, 毎日遠州版5/5）

5/ 3　小林秀美原画展於沼津ニュー天心画廊（-8）。（沼津朝日4/29, 朝日静岡, 遠州版5/1, 静岡5/2, 6）

5/ 4　石塚知子・鈴木多喜男・小杉恩主世三人展於浜松市美術館（-9）。（読売静岡版5/1, 静岡5/6）

5/　市川元晴近況。（毎日中部版5/11, 静岡5/17）

5/　若尾和呂洋画展於沼津ギャラリーほさか（-18）。（朝日伊豆岳南版5/15, 沼津朝日5/16）

5/　日本の陶芸“雅“展於沼津西武（-12）。（静岡5/6）

5/　棟方志功展於浜松西武（-19）。（静岡5/8, 17, 朝日遠州版5/8）

5/ 9　新槐樹社富士地区展於富士大昭和センター（-16）。（静岡5/10）

5/11　林婦美子・末沢誠子二人展於静岡ガスサロン（-16）。（静岡5/6, 15, 毎日中部版5/9, 朝日静岡版5/9）

5/11　太田吉比古個展於浜松市美術館（-16）。（静岡5/6, 13, 朝日遠州版5/9, 読売静岡版5/15）

5/13　中野清光個展於沼津ギャラリーほさか（-18）。（沼津朝日5/14, 16, 静岡5/6）

5/13　研会洋画展於静岡松坂屋（-18）。（静岡5/12, 朝日静岡版5/15）

5/13　青木草風展於静岡谷島屋（-18）。（読売静岡版5/1, 8, 15, 毎日中部版5/9）

5/　繁田博版画展於静岡幸文堂（-18）。（朝日静岡版5/15）

5/14　県善三郎スケッチ展於浜松ギャラリー花菱（-25）。（静岡5/13, 朝日遠州版5/15, 読売静岡版5/15）

5/14　加藤秋濤展於熱海ヤオハン（-16）。（朝日伊豆岳南版5/13）

5/18　壮炎会第31回展於浜松市美術館（-23）。（静岡5/13, 20, 読売静岡版5/15, 22, 朝日遠州版5/18）

5/18　中村安彦写真展於浜松市美術館（-23）。（静岡5/13, 20, 読売遠州版5/21）

5/　木津悠志個展於静岡ガスサロン（-23）。（毎日中部版5/19, 静岡5/20, 読売静岡版5/22）

5/20　高畠達四郎展於東京日本橋高島屋（-25）。（静岡5/22）

5/20　大石靖個展於沼津ギャラリーほさか（-30）。（読売静岡版5/19, 静岡5/20, 毎日東部版5/26）

5/　柘植太郎作品、三島市立社会福祉会館に寄贈。（静岡5/22, 朝日伊豆岳南版5/23）

5/23　清水久能山東照宮三百年祭記念塔移。（静岡5/21）

5/24　高野良之助個展於東京芸術サロン（-29）。（県油協no.25）

5/　佐田勝ガラス絵展於浜松ナカムラ画廊（-29）。（朝日遠州版5/26, 静岡5/27）

5/　薫風会第1回展於浜松画廊（-30）。（朝日遠州版5/24, 静岡5/27）

5/25　海野光弘木版画展於京都版画ギャラリー（-6/6）。（静岡5/31）

5/27　寺平誠介日本画展於静岡谷島屋書店（-6/2）於清水戸田書店（6/10-15）。（毎日中部版5/19, 静岡5/31, 6/14）

5/27　遠州ゆかりの遺作展於浜松松菱（-6/8）。（静岡5/28, 中日駿遠版5/28）

5/28　中川一政のすべて展於沼津西武（-6/2）。（静岡5/27）

5/28　ルオー展於静岡西武(-6/2)。(静岡5/27, 朝日静岡版5/29)
5/29　佐藤蕪堂小品展於浜松ギャラリー花菱(-6/5)。(静岡5/27, 朝日遠州版5/29)
5/31　小野忠重木版画展於浜松画廊(-6/5)。(静岡5/27, 朝日遠州版5/29, 読売静岡版6/5)
5/　ちほう展－思考と試行－於清水戸田書店。
6/ 1　杉山有個展於パリ・カルド・マティニヨン画廊(-30)。(静岡6/12)
6/ 1　篠みさを詩画展於静岡珈琲館(-15)。(静岡5/31, 毎日, 中部版6/6, 朝日静岡版6/12)
6/　滝沢清個展於静岡ラ・フォリア(-30)。(静岡6/21)
6/　松田裕康・山本利治・松岡まつみ三人展於松崎ショッピングセンター(-7)。(静岡6/5)
6/ 3　島岡達三陶展於静岡松坂屋(-8)。(朝日静岡版6/2)
6/ 3　長谷川栄一展於静岡幸文堂(-8)。(毎日中部版5/30, 朝日静岡版6/5, 読売静岡版6/5)
6/　木之華会第20回展於静岡谷島屋書店(-8)。(静岡6/3)
6/　遠州ゆかりの高僧・名士・画家遺作展於浜松松菱(-8)。(毎日遠州版6/3, 静岡6/4)
6/ 6　日本の頭像展於箱根彫刻の森美術館(-8/29)。澤田政廣《キリスト》掛井五郎《雅歌》
6/ 6　山平義正展於静岡永田画廊(-13)。(朝日静岡版6/5, 読売静岡版6/5, 毎日中部版6/6)
6/10　渡辺智子個展於沼津ギャラリーほさか(-15)。(沼津朝日6/3, 静岡6/10)
6/10　鈴木慶則個展於静岡松坂屋(-15)。(静岡6/7, 14, 朝日静岡版6/9, 読売静岡版6/12)
6/10　足久保潔・竹下勝治・鍋田卓志三人展於静岡幸文堂(-15)。(静岡6/7)
6/　寺平誠輔展於清水戸田書店(-15)。(朝日静岡版6/12)
/　由美画廊オープン。(静岡10/14)
6/　池田正司《静岡百景選》展於静岡画廊しずおか(-15)。(読売静岡B版6/12, 毎日中部版6/13, 静岡6/14)
6/11　「石子順造『子守唄はなぜ哀しいか』(静岡6/11)
6/11　御厨美術協会第5回展於小山冨士紡体育館(-13)。(静岡6/8)
6/11　木島和一個展於伊東この花会館(-13)。(静岡6/14)
6/11　国吉康雄版画展於沼津西武(-16)。(静岡6/10)
6/11　京都登窯炎彩展於静岡西武(-16), 於沼津西武(25-30)。(静岡6/10, 24)
6/　高野良之助近作展於清水戸田書店(-18)。(静岡6/15)
6/　松岡清展於浜松ギャラリー花菱(-23)。(朝日遠州版6/19)
6/15　ガスサロン合同第3回展於静岡ガスサロン(-27)。(静岡6/7, 17, 24, 読売静岡版6/12, 朝日静岡版6/23)
6/　原田幸夫水彩画展於沼津東海銀行沼津支店(-30)。(静岡6/17)
6/16　県油彩美術家協会第4回展於県庁西館展示室(-22)。(静岡5/22, 6/17, 19, 毎日東, 中部, 遠州版6/2, 13, 読売静岡版6/12)
6/17　大塚節夫個展於沼津ギャラリーほさか(-22)。(静岡6/17)
6/　薫風会洋画展於浜松松菱(-29)。(朝日遠州版6/16)
6/　清水百景展於清水西友ストア(-24)。(静岡6/19, 22)
6/20　森義利版画秀作展於浜松大島ホール(-21)。(朝日遠州版6/19)
6/23　「土井俊泰：画家紹介シリーズ」《鳥》《室内》他。(沼津朝日6/23, 29, 7/6, 13)
6/24　宮田三郎木版画展於浜松松菱(-29)。(朝日遠州版6/22, 23)
6/26　高畠達四郎逝去。享年80。(美術年鑑S.52, 静岡6/27, 7/3)
6/26　一枚の絵洋画展於三島プラザホテル(-28), 於静岡新聞別館(7/1-5), 於伊東市観光会館(7/16-18)、於熱海市観光会館(7/20-22)、於焼津市民センター(8/9-11), 於吉原市民会館(8/12-14)。吉村美令由《水辺の古城》熱海市に寄贈。(静岡6/26, 27, 30, 7/1, 2, 16, 20, 8/8)
6/　静岡ガスサロン閉鎖。(読売静岡版4/24, 静岡5/17)
6/　青木草風かぶき・きりえ展於静岡東海銀行静岡支店(-7/3)。(静岡6/26, 読売静岡版6/26)
6/　渡辺俊弘個展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-7/3)。(読売静岡版6/26, 毎日中部版6/30, 静岡7/1)
6/　ルフィーノ・タマヨ版画展於浜松ナカムラ画廊(-7/4)。(中日遠州版6/30, 朝日遠州版6/30, 静岡7/1, 読売静岡版7/3)

7/ 1　大木茂美写真展於沼津ギャラリーほさか(-6)。(朝日伊豆岳南版6/30, 沼津朝日6/30, 7/1, 静岡7/1)

7/ 1　二科出品者第3回展於県庁西館展示室(-4)。(静岡7/2, 読売静岡版7/3)

7/　勝山洋子展於静岡ラ・フォリア(-31)。(静岡7/18, 24)

7/ 2　ロシア・ソビエト国宝絵画展於富士美術館(-31)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/27, 7/1, 2, 10, 20, 静岡7/1, 3, 8/4, 読売静岡版7/2)

7/ 3　平井俊男個展於清水西友ストア(-9)。(朝日静岡版7/3)

7/ 4　堤達男**《鎮魂碑》**除幕式於西伊豆旧軍需工場跡地。(静岡5/8, 7/5, 朝日伊豆岳南版5/12, 毎日東部版7/6*)

7/　杉本三男個展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-31)。(静岡7/8, 15, 22, 読売静岡版7/10, 毎日中部版7/14)

7/ 7　伊藤輝彦水彩展於浜松松菱(-14)。(朝日遠州版7/5, 読売静岡版7/10)

7/ 8　横山良美・村上義一二人展於静岡幸文堂(-13)。(静岡6/26, 朝日静岡版7/10)

7/ 8　静流会第31回展於沼津ギャラリーほさか(-13)。(毎日東部版7/7, 静岡7/8, 沼津朝日7/9, 沼津毎日7/9)

7/ 9　伊藤勉版画展於浜松ギャラリー花菱(-18)。(静岡7/5, 8, 15, 朝日遠州版7/10, 読売静岡版7/10, 17)

7/10　館野弘青**《友愛の像》**除幕式於熱海姫の沢公園。(静岡6/8, 14, 7/11S52.7/12, 12/15, 読売静岡版6/15*, 毎日東部版6/26*, S52.12/20, 朝日伊豆岳南版7/4)

7/12　青木洋子個展於東京櫟画廊(-17)。(沼津朝日7/13)

7/　富士の型染10周年展於富士文化センター(-18)。(静岡7/17)

7/15　風土第18回展於沼津ギャラリーほさか(-20)。(静岡7/15, 読売静岡版7/17, 沼津朝日7/17)

7/15　山口源逝去。享年79。(美術年鑑S.52, 沼津朝日7/17, 23, 8/4, 沼津毎日7/18, 20, 中日静岡版7/17, 静岡7/17, 19, 県美連会報no.15)

7/15　小林洋子個展於静岡谷島屋書店(-20)。(静岡7/8, 10, 17, 読売静岡版7/10, 毎日中部版7/11, 朝日静岡版7/17)

7/　横田稔展於静岡吉見書店(-20)。(読売静岡版7/17)

7/　青松会展於浜松松菱(-19)。(読売静岡版7/17)

7/20　足立政義・水田大輔二人展於沼津竹村(-25)。(静岡7/15, 7/19, 沼津朝日7/19)

7/21　「貸し画廊が次々登場」(毎日静岡版7/21)

7/22　横井弼展於沼津ギャラリーほさか(-27)。(読売静岡版7/17, 毎日東部版7/18, 静岡7/22)

7/22　余村展・島根清二人展於静岡松坂屋(-28)。(静岡7/18, 21)

7/23　古沢徳三「山口源先生」(沼津朝日7/23)

7/24　安倍修三郎個展於沼津ニュー天心画廊(-28)。(沼津朝日7/22, 静岡7/22)

7/　中山一司展於清水戸田書店(-8/3)。(朝日静岡版7/31)

7/　池田満寿夫展於浜松ナカムラ画廊(-8/4)。(毎日遠州版8/1, 朝日遠州版8/3)

7/29　県版画八人展於静岡松坂屋(-8/3)。(朝日静岡Ⅱ版7/28, 静岡7/28, 8/2)

7/　植村康多郎・山本利治展於沼津ギャラリーほさか(-8/3)。(朝日静岡Ⅱ版7/31)

7/31　白沢良逝去。写真家。58歳。(毎日東, 中部, 遠州版8/3)

8/ 1　中川雄太郎遺作展於静岡松坂屋(-3)。(静岡7/24, 30, 31, 朝日静岡Ⅱ版7/31)

8/　花村憲弘個展於静岡珈琲館(-15)。(静岡8/2)

8/　清水光男個展於焼津ブービィ(-31)。(静岡8/16)

8/ 2　「ロダン展」(静岡8/2)

8/ 3　「松井富士雄 夏にひろう」(毎日東, 中部, 遠州版8/3)

8/ 4　杉山英雄「山口源先生」(沼津朝日8/4)

8/ 4　角田力松「窓辺」(静岡8/4, 11, 18, 25, 9/1, 8, 22, 29, 10/6, 13, 20, 27)

8/ 5　青木洋子展於沼津ギャラリーほさか(-10)。(静岡8/5, 沼津朝日8/6, 毎日東中部版8/8)

8/ 6　佐藤千鶴子・水島邦江二人展於静岡幸文堂(-10)。(毎日中部版8/4, 朝日静岡版8/7, 静岡8/9)

8/ 6　臥牛会第1回展於長泉池田病院(-18)。(沼津毎日7/31, 沼津朝日8/4, 静岡8/5, 読売静岡版8/7)

8/ 6　創元会第34回展於浜松市美術館(-14)。(静岡7/29, 8/5, 12, 読売遠州版8/7, 10)

8/ 6　服部誠司個展於浜松市美術館(-14)。(静岡8/5, 朝日静岡版8/7, 読売静岡版8/7, 毎日遠州版8/8)

8/ 6　神津克巳個展於浜松ギャラリー花菱(-14)。(静岡8/5, 朝日静岡版8/7, 毎日遠州版8/8)

8/　旧熱海御用邸蔵・熱海市役所所蔵作品、修復。(読

売静岡版2/8, 朝日伊豆岳南版2/13, 静岡版8/14, 静岡8/10, 毎日東部版8/12)

8/12　県版画協会第41回展於県庁西館展示室(-15)。(静岡7/17, 8/13)

8/12　県写真第21回展・国際写真サロン展於県庁西館展示室(-16)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/11, 13)

8/12　造形展 ナンセンスライン 於県庁西館展示室(-15)。(清美協no.148)

8/12　池田正司個展於静岡松坂屋(-17)。(読売静岡版8/7, 静岡8/9, 12, 清美協no.147, 148)

8/14　渡辺妙子「江戸っ子の職人芸」(静岡8/14)

/　蜆塚画廊オープン。(朝日静岡版8/14, 静岡8/16, 19)

8/15　竹内春江個展於浜松ギャラリー花菱(-22)。(毎日遠州版8/15, 中部, 遠州版8/21, 朝日遠州版8/18, 静岡8/19)

8/17　松崎洋子個展於浜松市美術館(-22)。(静岡8/12)

8/19　旦山会展於沼津ギャラリーほさか(-31,-9/4)。(沼津朝日8/12, 静岡8/19, 26, 毎日東部版8/22, 静岡8/26)

8/19　青木一郎展於清水戸田書店(-24)。(毎日中部版8/18, 朝日静岡版8/21)

8/19　水上悦展於静岡谷島屋(-24)。(毎日中部版8/15, 朝日静岡版8/21)

8/19　岡本透水彩画展於静岡幸文堂(-24)。(静岡8/16)

8/19　いわさきちひろ童画展於浜松松菱(-24)。(静岡8/20)

8/20　サラ・ムーン写真展於静岡西武(-25)。(静岡7/23, 29, 8/5, 12, 19, 20, 25, 朝日静岡版8/20)

8/　青木一美展於浜松西武(-9/1)。(朝日遠州版8/21)

8/20　平田勝規滞欧作品展於浜松画廊(-28)。(静岡8/19, 26)

8/　桜井琴風書道展於藤枝東洋証券藤枝支店(-26)。(静岡8/23)

8/21　中山壮一展於掛川ジャスコ(-30)。(中日駿遠版8/14)

8/25　遠藤君雄「池田20世紀美術館見聞記」(沼津朝日8/25, 26, 27, 28, 9/1)

8/25　杉山侃子個展於県庁西館展示室(-30)。(静岡8/23, 27, 毎日中部版8/25, 朝日静岡, 遠州版8/25)

8/26　伊藤勉版画展於清水戸田書店(-31)。(静岡8/28)

8/27　獏黙庵子展於東京渋谷東急(-9/1)。(沼津朝日8/25, 沼津毎日8/25)

8/　山田収近況。(静岡8/28)

8/28　百人展:ほんねとたてまえ於県庁西館展示室(-9/5)。(中日静岡版8/29, 静岡8/31, 読売静岡版9/4)

8/29　複数による「私」展於県庁西館展示室(-9/5)。(静岡8/28, 朝日静岡版8/29, 毎日中部版9/1, 読売静岡版9/4)

8/29　県水彩画協会第26回展於静岡市産業会館(-31)。(静岡7/26, 8/19, 26, 沼津毎日8/19)

8/　鈴木一夫展於清水戸田書店(-9/5)。(朝日静岡版8/31, 読売静岡版9/4)

/　水野正宏個展於浜松市美術館(-9/5)。(静岡9/2, 読売静岡版9/4)

9/1　鈴木慶則展於東京大阪フォルム画廊(-11)。

9/1　第61回二科展於東京都美術館(-20)。
北川民次《茶畑のある風景A》《茶畑のある風景B》(静岡9/11)
高倉清雄《空の熱魂》写真部門二科賞受賞。(静岡9/3, 20, 読売遠州版9/1)
長倉美津江《ヤコブの井戸》(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/1, 5, 読売静岡版9/1, 読売静岡版9/1, 中日静岡版9/5)

9/1　第61回院展於東京都美術館(-19)。
入選者。(中日静岡版8/29)

9/1　グループBA第1回展於県庁西館展示室(-7)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/31, 静岡9/2, 読売静岡版9/4, 中日駿遠版9/18)

9/1　伊藤勉展於静岡さくらやギャラリー(-6)。(毎日中部版9/1, 朝日静岡版9/4, 読売静岡版9/4)

9/1　前田守一個展於静岡珈琲館(-15)。(朝日静岡版9/1, 毎日中部版9/5, 静岡9/6, 9/11, 読売静岡版9/11)

9/2　県日本画25人展於静岡松坂屋(-9/7)。(静岡9/1, 3, 朝日静岡版9/4, 清美協no.148)

9/2　江崎武男滞欧作品展於於静岡松坂屋(-7)。(毎日中部版9/1, 静岡9/4, 読売静岡版9/4, 朝日静岡版9/5)

9/　神谷広見木版画展於浜松浜松画廊(-7)。(朝日遠州版9/4)

9/4　「静岡市にも美術館を」(中日静岡版9/4)

9/6　赤堀正巳展於静岡住友信託銀行静岡支店(-25)。(静岡9/4, 毎日中部版9/8, 中日駿遠版9/9, 朝日静岡版9/18)

9/8　県日本画協会展於浜松市美術館(-12)。(静岡9/2, 9)

9/10　菅井汲版画展於沼津ギャラリーほさか(-15)。(静岡9/9, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/11)

9/10　秋山二三九個展於焼津藪崎新聞店(-16)。(県油協no.27)
9/12　土井俊泰個展於沼津ギャラリータケイ(-26)。(沼津朝日9/7, 12, 15, 21, 静岡9/23)
9/13　県光風会展於県庁西館展示室(-15)。(静岡9/9, 読売静岡版9/11, 朝日静岡版9/13)
9/14　新槐樹社県支部展於県庁西館展示室(-19)。(静岡9/9, 13, 読売静岡版9/18)
9/　鳥合会第3回展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-30)。(静岡9/9, 16, 23)
9/16　白鳥酉雄遺作展於静岡谷島屋書店(-21)。(静岡9/2, 9, 16, 読売静岡版9/11, 18, 毎日中部版9/15, 毎日静岡版9/20)
9/　国吉康雄展於於静岡松坂屋(-21)。(静岡9/18)
9/18　市川正三「国吉康雄の世界」(静岡9/18)
9/19　浅田正博《パリスケッチ》(沼津朝日9/19, 26, 10/3, 10, 17, 24, 31, 11/7, 14, 21, 28, 12/5, 12, 19, 26, 1/9)
9/20　川端政雄個展於東京銀座画廊(-25)。(毎日東, 中, 西部版9/8, 静岡9/13, 清美協no.148)
9/23　萩萩月近作個展於沼津ニュー天心画廊(-24)。(沼津毎日9/14, 毎日9/14, 沼津朝日9/22, 静岡9/23)
9/23　伊藤孝之個展於清水戸田書店(-29)。(静岡9/23)
9/23　築地進個展於静岡産業会館(-28)。(静岡9/23, 25)
9/23　県善三郎個展於浜松松菱(-28)。(朝日遠州版9/22, 23, 静岡9/23, 読売静岡版9/25)
9/24　日下泰輔展於伊豆この花会館(-26)。(朝日伊豆岳南版9/23, 読売静岡版9/25)
9/27　杉山泰雅書作展於静岡住友信託銀行静岡支店(-10/9)。(静岡9/25, 毎日中部版9/29)
9/30　小川幸彦新作陶展於静岡松坂屋(-10/5)。(静岡9/27, 10/2, 朝日静岡版9/29)
9/30　柴田俊個展於静岡幸文堂(-10/5)。(静岡9/18, 23, 30, 10/4)
/　掛井五郎個展於東京新宿画廊(-)。(静岡10/9)
10/ 1　レインボーアート第6回展於熱海市文化会館(-3)。(朝日伊豆岳南版9/30)
10/ 1　喝展於沼津ギャラリーほさか(-4)。(静岡9/30)
10/ 1　佐野和夫個展於清水戸田書店(-5)。(朝日静岡版9/26, 10/2, 毎日中部版10/3)
10/ 1　青木草風歌舞伎絵展於静岡扇子屋(-11)。(毎日中部版9/26, 静岡9/30, 10/7, 読売静岡版10/2)
10/ 1　堤達男《黎明の像》除幕式於浜松湖東高校。(静岡10/2, 読売遠州版10/4)
10/　増田大罧展於静岡画廊しずおか(-5)。(静岡10/2)
10/ 2　第8回第三文明展於富士美術館(-26)。(静岡10/6)
10/　佐野美術館十周年近況。(朝日伊豆岳南版10/5)
10/ 4　掛井五郎《バンザイヒル》中原悌二郎賞優秀賞受賞。(静岡10/9)
10/ 7　吉川華園展於沼津ギャラリーほさか(-12)。(沼津朝日10/2, 静岡10/7)
10/ 8　佐野秀雄個展於静岡西武(-13)。(朝日静岡版10/9)
10/ 8　玲陽会第20回展於県庁西館展示室(-13)。(静岡10/2, 11, 毎日中部版10/6, 朝日静岡版10/9)
10/　清末勝則個展於浜松西武(-13)。(静岡9/30)
10/ 9　原木錠二展於県庁西館展示室(-11)。(読売静岡版10/9)
10/ 9　古田晴久展於浜松ギャラリー花菱(-17)。(読売静岡版10/2, 毎日西部版10/3, 静岡10/7, 朝日遠州版10/9)
10/ 9　脇田和版画展於浜松由美画廊(-26)。(朝日遠州版10/9, 中日遠州版10/12, 静岡10/14, 21)
10/10　第44回独立展於東京都美術館(-27)。沢村美佐子《ジーンズショップ》
10/10　第3回創画会展於東京都美術館(-27)。秋野不矩《カミの泉Ⅱ》出品。
10/11　滝沢清展於島田中電営業所(-16)。(中日静岡版10/12)
10/14　シルクスクリーンによる榎本孝信展於沼津ギャラリーほさか(-19)。(静岡10/14)
10/15　伊藤豊成個展於県庁西館展示室・永田画廊(-19)。(毎日中部版10/10, 13, 朝日静岡版10/16, 静岡10/18)
10/17　木下恵介近況。(静岡10/17)
10/18　岩田専太郎原画展於沼津ニュー天心画廊(-23)。(沼津朝日10/15, 毎日東部版10/20, 静岡10/21)
10/18　加藤恒七個展於浜松富士銀行浜松支店(-12/2)、於元城アートギャラリー(12/6-)。(静岡10/17)
10/21　守時大融作陶展於沼津ギャラリーほさか(-26)。(静岡10/18, 21, 朝日伊豆岳南版10/21, 毎日東部版10/24)
10/21　平井俊男北欧スケッチ展於清水戸田書店(-26)。(静岡10/18, 朝日静岡版10/23)

10/　抱朴会25周年展於県庁西館展示室(-26)。(静岡10/25)

10/23　富本憲吉版画展於浜松ギャラリー花菱(-29)。(朝日遠州版10/23, 静岡10/28)

10/27　浜松市美術館友の会愛蔵品展於浜松市美術館(-31)。(中日駿遠版10/24, 静岡10/28)

10/　吉野不二太郎個展於静岡幸文堂(-11/2)。(静岡10/30, 毎日中部版10/31)

10/28　風土第19回展於沼津ギャラリーほさか(-11/2)。(沼津朝日10/26, 沼津毎日10/28)

10/28　石山祥枝展於静岡谷島屋書店(-11/3)。(静岡10/18, 読売静岡版10/23, 朝日静岡版10/30)

10/28　青木達弥展於静岡松坂屋(-11/1)。(静岡10/23)

10/28　郷土画家秀選展於由美画廊(-11/9)。(中日遠州版10/12, 読売静岡版10/23, 静岡10/28, 11/4, 毎日遠州版10/31, 県油協no.28)

10/29　「手仕事の味」鳥羽鐐一, 八木秀之助, 後藤清吉郎, 平松哲司, 八木秀之助, 小川幸彦, 室伏輝, 中村陶吉, 秋山浩薫 (朝日静岡版10/29, 11/2, 7, 11, 13, 12/10, 12, 15, 19, 24)

10/29　三輪休雪・坂高麗左衛門・萩焼二大巨匠展於静岡西武(-11/3)。(読売静岡版10/23, 静岡10/25, 28, 30, 朝日静岡版10/30)

10/　ホログラフィ展於浜松西武(-11/3)。(朝日遠州版10/30)

10/30　第8回日展於東京都美術館(-26)。(読売静岡版10/25, 11/2, 静岡11/13)
藤本東一良《ノルマンディーの浜》澤田政廣《レダ》杉本宗一《猪》堤達男《颶気》平野敬吉《楽園に遊ぶ》和田金剛《フェニキアの乙女》入選者。(中日静岡, 遠州版10/25)

10/30　花村春暁展於湖西市民会館(-31)。(静岡10/21)

10/30　北村西望・澤田政廣展於清水戸田書店(-11/3)。(毎日中部版10/27, 静岡10/30, 朝日静岡版10/30)

10/31　長谷川安信版画展於浜松ギャラリー花菱(-11/7)。(静岡10/28, 11/4)

11/ 1　今日の空間展於横浜市民ギャラリー(-11)。飯田昭二、丹羽勝次、杉山邦彦、長岡宏他出品。

11/ 1　佐々木三由貴展於焼津ブービィ(-30)。(朝日静岡, 遠州版11/1)

11/　山田安展於静岡ラ・フォリア(-30)。(朝日静岡版11/6, 毎日中部版11/14)

11/　神田秀世志個展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-13)。(静岡11/4, 11, 毎日中部版11/10)

11/ 3　芹澤銈介、文化功労者表彰。(静岡10/26)

11/ 3　成瀬憲個展於沼津ギャラリーほさか(-9)、於東京椿近代画廊(12/2-7)。(沼津朝日11/2, 沼津毎日12/2, 朝日伊豆岳南版11/2, 静岡11/4, 毎日東部版11/7)

11/ 3　県芸術祭第16回於県庁西館展示室(3-7, 10-14, 17-21)。審査員:金丸重嶺, サイタ亨, 田辺憲三, 富永直樹, 植村鷹千代, 西谷卯木, 鈴村藍田, 伊藤勉, 栗山茂, 加藤晨明, 伊藤清永, 福沢一郎。(静岡10/31, 11/5, 17, 中日静岡, 遠州版11/3, 17, 読売静岡版11/6, 17, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/11)

11/ 3　海野光弘版画展於静岡さくらやギャラリー(-8)。(読売静岡版10/2, 11/6, 静岡10/28, 30, 11/4, 毎日中部版10/31, 朝日静岡版11/3)

11/ 3　かじのよしこ展於浜松リブレモール(-7)。(朝日遠州版11/2)

11/ 4　山田朝晴展於静岡松菱(-9)。(朝日遠州版11/4)

11/ 5　内田公雄個展於沼津ギャラリーほさか(-10)。(静岡11/4)

11/ 6　加賀薫園個展於沼津ニュー天心(-13)。(朝日伊豆岳南版11/6, 静岡11/11)

11/ 6　清末勝則展於静岡西武(-10)。(静岡11/6)

11/ 8　太田平八個展於静岡富士銀行静岡支店(-20)。(県油協no.28)

11/ 9　日本水彩浜松支部第2回展於浜松市美術館(-14)。(毎日遠州版11/3, 朝日遠州版11/8, 静岡11/10, 11)

11/　鈴木貞夫近況。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/10)

11/11　山口源色紙展於沼津ギャラリーほさか(-16)。(朝日伊豆岳南版11/8, 沼津朝日11/9, 沼津毎日11/11, 静岡11/11)

11/11　深沢幸雄銅版画展於浜松由美画廊(-23)。(読売静岡版11/6, 13, 朝日遠州版11/10, 静岡11/11, 毎日遠州版11/21)

11/　川端政雄個展於静岡幸文堂(-18)。(静岡11/13, 朝日静岡版11/13, 毎日中部版11/14)

11/12　赤堀尚ガラス絵・水彩展於東京永井画廊(-20)。(沼津朝日11/11)

11/14　マリノ・マリーニの版画展於沼津ギャラリータケイ(-21)。(沼津朝日11/9, 14, 17, 読売静岡版11/13,

朝日伊豆岳南版11/14)
11/14　杉村孝展於静岡天昌院(-24)。(朝日静岡版11/14, 毎日静岡版11/24)
11/14　現代メキシコ銅版画展於浜松ナカムラ画廊(-20)。(静岡11/18)
11/15　杉山照治・杉山瑛子二人展於静岡扇子屋(-30)。(静岡11/22)
11/　広瀬信明展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-12/4)。(毎日中部版12/1)
11/17　太田銀治個展於富士市文化センター(-20)。(静岡11/16)
11/17　鈴木健司個展於静岡さくらやギャラリー(-22)。(静岡11/13, 毎日中部版11/14, 朝日静岡版11/17)
11/17　第31回行動美術展於浜松市美術館(-23)。(読売静岡版11/6, 13, 静岡11/8, 18, 毎日遠州版11/14, 朝日遠州版11/17, 20, 中日遠州版11/18)
11/　国持フミ展於静岡幸文堂(-23)。(朝日静岡版11/20)
11/18　岡佐久良陶芸展於東京高島屋(-)。(静岡11/20)
11/18　稲葉瑞穂個展於沼津ギャラリーほさか(-23)。(沼津朝日11/18, 静岡11/18, 朝日伊豆岳南版11/20)
11/18　木津悠志展於清水戸田書店(-23)。(毎日中部版11/17, 朝日静岡版11/20)
11/18　榛会展於静岡谷島屋書店(-23)。(静岡11/18, 朝日静岡版11/20, 毎日中部版11/21)
11/22　県美術家連盟、美術館建設促進の陳情。(県美連会報no.17)
11/22　風間完さし絵展於沼津ニュー天心画廊(-22)。(沼津朝日11/19, 静岡11/25)
11/　浅田正博個展於沼津中央信託銀行沼津支店(-10)。(沼津朝日11/25, 静岡12/2)
11/25　鴨居玲・山本文彦・山本貞二紀会三人展於沼津ギャラリーほさか(-30)。(沼津毎日11/27, 静岡11/25, 朝日伊豆岳南版11/27)
11/25　市川正三小品展於清水戸田書店(-30)。(静岡11/22, 25, 毎日中部版11/24, 朝日静岡版11/27)
11/25　森一三・森年正石彫展於浜松松菱(-30)。(静岡11/23, 25)
11/25　清水秀耕展於浜松由美画廊(-30)。(静岡11/25)
11/26　「上橋薫:画家紹介シリーズ」(沼津朝日11/26, 12/2, 8)
11/30　伊豆美術会員四人展於沼津竹村(-5)。(沼津朝日11/30, 静岡12/2)
12/ 1　旺玄会静岡支部展於県庁西館展示室(-5)。(毎日中部版11/21, 静岡11/22, 25, 朝日静岡版12/2)
12/ 1　伊藤勉デッサン展於焼津ブービィ(-30)。(県美連会報no.17)
12/　市川晴之展於静岡松坂屋(-8)。(朝日静岡版12/4)
12/　青木一郎展於静岡画廊しずおか(-12/7)。(毎日中部版12/5)
12/ 2　増田大咢展於静岡幸文堂(-7)。(毎日中部版12/1, 朝日静岡版12/2)
12/ 5　「金原秋夫 この人」(静岡12/5)
12/ 5　加藤アンリ展於浜松元城アートギャラリー(-12)。(静岡12/4)
12/ 6　関誠一郎個展於浜松ギャラリー花菱(-12)。(毎日遠州版12/5, 中日駿遠版12/8, 静岡12/9)
12/　駒田嘉一路近況。(静岡12/8)
12/ 9　川端政雄個展於静岡幸文堂(-14)。(毎日中部版12/5, 静岡12/11, 朝日静岡版12/11)
12/ 9　八木教幸展於静岡谷島屋(-14)。(毎日中部版12/5)
12/ 9　レオナール・フィニ版画展於浜松由美画廊(-14)。(中日駿遠版12/8, 朝日遠州版12/9)
12/　永井正御展於天竜栄文堂書店(-)。(静岡12/9)
12/　鳩巣会展於沼津ギャラリーほさか(-15)。(沼津朝日12/10, 14, 静岡12/9)
12/　静粋会第5回展於静岡西武(-15)。(静岡12/11, 15, 朝日静岡版12/11)
12/11　**《黒田家住宅》《長屋門》**修復完成。(毎日東, 中部, 遠州版S50.8/29, S51.1/8, 12/2, 静岡S51.1/14, 5/28, 12/14, 中日駿遠版6/8, 12/10, 読売遠州版12/1, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版1/14)
12/14　杉本達也「鳩巣会」(沼津朝日12/14)
12/14　落合英男個展於県庁西館展示室(-19)。(静岡12/9, 朝日静岡版12/13, 読売静岡版12/18)
12/14　年輪会第10回展於県庁西館展示室(-19)。(静岡12/11)
12/　海野幸正、全日写連表彰。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/17)
12/16　小塩令子個展於静岡幸文堂(-21)。(県美連会報no.17)
12/16　白井幸彦個展於浜松市美術館(-21)。(中日駿遠版12/15, 静岡12/16, 朝日遠州版12/16, 毎日遠州版

12/19）
12/21　青木達弥小品展於静岡さくらやギャラリー（-27）。（県美連会報no.17）
12/21　能勢海旭古稀展於浜松市美術館（-24）。（読売遠州版12/18）
12/23　一枚の絵大洋画展第7回於静岡新聞別館（-27）。静岡市へ吉村美令由《森の館》寄贈。（静岡12/22, 23, 25）
12/24　テオドロ・ロム版画展於長泉池田病院（-28）。（沼津毎日12/22, 朝日伊豆岳南版12/23, 沼津朝日12/24, 静岡12/26, 毎日遠州版12/26）

**1977　昭和52年**

1/ 1　志賀旦山《**千本浜と冨士**》（沼津朝日1/1）
1/ 1　中村哲夫近況。（静岡1/1）
1/ 2　土門拳写真 室生寺展於清静岡センター（-16）。（静岡S51.11/30, 12/31, S52.1/1, 3, 7, 13, 朝日静岡版1/9）
1/ 2　新春旦山会日本画第1回展於沼津ギャラリーほさか（-7）。（沼津朝日S51.12/12, 沼津毎日S51.12/17, S52.1/1 静岡1/6）
1/ 4　関野準一郎版画展於静岡松坂屋（-17）。（静岡1/4）
1/ 5　萩原井泉水句碑画幅展於浜松市美術館（-9）。（静岡1/6, 読売遠州版1/6）
1/　青木草風展於静岡東海銀行静岡支店（-21）。（毎日中部版1/5, 朝日静岡版1/5）
1/ 6　芹沢清子展於静岡谷島屋書店（-11）。（朝日静岡版1/6, 毎日中部版1/9）
1/ 7　細谷泰茲彫刻作品展於県庁西館展示室（-18）。（毎日中部版S51.12/26, 静岡1/6, 8, 朝日静岡版1/9）
1/　小田帰山展於沼津西武（-12）。（沼津朝日S51.12/26, 静岡1/6）
1/ 9　吉野不二太郎個展於藤枝ギャラリー清水（-16）。（朝日静岡版1/7, 静岡1/8, 毎日中部版1/9）
1/10　アトリエC126版画展於浜松ナカムラ画廊（-15）。（朝日遠州版1/7）
1/　行動美術小品展於浜松ギャラリー花菱（-16）。（朝日遠州版1/11, 毎日遠州版1/12）
1/13　安田酔竹朱竹展示即売会於静岡松坂屋（-17）。（静岡1/12, 14）
1/13　太田昭個展於静岡幸文堂画廊（-18）。（静岡1/10, 15）
1/13　井上市三郎個展於浜松松菱（-17）。（朝日遠州版1/12）
1/17　「饗場二郎 この人」（静岡1/17）
1/18　山田桂幸展於浜松ギャラリー花菱（-24）。（朝日遠州版1/15）
1/　太田儀八近況。（毎日東, 中部, 遠州版1/20, 静岡1/27）
1/20　県油彩美術家協会小品展於静岡谷島屋書店（-25）。（静岡1/17, 朝日静岡版1/19, 中日駿遠版1/19）
1/20　天竜市美術協会第1回選抜展於天竜栄文書店（-25）。（静岡1/18, 21, 朝日静岡版1/19）
1/　島田艶子油絵展於沼津ギャラリーほさか（-25）。（静岡1/20）
1/　望月利八創作戯面展於東京ローマ画廊（-26）。（静岡1/22）
1/22　寺平誠介「小野竹喬先生と春男君」（静岡1/22）
1/22　石田有加油絵野外展於伊東。（静岡1/23）
1/22　一枚の絵大洋画展於清水戸田書店（-25）, 藤枝市民会館（28-30）, 富士市農協会館（2/1-3）。藤枝市に吉村美令由《古城のある町》寄贈。（静岡1/22, 23, 29, 31）。
1/24　青木草風・青木鐵夫二人展於県庁西館展示室（-28）。（毎日中部版1/19, 静岡1/20, 22, 27, 朝日静岡版1/22）
1/25　佐野英雄個展於東京タカゲン画廊（-30）。（静岡1/24）
1/25　越後島進油絵小品展於浜松元城アートギャラリー（-31）。（朝日遠州版1/25, 毎日遠州版1/26, 静岡1/27）
1/27　水谷万早子展於沼津ギャラリーほさか（-2/1）。（静岡1/27, 沼津朝日1/29, 沼津毎日1/29, 朝日伊豆岳南版1/28）
1/27　水島裕日本画展於静岡松坂屋（-2/1）。（静岡1/26）
1/27　地線第1回展於静岡谷島屋書店（-2/1）。（朝日静岡版1/22, 毎日中部版1/23）
1/27　木原康行銅版画展於浜松由美画廊（-2/8）。（静岡1/26, 朝日遠州版1/27, 静岡1/29, 毎日遠州版1/30）
1/29　近代日本の美術展於浜松市美術館（-2/27）。（静岡1/27, 30, 2/3, 14, 17, 中日静岡版1/27, 毎日静岡版2/4, 朝日遠州版1/12, 読売遠州版2/3）
2/ 1　細谷泰茲彫刻展於浜松ギャラリー花菱（-15）。（朝日遠州版2/1, 毎日遠州版2/2, 静岡2/3, 10）
2　西猷作小品展於焼津ブービィ（-28）。（朝日静岡版2/8, 静岡2/10, 17）
2/　平田勝規淡彩画展於浜松画廊（-12）。（朝日遠州版2/1, 毎日遠州版2/2, 中日駿遠版2/2, 静岡2/3, 10）

2/ 4　第4回山種美術館賞展於東京山種美術館(-3/27)。村松秀太郎《生》
2/ 5　牧田喜義「美術のこころ」(静岡2/5, 12)
2/ 5　田中君枝展於沼津マルサン書店(-15)。(沼津朝日2/4, 朝日伊豆岳南版2/5, 沼津毎日2/8)
2/ 6　獏黙庵子《インド画信》(沼津朝日2/6, 13, 20, 27, 3/6, 13, 27, 4/3, 10, 17, 24, 5/1, 8, 15, 22, 29, 6/5)
/　小笠原淳『浮世絵豆本』刊行。(静岡2/7)
2/ 7　長岡宏作品展於東京村松画廊(-13)。(県美連会報no.17)
2/10　山本神泉近況。(静岡2/10)
2/10　県二科会小品展於静岡ブラザーギャラリー(-14)。(静岡2/7, 10, 毎日中部版2/9, 朝日版2/10, 中日駿遠版2/15)
2/10　日和崎尊夫版画展於浜松由美画廊(-22)。(静岡2/10, 17, 朝日遠州版2/10, 毎日遠州版/2/13, 読売静岡版2/19)
2/12　宮田雅之切り絵展於浜松市美術館(-15)。(静岡2/10, 毎日遠州版2/13)
2/13　和田金剛《母子像》近況。(沼津朝日2/13)
2/14　「画廊増え高企画次々」(静岡2/14)
2/15　藤枝市文化センター開館。(静岡S51.4/15, 25, 12/31, S52.2/6, 15, 中日静岡版1/4, 読売静岡版2/12, 毎日中部版2/15)
2/16　藤枝総合文化展於藤枝市文化センター(-20)。(毎日中部版2/15, 静岡2/17)
2/　江崎武男《サントロペ》藤枝市文化センターに飾られる。(静岡2/21)
2/17　油絵同志八人展於静岡幸文堂(-22)。(朝日静岡版2/12, 静岡2/14, 毎日中部版2/20)
2/17　永田明・伊藤嘉八二人展於県庁西館展示室(-22)。(静岡2/17)
2/18　徳富蘇峰展於静岡新聞別館(-3/28)。(静岡2/19)
2/　郷土の陶芸展於静岡西武(-23)。(静岡2/22, 毎日中部版2/23)
2/　小山ゆう 第22回小学館漫画賞受賞。(静岡2/19)
2/19　韓国廣州窯茶陶展於静岡日生ビル(-21)。(朝日静岡版1/17)
2/　森一三近況。(毎日東, 中部, 遠州版2/20)
2/20　大石憲司展於浜松ギャラリー花菱(-27)。(朝日遠州版2/20, 中日駿遠版2/20)
2/21　大村政夫《観音像》開眼於福寿院。(毎日静岡版3/15)
2/21　一陽会遠州グループ第5回展於浜松元城アートギャラリー(-27)。(静岡2/21, 県油協no.29)
2/24　大石士郎展於清水戸田書店(-3/1)。(毎日中部版2/23, 静岡2/24, 朝日静岡版/24)
2/24　池田満寿夫展於浜松由美画廊(-3/6)。(読売静岡版2/19, 中日駿遠版2/23, 3/2, 静岡2/24)
2/28　堤達男「裸女と陽光」(静岡2/28)
2/　余村晨油絵個展於静岡松坂屋(-3/1)。(静岡2/21, 朝日静岡版2/22)
2/　池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ』(静岡S51.12/24)
3/ 1　人間を描く異色作家たち展於池田20世紀美術館(-5/31)。(静岡3/28, 3/2, 3, 12, 19, 26, 4/2, 9, 16)
市川正三《無言譜》《よいどれ》他。(静岡3/12)
3/　はなわ憲嗣作品展於静岡ラ・フォリア(-31)。(静岡3/5, 14)
3/ 2　多賀新銅版画展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日3/2)
3/ 3　宮代次郎個展於沼津ギャラリーほさか(-6)。(静岡3/3, 朝日伊豆岳南版3/3, 沼津毎日3/4, 沼津朝日3/4, 毎日東部版3/6)
3/　寺島紫明展於沼津西武(-9)。(静岡3/3)
3/ 5　柿下木冠「現代の書」(静岡3/5)
3/　池田正司『ベレー帽と自転車』刊行。(静岡3/7, 清美協no.155)
3/　中村壬哉花シリーズ、沼津マルサン書店より毎月発行。(沼津朝日3/8)
3/　海野光弘版画展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-12)。(毎日中部版3/9, 静岡3/10)
3/　赤池弘子個展於静岡住友信託銀行静岡支店(-26)。(静岡3/10)
3/　吉川三伸展於浜松ギャラリー花菱(-16)。(朝日遠州版3/15)
3/　伊奈久陶芸展於静岡ライフランド静岡店(-16)。(静岡3/9, 毎日中部版3/10)
3/10　香月泰男・加山又造版画展於沼津ギャラリーほさか(-15)。(静岡3/10, 朝日伊豆岳南版3/10, 沼津朝日3/10, 沼津毎日3/13, 毎日東部版3/13)
3/10　光風会静岡支部第13回展於県庁西館展示室(-13)。(朝日静岡版3/8, 毎日中部版3/9, 静岡3/10)
3/10　古沢岩美版画展於浜松由美画廊(-22)。(中日駿遠

版3/9, 朝日遠州版3/10, 毎日遠州版3/20)

3/11　樋口治平・佐々木信平・藤田忠夫展於沼津西武(-16)。(静岡8/10)

3/11　石田義雄小品展於静岡扇子屋(-20)。(静岡3/5, 毎日中部版3/6, 朝日静岡版3/12)

3/12　大谷久子小品展於浜松浜松画廊(-18)。(朝日遠州版3/12)

3/14　飯田昭二展於東京村松画廊(-20)。(静岡3/14)

3/15　青木草風展於静岡東洋信託銀行(-4/16)。(毎日中部版3/13, 朝日静岡版3/14)

3/15　遠州美術展於浜松市美術館(-20)。(朝日遠州版3/14)

3/16　昭代書家十人展於静岡さくらやギャラリー(-21)。(毎日中部版3/16, 朝日静岡版3/16, 静岡3/19)

3/　《マッケンジー邸》保存決定。(読売静岡版S50.8/1, S52.3/9, 静岡S50.11/8, S52.3/9, 朝日静岡版3/9, 17, 中日静岡版3/9, 17, 毎日中部版3/17)

3/17　大庭修二展於御殿場農協会館(-21)。(朝日伊豆岳南版3/4, 静岡3/7, 毎日東部版3/16)

3/17　武山敏江作品展於静岡幸文堂(-22)。(静岡3/14)

3/17　坂口一草日本画展於静岡松坂屋(-22)。(静岡3/16, 19)

3/17　油彩肖像画展於浜松松菱(-22)。(朝日遠州版3/16)

3/18　内山雨海展於浜松西武(-23)。(朝日遠州版3/17)

3/18　大村政夫《小川耕一胸像》除幕式於大井川町。(静岡3/19)

3/　山本勝明展於沼津池田画廊(-30)。(沼津毎日3/18)

3/21　県日本画連盟発足。(静岡3/21)

3/21　太田銀治小品展於熱海ヤオハン(-27)。(静岡3/16)

3/22　佐々木松次郎遺作展於東京セントラルサロン(-27)。(読売静岡版3/19)

3/23　杉山青樹路創作帯展於静岡さくらやギャラリー(-28)。(朝日静岡版3/23, 静岡3/25)

3/24　尾田一念・尾田芳炎母娘展於沼津ギャラリーほさか(-29)。(沼津朝日3/23, 朝日伊豆岳南版3/23, 沼津毎日3/27)

3/24　谷内六郎原画展於沼津マルサン書店(-4/12)。(朝日伊豆岳南版3/24)

3/24　鱸利彦・滝田依子展於浜松由美画廊(-5)。(中日駿遠版3/23, 朝日遠州版3/24, 静岡3/26, 31, 毎日遠州版3/30)

3/25　第37回美術文化協会展於東京都美術館(-4/6)。見崎泰中《ざぶとんとくっしょん》入選者。(中日遠州版4/1)

3/27　静岡アンデパンダン展於静岡青葉公園。(読売静岡版3/26, 毎日中部版3/27)

3/27　吉原英雄版画展於浜松大島ホール(-30)。(朝日遠州版3/26)

3/28　堤達男《波切不動尊》除幕式於安良里。(静岡3/1)

/　郷土ゆかりの絵と書道名品展於静岡松坂屋(-10)。(静岡3/31, 4/1)

3/31　永瀬義郎版画展於沼津ギャラリーほさか(-5)。(朝日伊豆岳南版3/29, 31, 沼津朝日3/31, 沼津毎日3/31, 静岡3/31, 毎日東部版4/3)

4/ 1　杉山晃沼津焼展於沼津ギャラリーほさか(-5)。(毎日東部版3/30, 沼津朝日3/31, 静岡/31)

4/ 1　ギャラリー紫陽花オープン。(読売静岡版3/26, 朝日静岡版4/1, 清美協no.156)

4/ 1　現代作家六人展於静岡ギャラリー紫陽花(-12)。青木達弥、池田正司、市川正三、小川幸彦、土橋妙子、細谷泰茲。(静岡4/2,7, 朝日静岡版4/2, 毎日静岡版4/6)

4/ 1　増田大咢個展於静岡ラ・フォリア(-30)。(静岡3/26, 朝日静岡版3/26, 読売静岡版3/26, 4/2, 毎日中部版3/30)

4/ 1　鈴木常夫柴江舞妓展於静岡永田画廊(-5)。(読売静岡版3/26, 4/2, 毎日中部版3/30, 静岡3/31, 中日駿遠版3/31)

4/ 1　桜井琴風近作展於静岡西武(-6)。(静岡3/31)

4/　久保明子作品展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-16)。(朝日静岡版4/2, 10, 読売静岡版4/2, 静岡4/14)

4/　柴田秀夫詩と写真展於静岡東海銀行静岡支店(-30)。(静岡4/4, 朝日静岡版4/5, 毎日中部版4/24)

4/ 2　深沢幸雄展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日4/1)

4/ 3　田沢茂個展於浜松タロー(-30)。(静岡3/31, 中日駿遠版4/1, 読売静岡版4/2, 朝日遠州版4/3, 毎日静岡版4/20)

4/　塚田誠展於栄林寺(-10)。(朝日遠州版4/3, 読売静岡版4/9)

4/ 4　大庭祐輔個展於東京銀座渋谷画廊(-10)。
4/ 5　一向展於浜松市美術館(-8)。(朝日遠州版4/4)
4/ 6　第7回日彫展於東京都美術館(-24)。(静岡4/16)
浅井行雄《立像》大村政夫《春》澤田政廣《日蓮上人》下山昇《道化のマリオネット》杉本宗一《馬頭》堤達男《粧》飛岡文一《喜寿のH先生》平馬学《早天》平野富山《枝の主日》松田裕康《萌える》和田金剛《草丘》(出品目録)
4/ 7　鈴木雨竹展於沼津ギャラリーほさか(-12)。
(沼津朝日4/6, 読売静岡版4/9)
4/ 7　野中弘士個展於浜松松菱(-12)。(中日駿遠版4/5, 朝日遠州版4/6, 静岡4/9, 読売静岡版4/9)
4/ 7　田中千之作品展於浜松由美画廊(-12)。
(朝日遠州版4/7, 読売静岡版4/9)
4/ 8　常葉美術館公開。6/8落成式予定。(読売遠州S51.4/21, S52.4/7, 毎日中部, 遠州版4/7, 朝日遠州版4/9, 静岡4/11)
4/　佐々木信平・樋口治平・藤田忠夫三人展於静岡西武(-13)。(静岡4/9)
4/ 9　第63回光風会展於東京都美術館(-24)。(静岡4/9, 16)
藤本東一良《トローヴィルの渚》
北川紋子入選。(静岡4/8)
4/10　二紀会展於浜松市美術館(-17)。(静岡4/7, 14, 17, 朝日遠州版4/9, 読売静岡版4/9)
4/14　旦山会小品展於沼津ギャラリーほさか(-19)。(毎日静岡版4/13, 沼津朝日4/14, 静岡4/14)
4/14　木村茂・二見彰一・山下清澄現代版画三人展於静岡画廊しずおか(-19)。(静岡4/9, 18, 読売静岡版4/9)
4/14　伏見春信墨彩画展於清水戸田書店(-19)。(静岡4/9, 14, 読売静岡版4/9, 16, 朝日静岡版4/13)
4/14　赤堀正巳・市川鉦次二人展於静岡幸文堂(-19)。
(朝日静岡版4/13, 静岡4/14, 読売静岡版4/16)
4/14　山田孝之油絵展於静岡紫陽花(-19)。(静岡4/14)
4/14　林谷乙治、静岡市無形文化財認定。(静岡4/15)
4/14　岡本信治郎展於浜松由美画廊(-26)。
(毎日遠州版4/10, 朝日遠州版4/16)
4/15　渡辺崋山とその一門展於駿府博物館(-5/8)。
(静岡4/14, 16)
4/15　ルオー版画展於浜松ナカムラ画廊(-20)。
(中日駿遠版4/15, 朝日遠州版4/16)
4/16　「大村政夫 この人あの人」(読売静岡版4/16)
4/16　県善三郎小品展於浜松ギャラリー花菱(-23)。(中日駿遠版4/5, 毎日遠州版4/10, 静岡4/14, 朝日遠州版4/16)
4/　浜松市美術館、基金制度呼び掛け。(静岡4/17)
4/18　赤堀尚油彩展於東京大阪フォルム画廊(-28)。
(沼津朝日4/22, 沼津毎日4/24)
4/　萩萩月展於三島三和銀行三島支店(-30)。(静岡4/21)
4/21　横井弼個展於沼津ギャラリーほさか(-26)。(朝日伊豆岳南版4/18, 沼津朝日4/20, 静岡4/21, 毎日東部版4/24)
4/21　静流会展於沼津ギャラリーほさか(-26)。(読売静岡版4/16, 沼津毎日4/17, 沼津朝日4/19, 21, 毎日静岡版4/20)
4/21　中山一司個展於清水戸田書店(-26)。
(朝日静岡版4/19, 静岡4/25)
4/21　宮崎万平洋画展於静岡松坂屋(-26)。(静岡4/18, 20, 25, 朝日静岡版4/19, 毎日中部版4/24)
4/21　鈴木惇介展於静岡紫陽花(-26)。
(朝日静岡版4/19, 読売静岡版4/23)
4/　河西賢太郎水彩画展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-5/7)。(静岡4/21, 28, 読売静岡版4/23, 毎日中部版5/1)
4/　寺島紫明展於静岡西武(-27)。(静岡4/23)
4/21　長島豊彦展於三島八百半(-25)。(読売静岡版4/16, 毎日東部版4/21)
4/23　吉野不二太郎個展於静岡産業会館(-29)。(朝日静岡版4/23, 静岡4/23, 読売静岡版4/23, 毎日中部版4/24)
4/23　吉崎吉一展於浜松ギャラリー花菱(-29)。(毎日遠州版4/17, 中日駿遠版4/21, 静岡4/21, 読売静岡版4/23)
4/24　市川正三無言譜展於県庁西館展示室(-30)。(朝日静岡版4/23, 静岡4/23, 読売静岡版4/23)
4/25　半田昌雄《暁の現象》御殿場市民会館へ寄贈。(毎日東部版1/25, 4/26, 静岡4/26, 読売静岡版4/26)
4/26　中部一陽会浜松第3回展於浜松市美術館(-5/1)。
(静岡4/21, 27, 読売静岡版4/23, 朝日遠州版4/26)
4/26　川島龍州展於浜松遠鉄(-5/1)。(静岡4/21, 読売静岡版4/23, 26, 毎日遠州版4/24, 朝日遠州版4/26)
/　小山勇個展於豊橋紅の木(-5/1)。(静岡4/28)

4/27　第54回春陽会展於(-5/14)。
小栗哲郎《宅地造成風景》
入選者。(中日遠州版4/27)

4/28　第13回現代日本美術展於東京都美術館(-5/14)。
内田晴行《Vanishing point》

4/28　第51回国画会展於東京都美術館(-5/14)。
山口源《能役者》(遺作)栗山茂《古墳地帯》伊藤勉《貴婦人―愛の儀礼》《貴婦人―旅仕度》白沢良《ブラックコート》

4/28　森田与四郎油絵展於沼津マルサン書店(-5/3)。
(沼津朝日4/22, 29, 読売静岡版4/23, 朝日伊豆岳南版4/27)

4/28　芹沢晋吾 滞スペイン展於沼津ギャラリーほさか(-5/3)。
(沼津朝日4/24, 毎日東部版4/24, 静岡4/28)

4/28　立道成夫油絵展於沼津ギャラリーほさか(-5/3)。
(沼津朝日4/1, 19, 朝日伊豆岳南版4/19, 読売静岡版4/23, 毎日東部版4/27, 静岡4/28)

4/28　山下清の東海道五十三次と秀作展於藤枝市民会館(-5/1)。(静岡4/28, 29, 中日駿遠版4/29)

4/28　磐田市郷土館修復完成。(毎日中部, 遠州版S49.12/26, S52.4/12, 朝日静岡版S51.3/16, 9/1, S52.4/10, 29, 静岡S52.1/4, 4/9, 読売静岡, 遠州版S51.1/31, S52.3/16, 中日駿遠版3/31, 5/1)

4/28　郷土画家展於浜松由美画廊(-5/10)。(中日駿遠版4/26, 朝日遠州版4/27, 毎日遠州版5/1)

4/29　『東海の四季』発売。(毎日静岡版4/22)

4/29　はんゆう会展於下田久松プラザ(-5/3)。(静岡4/30)
福田平八郎展於富士美術館(-5/25)。(静岡5/19)

4/29　寺平誠介「画家三橋節子を偲ぶ」(静岡4/30)

4/30　志賀旦山《郷土絵はがき》刊行。
/　(沼津毎日4/16, 沼津朝日6/30)
増田大咢展於静岡紫陽花(-5/10)。
/　(朝日静岡版5/4, 毎日中部版5/8)

5/ 1　木下恵介監督近況。(静岡5/1)

5/ 1　杉山良雄 足柄古道展於沼津池田画廊(-10)。(沼津毎日5/1, 沼津朝日5/3, 静岡4/30, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/30, 読売静岡版5/7, 毎日東, 中部版5/8)

5/　佐々木信平、常葉学園短期大学美術・デザイン科助教授に就任。

5/　高木圭祐個展於静岡ラ・フォリア(-31)。(静岡5/9)

5/　赤羽良知スケッチ展於静岡ニューバラナ(-8)。
(朝日静岡版5/1, 静岡5/2, 7, 毎日静岡版5/5)

5/ 2　梅島堅一写真展於米国ニューヨーク(-)。
(読売静岡, 遠州版5/2)

5/ 2　オノサト・トシノブ展於沼津ギャラリータケイ(-9)。
(沼津朝日4/29, 5/7, 朝日伊豆岳南版4/30, 読売静岡版5/7)

5/ 2　県アンデパンダン第7回展於県庁西館展示室(-5)。
(毎日中部版5/1, 朝日静岡版5/3)

5/ 3　曽宮夕見個展於東京兜屋画廊(-8)。

5/　佐野のり子個展於伊東この花ホール(-8)。(静岡5/9)

5/　杉村勇展於静岡さくらやギャラリー(-9)。
(朝日静岡5/4, 読売静岡版5/7)

5/ 5　湯浅猛油絵展於沼津ギャラリーほさか(-10)。(朝日伊豆岳南版5/4, 沼津朝日5/5, 毎日東部版5/8)

5/ 5　川崎道雄書展於沼津ギャラリーほさか(-10)。(朝日伊豆岳南版5/4, 沼津朝日5/5, 読売静岡版5/7, 毎日東部版5/8)

5/ 5　池田正司民俗画展於清水戸田書店(-10)。
(静岡4/30, 5/7, 朝日静岡版5/4)

5/ 5　恩田秋夫展於浜松松菱(-10)。(朝日遠州版5/5)

5/ 5　市野三接展於天竜栄文堂(-11)。(中日駿遠版5/5)

5/ 6　加藤清治, 県文化奨励賞受賞。(静岡4/23, 中日静岡, 遠州版4/23, 毎日静岡版4/23, 読売静岡版5/7, 朝日静岡版5/7)

5/ 7　中村宏素描展・車窓篇於東京中野紅画廊(-19)。
(日本美術no.142)

5/ 8　鳩巣会日彫会出品作品展示於富士パピー(-15)。
(静岡5/12)

5/ 8　県美術家連盟第14回展於県庁西館展示室(-12), 於浜松市美術館(18-22)。(読売静岡版4/9, 5/8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/7, 8, 18, 沼津毎日5/11, 静岡5/12, 19, 県美連会報no.17)

5/ 9　西貝和子「版画にとりつかれて20年」(静岡5/9)

5/10　北川民次全版画展於名古屋日動画廊(-20), 於大阪日動画廊(21-30)『北川民次版画全集』刊行。

5/12　澤田政廣展於東京高島屋(-17)。(毎日5/14)

5/12　山下充展於東京日動サロン(-20)。

5/12　太田銀治小品展於沼津天心画廊(-16)。(沼津朝日5/11, 朝日伊豆岳南版5/11, 毎日東部版5/15)

5/12　土龍会作陶展於静岡松坂屋(-15)。(静岡5/12)

5/12　司修油彩版画展於浜松由美画廊(-24)。(静岡5/2, 12, 14, 19, 朝日遠州版5/12, 読売静岡版5/14, 毎日遠州版5/15)

5/　青木利律子小品展於静岡紫陽花(-17)。(静岡5/12)

5/13　安井賞受賞作家展於沼津西武(-17)。(静岡5/12)

5/14　白隠展於佐野美術館(-6/19)。(静岡5/14, 朝日伊豆岳南版5/14, 20, 読売静岡版5/14, 沼津朝日5/19)

5/16　多治見胤昭彫刻展於浜松元城アートギャラリー(-22)。(朝日遠州版5/16, 中日駿遠版5/18, 静岡5/19, 読売静岡版5/21)

5/18　岡本太郎講演会於三島イデンビル。(静岡5/12)

5/　浜松自由美術グループ展於浜松市美術館(-22)。(毎日遠州版5/18, 静岡5/19, 読売静岡版5/21)

5/19　渡辺墨仙・寒河江英明二人展於清水戸田書店(-24)。(読売静岡版5/14, 朝日静岡版5/18, 静岡5/23)

5/19　繁田博版画展於静岡幸文堂(-24)。(朝日静岡版5/18, 静岡5/23)

5/　江崎敏夫作陶展於沼津富士急(-24)。(静岡5/19, 26)

5/　戸田三顕日本画展於浜松松菱(-24)。(朝日遠州版5/21)

5/　戸田松原公園の彫刻修復。(静岡5/21)

5/21　シャガール展於沼津ギャラリータケイ(-31)。(朝日伊豆岳南版5/16, 静岡5/19, 26, 読売静岡版5/21, 沼津朝日5/24, 6/4, 毎日静岡版5/25)

5/24　鈴木貞夫油絵展於浜松遠鉄(-29)。(毎日静岡版5/22, 朝日遠州版5/24, 静岡5/26, 読売静岡版5/28)

5/24　壮炎会第32回展於浜松市美術館(-29)。(静岡5/19, 26, 読売静岡版5/21, 朝日遠州版5/23)

5/　香月泰男展於静岡画廊しずおか(-29)。(静岡5/23, 26, 中日駿遠版5/24, 毎日静岡版5/25, 読売静岡版5/28)

5/25　安井曽太郎展於浜松ナカムラ画廊(-31)。(中日駿遠版5/24, 静岡5/28)

5/26　山下清秀作展於熱海ヤオハン(-30)。(静岡5/27)

5/26　松田裕康彫刻展於沼津ギャラリーほさか(-31)。(沼津朝日5/25, 朝日伊豆岳南版5/25, 沼津毎日5/26, 毎日東部版5/29)

5/26　成瀬憲個展於沼津ギャラリーほさか(-31)。(朝日伊豆岳南版5/25, 静岡5/26)

5/26　小堀稜威雄油絵小品展於静岡紫陽花(-31)。(朝日静岡版5/26, 静岡5/28, 読売静岡版5/28, 毎日中部版5/29)

5/26　斉藤寿一版画展於浜松由美画廊(-6/7)。(朝日遠州版5/26, 静岡5/26, 30, 6/1, 読売静岡版5/28, 6/11, 毎日遠州版5/29)

5/27　県秀作美術展於県立中央図書館(-7/15)(静岡5/28, 読売静岡版6/11)

5/28　松下忠雄展於伊東この花ホール(-)。(読売静岡版5/28)

5/29　佐野隆一逝去。87歳。(毎日東, 中部, 遠州版5/31)

5/31　芹澤銈介展於東京サントリー美術館(-7/10)。(三彩no.361, 日本美術no.142, 読売6/4, 朝日6/22)

/　天竜川の風物を描く会展於天竜南画堂(-5)。(静岡6/2)

6/　岡崎平一展於焼津ブービィ(-30)。(朝日静岡版6/2)

6/　梅田博之油絵展於浜松画廊(-6)。(静岡6/2, 中日駿遠版6/2)

6/ 2　稲葉泰樹洋画小品展於沼津ギャラリーほさか(-7)。(沼津朝日6/1, 沼津毎日6/2, 静岡6/2, 毎日東部版6/5)

6/ 2　相笠昌義版画展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日5/31, 6/4)

6/ 2　荒木繁個展於清水戸田書店(-7)。(静岡5/30, 6/2, 毎日静岡版6/1, 朝日静岡版6/1, 読売静岡版6/4)

6/ 2　長谷川栄一水彩画展於静岡幸文堂(-7)。(静岡5/28, 読売静岡版5/28, 6/4, 朝日静岡版6/1)

6/ 2　焼津焼作陶展於静岡松坂屋(-7)。(静岡5/28, 6/1)

6/ 3　伊豆長八展於三島郷土館(-7/15)。(朝日伊豆岳南版5/27, 静岡6/2)

6/ 3　西豊個展於県庁西館展示室(-8)。(静岡5/28, 6/2)

6/ 3　久保美代子個展於静岡西武(-8)。(朝日静岡版6/3, 静岡6/4, 読売静岡版6/4, 毎日中部版6/5)

6/ 3　七丈南豊書展於県庁西館展示室(-8)。(静岡5/28)

6/ 3　木野郁子展於浜松花菱(-8)。(読売静岡版5/28, 6/4)

6/ 5　ビュフェ美術館近況。(静岡6/5)

6/ 6　池田20世紀美術館近況。(静岡6/6)

6/ 6　杉山邦彦展於東京村松画廊(-12)。(毎日東, 中部, 遠州版6/12, 美術手帖no.424)

6/ 7　堤達男《女神》清水市役所レリーフ。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/7)

6/ 7　内田晴之個展於京都ギャラリー射手座(-12)。(京都6/11)

6/　ギャラリータケイ、パウル・ウンダーリッヒ《**アマゾン**》予約募集。(沼津朝日6/9)
6/ 8　ロシア美術館名作展於富士美術館(-30)。(静岡6/4, 8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/8)
6/ 8　後藤和信展於静岡ブラザービル(-15)。(読売静岡版6/4, 朝日静岡版6/19)
6/ 8　開館特別展於常葉美術館(-15)。(中日駿遠版6/10)
6/ 9　太田宗平個展於沼津ギャラリーほさか(-14)。(沼津朝日6/8, 静岡6/9, 朝日伊豆岳南版6/10, 毎日東部版6/12)
6/ 9　南城由起子個展於清水戸田書店(-14)。(読売静岡版6/4, 11, 毎日中部版6/8, 静岡6/11)
6/ 9　藤野嘉市個展於幸文堂(-14)。(静岡6/4, 読売静岡版6/4, 11, 毎日中部版6/8, 朝日静岡版6/10)
6/ 9　田村文雄版画展於浜松由美画廊(-21)。(静岡5/28, 6/9, 毎日遠州版6/8, 朝日遠州版6/10)
6/　勝山陽子展於静岡紫陽花(-14)。(静岡6/13)
6/10　エッシャー展於浜松西武(-22)。(中日駿遠版版6/1, 静岡, 遠州版6/4, 遠州版6/7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 静岡6/9)
6/10　鈴木貞夫、袋井市へ作品寄贈。(中日駿遠版6/12)
6/　鈴木三朝展於浜松浜松画廊(-17)。(毎日静岡版6/15)
6/11　第3回彫刻の森美術館大賞展於箱根彫刻の森美術館(-11/30)。宮脇愛子《5時43分の眼》
6/12　獏黙庵子《**ネパール画信**》(沼津朝日6/12, 19, 26, 7/3, 10)
6/12　浅井行雄《**小田原勇胸像**》除幕式於榛原培本塾。(中日静岡版6/13*, 静岡6/13, 朝日静岡版6/26)
6/13　山下充展於大阪日動サロン(-21)。
6/13　森田昌男近況。(静岡6/13)
6/　斎藤真一個展於パリ(-)。(毎日6/16, 7/17)
6/15　伊藤勉個展於静岡さくらやギャラリー(-20)。(静岡6/13, 朝日静岡版6/16, 毎日中部版6/19)
6/16　風土展第20回展於沼津ギャラリーほさか(-21)。(沼津毎日6/14, 沼津朝日6/15, 静岡6/16, 毎日東部版6/19)
6/16　第十二代中里太郎右衛門新作陶芸展於浜松松菱(-21)。(朝日遠州版6/15, 静岡6/16)
6/　マリノ・マリーニ、ジャン・デュビュッフェ新作展於沼津ギャラリーほさか(-21)。(沼津朝日6/18, 静岡6/16)
6/　水上悦展於静岡谷島屋書店(-21)。(朝日静岡版6/16, 中日駿遠版6/16)
6/　ビュッフェ版画展於沼津西武(-22)。(静岡6/16)
6/　杉田美幸個展於静岡東洋信託銀行静岡支店(-7/15)。(静岡4/18, 6/27)
6/18　焼津市文化会館オープン。(静岡6/4)
6/21　ガスサロン再開第1回展於静岡ガスサロン(-7/3)。(朝日静岡版5/7, 静岡, 遠州版6/21, 静岡6/16, 読売静岡版6/18, 中日静岡版6/22, 中日静岡版11/20)
6/　西村公義個展於沼津ギャラリータケイ(-26)。(毎日静岡版6/22, 静岡6/23, 沼津朝日6/24)
6/　吉岡一油彩画個展於静岡画廊しずおか(-27)。(静岡6/18, 23, 毎日中部版6/22, 読売静岡版6/25)
6/23　山下清展於湖西市民会館(-27)。(朝日遠州版6/22, 静岡6/28)
6/23　中野清光個展於沼津ギャラリーほさか(-28)。(沼津朝日6/20, 24, 7/28, 静岡6/23, 毎日東部版6/29)
6/23　二科入選作家展於県庁西館展示室(-26)。(静岡6/23, 朝日静岡版6/23, 読売静岡版6/25)
6/23　宮田三郎展於浜松松菱(-28)。(毎日遠州版6/19, 朝日遠州版6/22)
6/　大川原久夫展於浜松由美画廊(-28)。(静岡6/25)
6/24　松田裕康彫刻展於下田サンプラーザ(-27)。(朝日伊豆岳南版6/23)
6/24　クラヴェ版画展於浜松ナカムラ画廊(-30)。(毎日遠州版6/22, 静岡6/23, 朝日遠州版6/23)
6/25　「下田舜堂 あの人この人」(読売静岡版6/25)
6/　岡本博個展於東京ぎゃるり獏(-30)。(静岡6/27)
6/27　県文化懇談会初会合於静岡たちばな会館。(静岡6/12, 28, 毎日静岡版6/13, 読売静岡版7/3)
6/　中野清光《仏立像》アメリカへ。(毎日東, 中部, 遠州版6/29)
6/29　県油彩美術家協会第5回展於県庁西館展示室(-7/3)。(静岡5/27, 6/30, 沼津毎日5/31, 読売静岡版6/25)
6/　芹澤銈介、静岡市に作品寄贈の意向。(朝日静岡版S51.6/18, S52.6/30, 静岡6/30)
6/30　川端政勝油絵展於静岡静岡相互銀行南支店(-7/30), 色紙展(8/1-31)。(県油協no.158, 159)
6/30　杉本三男個展於静岡紫陽花(-7/5)。(静岡7/2, 9)
6/30　熊谷守一書画展於浜松由美画廊(-7/5)。(読売静

岡版6/25, 朝日遠州版6/29, 毎日静岡版6/29)
6/　若尾和呂ドローイング展於沼津ギャラリーほさか(-5)。(沼津朝日6/30, 静岡6/30, 7/4, 沼津毎日7/3)
6/　熊谷守一書画展於浜松由美画廊(-7/5)。(静岡6/30)
7/ 1　佐野丹丘、沼津市文化功労表彰。(沼津朝日6/25)
7/ 1　坂爪厚生銅版画展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日7/1, 5)
7/ 1　高柳千賀子個展於静岡扇子屋・静岡ガスサロン(-10)。(中日静岡版7/1, 朝日静岡版7/6, 静岡7/9)
7/　タイム・ライフギャラリー画廊一成堂静岡, 社員募集。(毎日東, 中部, 遠州版7/3)
7/　赤羽良知個展於静岡西武(-6)。(静岡7/2)
7/　こころに生きるヒロイン展於浜松三菱信託浜松支店(-31)。(静岡7/19)
7/　県油彩美術家協会5周年記念展於県庁西館展示室(-7)。(静岡6/30)
7/ 4　野中弘士個展於浜松ギャラリー蜆塚(-10)。(朝日遠州版7/4, 静岡7/5, 毎日遠州版7/6, 県油協no.33)
7/ 6　県二科会第4回展於県庁西館展示室(-10)。(読売静岡版7/5, 朝日静岡版7/6, 静岡7/8)
7/　吉田穂高展於静岡画廊しずおか(-11)。(静岡7/4)
7/ 7　平井俊男個展於静岡紫陽花(-12)。(朝日静岡版7/6, 静岡7/9, 毎日中部版7/10)
7/ 7　小松茂美講演会於県民会館。(静岡6/20, 7/9)
7/ 7　鈴木重種個展於浜松由美画廊(-12)。(県油協no.33)
7/　高橋和生展於焼津佐藤眼鏡店(-31)。(毎日中部版7/10)
7/ 8　星野重雄「山口源を想う」(沼津朝日7/8)
7/ 8　安倍修三郎展於沼津ギャラリーほさか(-12)。(沼津朝日6/30, 毎日東部版7/3)
7/ 8　宮崎万平個展於戎橋画廊(-13)。
7/ 9　細井繁誠逝去。享年72。
7/10　獏黙庵子《タイ画信》(沼津朝日7/10, 17, 24, 31, 8/7, 21, 28, 9/4, 11)
7/11　青木洋子個展於東京櫟画廊(-16)。(三彩no.361, 沼津朝日7/19)
7/11　北井一夫写真展於県庁西館展示室(-17)。(朝日静岡版7/10)
7/12　「芹澤銈介　民芸人気飾らず精進」(読売7/12)
7/12　南惇一　平面と立体展於ガスサロン(-24)。(朝日静岡版7/10, 静岡7/14, 読売静岡版7/16)
7/14　池田満寿夫「エーゲ海に捧ぐ」芥川賞受賞。(静岡7/15, 16)
7/14　「渡辺五雄 この人」(静岡7/14)
7/14　山口源回顧展於沼津マルサン書店(-19)。(朝日伊豆岳南版7/10, 沼津毎日7/14, 沼津朝日7/13, 27, 静岡7/14, 18, 毎日東部版7/17)
7/14　AY-O靉靄版画展於浜松由美画廊(-26)。(静岡7/14, 16, 朝日遠州版7/14, 毎日遠州版7/17)
7/　水野光太郎・増田猪富二人展於京都やまと民芸ぎゃらりい(-19)。(静岡7/4)
7/　長岡昌風木彫展於清水戸田書店(-19)。(毎日中部版7/17, 静岡7/18)
7/　藤本東一良ミニアチュール洋画展於静岡松坂屋(-19)。(毎日中部版7/17, 静岡7/18)
7/　吉野不二太郎作品展於静岡白岩画廊(-19)。(読売静岡版7/16, 静岡7/18)
7/　華第10回展於静岡谷島屋書店(-19)。(静岡7/18)
7/　マリオ・アバティ版画展於静岡西武(-20)。(静岡7/6)
7/18　饗場二郎個展於東京ギャラリーアメリア(-23)。
7/18　集団影法師第1回展於県民会館(-24)。(朝日静岡7/17)
7/　浦田周社展於静岡東海銀行静岡支店(-8/13)。(朝日静岡版7/21, 毎日中部版7/31, 読売静岡版8/6, 13)
7/20　北川民次全版画展於大阪日動画廊(-30)。
7/21　石子順造逝去。48歳。(美術年鑑S53, 静岡7/22, S57.7/19)
7/21　青木洋子個展於沼津ギャラリーほさか(-26)。(沼津毎日7/21, 沼津朝日7/19, 26, 静岡7/21, 朝日静岡版7/22)
7/　県油彩美術家協会小品展於沼津ギャラリーほさか(-26)。(静岡7/24)
7/　清原啓一・狩野守洋画二人展於静岡松坂屋(-26)。(静岡7/23)
7/25　望月利八「パリ風景」(静岡7/25)
7/　山田博之・鈴木保作品展於県庁西館展示室(-31)。(静岡7/25)
7/　木下木冠個展於県庁西館展示室(-8/2)。(毎日静岡版7/27, 静岡7/30)
7/28　獏黙庵子色紙展於沼津ギャラリーほさか(-8/2)。(沼津毎日7/21, 静岡7/28)
7/28　草炎展第1回展於沼津ギャラリーほさか(-8/2)。

（沼津毎日7/21, 沼津朝日7/30, 静岡7/28）
7/28　県版画協会第42回展於県庁西館展示室（-31）。
7/28　国展版画静岡六人展於静岡松坂屋（-8/2）。（静岡7/25, 27）
7/29　写団浜松展於浜松西武（-8/10）。（中日駿遠版7/21）
7/30　近代の洋画展於浜松市美術館（-8/28）。（毎日静岡版7/27, 朝日静岡版7/30, 静岡8/1, 中日静岡版8/5）
7/30　神津克巳展於浜松ギャラリー花菱（-8/5）。（静岡7/28, 朝日静岡版7/30）
8/ 1　杉山青樹路展於静岡ラ・フォリア（-14）。（静岡7/30, 朝日静岡版8/2, 読売静岡版8/6, 13）
8/ 2　御殿場市民会館開館。（毎日東部版S50.10/29, S52.1/25, 静岡S51.1/13, 4/13, S52.5/24, 8/2, 3, 11/22, 読売静岡版4/26, 7/5, 朝日静岡版S52.4/9）
8/ 2　永瀬義郎版画展於沼津ギャラリータケイ（-9）。（沼津朝日8/2, 6）
8/ 2　江崎武男素描展於静岡ガスサロン（-7）。（静岡7/25, 28, 毎日静岡版7/27, 朝日静岡版8/2, 読売静岡版8/6）
8/ 2　饗場二郎・泉沢守・大川原久夫三人展於浜松市美術館（-7）。（静岡7/28, 8/4, 朝日遠州版8/2）
8/　岐部兆治個展於静岡白岩画廊（-7）。（朝日静岡版8/2, 静岡8/6, 読売静岡版8/6）
8/　風間花篁・高橋律子二人展於清水戸田書店（-8）。（毎日静岡版7/27, 静岡8/6）
8/ 4　丸茂湛洋展於米サンフランシスコ日米貿易文化センター（-18）。（静岡8/2）
8/ 4　近藤吾郎油絵個展於沼津ギャラリーほさか（-16）。（沼津毎日7/24, 毎日静岡版7/27, 朝日伊豆岳南版8/3, 沼津朝日8/5, 静岡8/4, 11）
8/ 4　佐藤勝彦作品展於静岡谷島屋書店（-9）。（毎日中部版7/31, 8/7, 静岡8/4）
8/ 4　鈴木康雄展於浜松松菱（-8）。（朝日遠州版8/3）
8/　西村滋・飯塚正義展於沼津マルサン書店（-9）。（沼津朝日8/2）
8/　現代洋画展於浜松由美画廊（-9）。（静岡7/28, 朝日遠州版8/4）
8/ 6　清水港湾資料館開館。（静岡8/3）
8/ 8　重岡建治《家族》除幕式於伊東渚公園。（静岡7/22, 27, 8/9, 読売静岡版8/10）
8/ 9　星野春夫展於浜松遠鉄（-16）。（静岡8/9）
8/　栗山栄一・小柴香山陶器二人展於沼津東海銀行（-14）。（沼津朝日8/12）
8/11　岩田専太郎展於於静岡松坂屋（-16）。（静岡8/11）
8/11　竹久夢二版画展於浜松松菱（-16）。（朝日遠州版8/10）
8/11　城景都版画展於浜松由美画廊（-16）。（毎日静岡版8/10, 朝日遠州版8/10, 静岡8/11）
8/12　高沢圭一個展於沼津西武（-17）。（静岡8/11）
8/15　「空白のカンバス」NHK放送。中村満平他。（静岡8/7）
8/15　長谷川安信銅版画展・豊彩会第1回展於浜松ギャラリー花菱（-21）。（静岡8/11, 18, 朝日静岡版8/13, 読売静岡版8/20）
8/　梅島堅一近況。（朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/16）
8/16　寺平誠介素描展於静岡ガスサロン（-21）。（静岡8/6, 11, 15, 18, 毎日静岡版8/10, 朝日静岡版8/13, 18, 読売静岡版8/14, 20）
8/16　木村泰章・永松登志生・松田彰三人展於浜松市美術館（-21）。（静岡8/11）
8/17　県水彩画協会第27回展於県庁西館展示室（-21）。（静岡7/17, 8/11, 18）
8/18　佐野丹丘書展於東京日産アートサロン（-23）。（沼津毎日8/16, 沼津朝日8/20）
8/18　旦山会展於沼津ギャラリーほさか（-23）。（沼津毎日8/9, 毎日東部版8/10, 沼津朝日8/20, 静岡8/18）
8/18　杉山真穂個展於静岡谷島屋書店（-23）。（静岡8/6, 22, 読売静岡版8/13, 20, 朝日静岡版8/17）
8/18　高木勲展於浜松由美画廊（-23）。（静岡8/11, 18, 20, 朝日遠州版8/16, 読売静岡版8/20）
8/22　柿下木冠個展於米オマハ市ディル・クラーク・ライブラリー（-29）。（静岡6/20, 8/27, S53.2/6）
8/23　葛木朝三・太田銀治・伴野巧尚展於熱海八百半（-29）。（朝日伊豆岳南版8/19, 静岡8/24）
8/23　伊藤勉展於浜松ギャラリー花菱（-31）。（静岡8/22, 25, 読売静岡版8/27, 毎日遠州版8/28）
8/　松美会洋画展於浜松松菱（-28）。（朝日遠州版8/20）
8/24　「原田泰次 この人」（静岡8/24）
8/25　竹久夢二木版画展於静岡松坂屋（-30）。（静岡8/20, 24）
8/25　青木草風歌舞伎絵展於静岡幸文堂（-30）。（静岡8/13, 毎日中部版8/21, 読売静岡版8/20, 27）

8/25　原田康次遠江近江の木喰仏とその風土写真展於浜松由美画廊(-30)。(静岡8/24, 25, 26, 9/12, 中日遠州版8/26, 毎日遠州版8/28)

8/　はつじ会10周年記念展於沼津ギャラリーほさか(-30)。(静岡8/25, 沼津朝日8/28)

8/26　獏黙庵子展於東京渋谷東急(-31)。(沼津朝日8/19, 沼津毎日8/20)

8/26　佐野義雄油絵個展於浜松西武(-31)。(静岡8/20)

8/29　百人展於県庁西館展示室・駿府公園(-10/7)。(中日静岡版8/30, 読売静岡版9/3)

8/30　虹陶第1回展於浜松市美術館(-9/4)。(静岡8/22, 25, 31, 9/1, 朝日遠州版8/30, 毎日遠州版9/2)

8/31　堤達男《**橘周太銅像**》除幕式於御殿場陸上自衛隊板妻駐屯地。(毎日東, 中部, 遠州版6/28, 東部版9/1, 中日静岡, 遠州版8/26, 静岡9/1, S53.9/1)

8/31　平井花笠[英治]逝去。82歳。(静岡9/2, 読売静岡版9/2, 毎日東, 中部, 遠州版9/2, 清水市書道連盟会報)

9/ 1　第62回二科会展於東京都美術館・上野の森美術館(-19)。北川民次《風景》(読売静岡版8/28, 静岡8/28, 9/10, 中日静岡, 遠州版8/29, 30)

9/ 1　第32回行動展於東京都美術館(-18)。(中日静岡, 遠州版8/30)

9/ 1　駒井哲郎遺作展於池田20世紀美術館(-11/30)。(朝日伊豆岳南版8/31, 読売静岡版9/3, 静岡9/3, 13)

9/ 1　ビュフェ ダンテ地獄篇特別展於ベルナール・ビュフェ美術館(-10/31)。(朝日伊豆岳南版8/14, 9/2, 沼津朝日8/28, 31, 10/8, 29, 静岡8/20, 30)

9/ 1　県日本画連盟第1回展於静岡松坂屋(-6)。(静岡8/31, 9/2, 毎日静岡版9/1, 読売静岡版9/3)

9/ 1　ぐるーぷセブン展於静岡幸文堂(-6)。(静岡8/20, 毎日中部版8/31, 朝日静岡版8/31)

9/ 1　はなわ憲個展於静岡松坂屋(-6)。(静岡8/29)

9/ 1　伊藤豊成展於島田中電ホール(-7)。(中日駿遠版9/2, 読売静岡版9/3, 朝日静岡, 遠州版9/2)

9/ 1　国吉康雄展於浜松松菱(-6)。(朝日遠州版8/31)

9/　西ドイツ銅版画展於浜松中央信託銀行浜松支店(-末)。(中日静岡版9/7)

9/ 2　第三文明第9回展於富士美術館(-24)。(静岡9/3, 読売静岡版9/3)

9/　春野町《旧王子製紙工場》赤レンガ修復。(中日駿遠版5/25, 静岡8/28, 朝日遠州版9/4, 読売静岡版9/12)

9/ 5　清川泰次新作個展「線の世界」於東京資生堂ギャラリー(-10)。(三彩no.363, 毎日9/7, 朝日9/10)

9/ 6　豊島春彦個展於静岡ガスサロン(-11)。(静岡8/29, 9/1, 朝日静岡版9/5, 読売静岡版9/10)

9/ 8　井上規展於沼津ギャラリーほさか(-13)。(毎日東部版8/28, 沼津朝日9/4)

9/ 8　現代人気作家展・田辺穣・若井良一二人展於富士パピー(-12)。(静岡9/7)

9/ 8　青木幽渓展於静岡松坂屋(-13)。(朝日静岡版9/6, 静岡9/7, 10, 読売静岡版9/10)

9/ 8　小林洋子個展於静岡谷島屋書店(-13)。(静岡9/3)

9/ 8　あぼがど第1回展於静岡幸文堂(-13)。(朝日静岡版9/6, 読売静岡版9/10)

9/　末吉貞樹展於静岡画廊しずおか(-13)。(毎日中部版9/7)

9/ 9　二橋美衡逝去。享年81。(美術年鑑S.53)

9/ 9　全日本肖像美術展於駿府博物館(-15)。(静岡9/3, 8, 10)

9/11　佐藤成幸・荒内博堂・服部寿彦陶芸三人展於押尾仏具店(-18)。(静岡9/3)

9/11　吉川三伸展於浜松ギャラリー花菱(-20)。(静岡9/8, 16, 朝日遠州版9/10, 毎日遠州版9/18, 中日駿遠版9/18)

9/13　新槐樹社静岡支部展於県庁西館展示室(-18)。(静岡9/10, 読売静岡版9/10)

9/　杉山哲郎渡仏油彩画展於県庁西館展示室(-19)。(静岡9/17, 19)

9/15　萩萩月展於沼津ギャラリーほさか(-18)。(沼津毎日9/6, 沼津朝日9/14, 静岡9/16)

9/15　山田季幸, 杉井寛策, 八木道夫, 高齢者肖像画寄贈。(静岡8/30, 9/6)

9/15　現代新作彫刻展於静岡松坂屋(-20)。(静岡9/10, 14)

9/15　高木大輔型染展於静岡西武(-21)。(静岡9/16)

9/　松本富太郎油絵展於浜松由美画廊(-20)。(静岡9/12, 16, 毎日遠州版9/14)

9/16　杉山哲朗展於県庁西館展示室(-19)。(朝日静岡版9/15, 静岡9/19)

9/　市川貞夫個展於静岡東洋信託銀行(-10/15)。(静岡9/22, 26, 29)

9/19　堤達男《踊子像》除幕式於初景滝。(毎日東部版9/20, 読売静岡版9/20)

9/20　七彩会第20回展於浜松市美術館(-25)。(中日駿遠版9/15, 静岡9/16, 22, 毎日遠州版9/23)
9/21　第41回新制作協会展於東京都美術館(-10/8)。掛井五郎《静かなる朝からきた女(韓国)》細谷泰茲《スカーフをした女》《ポーズする女》(静岡10/1)
9/21　第25回全国博物館大会於熱海救世熱海美術館。(静岡9/23)
9/21　笠井利之作品即売会於静岡喜仙(-26)。(静岡9/21)
9/22　柴田俊個展尾静岡幸文堂(-27)。(静岡9/10, 22, 26, 朝日静岡版9/21)
9/22　椿貞雄展於浜松松菱(-27)。(朝日遠州版9/21)
9/22　深沢幸雄版画展於浜松由美画廊(-10/4)。(毎日遠州版9/21, 静岡9/22, 29, 朝日遠州版9/22)
9/　和田孝文於沼津ギャラリーほさか(-27)。(静岡9/22)
9/　山田安油絵展於静岡珈琲館(-30)。(朝日静岡版9/22, 静岡9/26, 29)
9/23　遺作による香月泰男展於静岡画廊しずおか(-10/2)。(静岡9/17, 毎日中部版9/28)
9/　伊藤勉個展於清水渡辺(-30)。(静岡9/26, 29)
9/　ベルナール・ビュフェ展於静岡西武(-10/12)。(静岡9/29)
9/29　大石靖油絵展於沼津ギャラリーほさか(-10/4)。(沼津朝日9/28, 静岡9/28, 29, 朝日伊豆岳南版9/29, 沼津毎日10/1)
9/29　大樋年郎自選茶陶展於沼津西武(-5)。(沼津朝日9/28, 静岡10/3)
9/29　県善三郎個展於浜松松菱(-10/4)。(静岡9/29, 朝日遠州版9/29, 中日駿遠版9/29)
9/　ジャズ喫茶JuJuオープン。
9/31　佐野家、邸宅庭園、澤田政廣《白鳳》《レダ》等5点を佐野美術館へ寄贈。(静岡10/1, 毎日東部版10/1)
10/ 1　第7回現代日本彫刻展於宇部市(-11/10)。鈴木久雄、宮崎総合博物館賞受賞。
10/ 1　青木一郎展於静岡白岩画廊(-10)。(朝日静岡版9/30, 毎日中部版10/1)
10/　伴野巧尚《日蓮上人》仏現寺。(毎日東, 中部, 遠州版10/2)
10/ 2　北川文雄木版画展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日10/1, 4, 6, 朝日伊豆岳南版10/4, 毎日静岡版10/5, 静岡10/6)
10/ 3　大畑專「静岡の中山散生」(静岡10/3)
10/ 4　加藤一展於静岡ガスサロン(-16)。(毎日中部版10/2, 朝日静岡版10/3)
10/ 5　今村英男個展於県庁西館展示室(-9)。(静岡9/26, 29, 毎日中部版10/2, 朝日静岡版10/5)
10/ 5　写実派協会展於県庁西館展示室(-9)。(朝日静岡版10/5)
10/　小谷和夫展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-17)。(静岡10/6, 13, 毎日中部版10/9)
10/ 6　鈴木貞夫家族展於浜松由美画廊(-11)。(朝日遠州版10/6, 毎日遠州版10/23)
10/ 6　成川勝巳墨絵展於沼津ギャラリーほさか(-11)。(沼津朝日10/5, 朝日伊豆岳南版10/5, 静岡10/6, 沼津毎日10/8)
/　池田満寿夫『現代の美人画』刊行。(静岡10/7)
10/ 6　求正美展於磐田足立楽器(-11)。(朝日遠州版10/6, 中日遠州版10/6)
10/ 7　現代陶芸大家展於浜松西武(-12)。(静岡10/6, 朝日遠州版10/6, 中日遠州版10/7)
10/ 8　半田昌雄展於御殿場ヤオハン(-11)。(静岡10/8)
10/ 8　古田晴久個展於浜松花菱(-14)。(静岡10/6, 13, 朝日遠州版10/8, 県油協no.34)
10/10　第45回独立展於東京都美術館(-27)。沢村美佐子《近接作用の場》山道栄助[遺作]《史跡》《作品》
10/10　第31回二紀会展於東京都美術館(-27)。水野欣三郎《戦災被爆者モニュメントエスキース》《瀕死のサントール》
10/10　《大西為市胸像》除幕式於下田自動車学校。(朝日伊豆岳南版10/10)
10/10　高山知子展於浜松由美画廊(-16)。(朝日遠州版10/10, 静岡10/13)
10/13　県工芸美術秀作第1回展於静岡田中屋伊勢丹(-18)。(静岡10/12, 毎日静岡版10/13, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/13, 14)
10/13　前田守一・市川正三・長岡宏三人展於静岡紫陽花(-18)。市川正三《ふくろう》(読売静岡版10/8, 静岡10/15, 清美協no.162)
10/13　山本金蔵個展於静岡幸文堂(-18)。(静岡10/13)
10/　椿貞雄遺作展於静岡白岩画廊(-18)。(朝日静岡版10/12, 静岡10/15, 読売静岡版10/15, 毎日中部版10/16)

10/14　露木豊「一点のギャラリー」(沼津朝日10/14)
10/15　杉山良雄しずおかの峠原画展於新静岡センター(-31)。(中日静岡版10/16)
10/15　創業40周年記念オール画材大展示即売於静岡幸文堂(-16)。(静岡10/15)
10/15　頓宮隆輔展於浜松ギャラリー花菱(-21)。(朝日伊豆岳南版10/15, 毎日静岡版10/19, 静岡10/20)
10/17　高倉清雄写真展於県庁西館展示室(-24)。(読売静岡版10/15, 静岡10/19, 中日遠州版10/19, 毎日遠州版10/20)
10/　畦地梅太郎展於静岡画廊しずおか(-24)。(毎日静岡版10/19)
10/20　佐野丹丘書展於沼津ギャラリーほさか(-25)。(朝日伊豆岳南版10/19, 沼津毎日10/20, 沼津朝日10/21, 25, 静岡10/20, 毎日東部版10/23)
10/20　増田大咢個展於静岡白石画廊(-25)。(静岡10/17, 22, 朝日静岡版10/19, 毎日中部版10/23)
10/20　杉本三男個展於静岡幸文堂(-25)。(静岡10/22)
10/20　吹田文明版画展於浜松由美画廊(-11/1)。(静岡10/20, 24, 27, 朝日遠州版10/22)
10/21　八島弘道展於静岡谷島屋(-24)。(朝日静岡版10/20, 静岡10/22, 毎日中部版10/23)
10/23　坂田和之個展於清水渡辺(-29)。(静岡10/22, 朝日静岡版10/22)
10/25　海野光弘版画展於静岡ガスサロン(-30)。(静岡10/15, 20, 27, 読売静岡版10/15, 朝日静岡版10/24)
10/26　池田満寿夫版画展於静岡西武(-11/2)。(静岡10/21, 29, 朝日静岡版10/29)
10/27　「水野欣三郎 この人」(静岡10/27)
10/27　「渡辺妙子」(毎日静岡版10/27)
10/27　鈴木慶則個展於東京ぎゃらりい・どり(-11/2)。
10/29　斉藤真一消息。(静岡10/29)
10/29　マリオ・アバティ版画展於浜松市美術館(-11/20)。(毎日遠州版10/2, 23, 中日静岡版10/25, 遠州版10/29, 30, 静岡10/27, 11/4, 10, 朝日遠州版10/29, 読売静岡版11/8)
10/30　第9回日展於東京都美術館(-26)。
館野弘青、審査員。(静岡8/1)
松田裕康《脱皮》特撰。(静岡10/25, 読売静岡版11/8)
増田敏泰ほか新入選者。(静岡10/25, 11/19, 毎日東, 中, 西部版10/25, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/26, 読売静岡版11/8)
10/　獏黙庵子『新版・東海道五十三次』刊行。(沼津朝日10/16, 沼津朝日10/29)
11/　青木草風近況。(読売静岡版11/1)
11/ 1　長谷川富三郎芸業展於富士イトーヨーカ堂(-8)。(静岡10/24, 静岡11/5)
11/ 1　塚田土羅展於静岡ラ・フォリア(-30)。(読売静岡版10/29, 毎日中部版11/2)
11/ 1　小山勇個展於浜松ギャラリー花菱(-6)。(静岡10/27, 11/4, 読売静岡版10/29, 毎日遠州版10/30, 朝日遠州版11/1)
11/　長船恒利写真展於藤枝GIG(-12)。(毎日中部版11/2)
11/ 2　横山大観展於富士美術館(-25)。(読売静岡版11/1, 8, 静岡10/19, 31, 11/2, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/7)
11/ 2　県芸術祭第17回於県庁西館展示室(2-6), 於沼津市文化会館(4-8), 県庁西館展示室(16-20), 浜松市美術館(30-12/4)。審査員:吉岡堅二, 竹田京一, 西橋真太郎 ,吹田文明, 管木志雄, 馬場雄二, 五十嵐光昭, 今井凌雪, 青木香流, 永井鉄太郎, 堀田清治, 杉全直。デザイン部門新設。(静岡10/27, 11/1, 2, 3, 4, 24, 29, 12/1, 沼津毎日10/31, 沼津朝日11/2, 毎日東, 中部, 遠州版11/2, 4, 16, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/2, 中日静岡版11/4, 静岡版11/17, 遠州版12/1, 読売静岡版11/16, 29)
11/ 2　木下恵介、紫綬褒章受賞。(静岡11/2)
11/ 2　二見彰一銅版画展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日11/2, 3, 朝日伊豆岳南版11/4)
11/ 3　小川龍彦、知事表彰。(読売静岡版10/29)
11/ 3　風土展於沼津ギャラリーほさか(-8)。(沼津毎日10/29, 朝日伊豆岳南版11/1, 沼津朝日11/2, 3, 静岡11/4, 毎日東部版11/6)
11/ 3　石上茂写真展於沼津ギャラリーほさか(-8)。(沼津毎日10/29, 沼津朝日10/29, 11/3, 朝日伊豆岳南版11/2, 静岡11/6)
11/ 3　杉山良雄原画展於浜松松菱(-15)。(中日遠州版11/3)
11/ 3　戦後日本画の一系譜展於京都市美術館(-27)。
秋野不矩《少年群像》《平原》《カミの泉Ⅱ》出品。
11/ 3　辻弘彫刻展於静岡紫陽花(-8)。(静岡10/31, 11/5, 朝日静岡版11/1)
11/ 3　竹村治子油絵個展於静岡幸文堂(-8)。(静岡10/24,

読売静岡版11/1, 朝日静岡版11/2）

11/ 3　杉村孝・前島秀章二人展於静岡松坂屋（-8）。（静岡10/29, 11/2, 5, 朝日静岡版11/1, 読売静岡版11/1）

11/　吹田文明展於静岡画廊しずおか（-11）。（毎日中部版11/6）

11/　佐野英雄油絵個展於静岡白岩画廊（-8）。（静岡11/5）

11/　富本憲吉陶芸展於常葉美術館（-30）。（静岡11/6, 19, 毎日静岡版11/24）

11/　斉藤力水彩画展於御前崎島田信用金庫御前崎支店（-）。（静岡11/7）

11/ 5　大村政夫《仰峰》除幕式於静岡大里中学校。（静岡11/6）

11/ 8　松田裕康《萌える》山本利治《大地》堤直美《ラ・メール》木野和彦《陽炎》下田城山公園に設置。（静岡11/9, 朝日伊豆岳南版11/9）

11/ 8　中村弘・松永繁雄・八木昌一・稲森祐一四人展於静岡ガスサロン（-13）。（静岡11/4, 5, 10, 朝日静岡版11/6, 毎日中部版11/9）

11/ 8　日本水彩画会浜松支部展於浜松市美術館（-13）。（毎日遠州版11/2, 朝日遠州版11/8, 静岡11/10）

11/ 9　「米田一夫 この人」（静岡11/9）

11/10　静流会第32回小品展於沼津ギャラリーほさか（-15）。（沼津朝日11/11）

11/　小川龍彦・大橋豊久・寺平誠介三人展於新静岡センター（-15）。（静岡11/12, 読売静岡版11/15）

11/　杉山照治・杉山瑛子二人展於静岡幸文堂（-15）。（静岡11/12）

11/12　《笠井信一銅像》除幕式於県総合福祉会館。（静岡11/13）

11/13　内田公雄展於沼津ギャラリータケイ（-20）。（沼津朝日11/12, 毎日東部版11/16, 静岡11/17）

11/　山田季幸、細江町町長肖像画制作。（静岡11/13）

11/15　二重作龍夫画業40年展於東京三越（-20）。（日経11/13）

11/15　前島秀章・前島範久兄弟展於静岡ガスサロン（-20）。（毎日中部版11/13, 静岡11/17）

11/16　行動美術浜松展於浜松市美術館（-23）。（静岡11/10, 14, 17, 中日遠州版11/17）

11/　求正美展於浜松三菱信託銀行浜松支店（-30）。（朝日遠州版11/19, 毎日遠州版11/23）

11/17　アンドレ・ブラジリエ版画展於沼津ギャラリーほさか（-22）。（静岡11/17, 沼津朝日11/17, 朝日伊豆岳南版11/17, 沼津毎日11/18, 毎日東部版11/20）

11/17　伊藤豊成展於島田中電ホール（-23）。（中日駿遠版9/2, 朝日静岡版11/17）

11/17　橋口美代子油絵展於浜松画廊（-24）。（静岡11/17, 朝日遠州版11/17, 毎日遠州版11/20）

11/19　伊藤隆康《舞いたち》除幕式於沼津二中。（毎日東部版11/20）

11/19　鈴木儀一展於磐田足立楽器店（-24）。（朝日遠州版11/19, 中日遠州版11/21）

11/19　ココエミミ展於浜松さいとう珈琲（-24）。（毎日遠州版11/16）

11/　滝川武版画展於静岡画廊しずおか（-29）。（静岡11/19, 毎日中部版11/23, 読売静岡版11/29）

11/20　「鈴木千誉三　こんにちは」（沼津朝日11/20）

11/20　ガスサロン近況。（中日静岡版11/20）

11/20　伊豆美術展第15回展於伊豆中央農協（-23）。（朝日伊豆岳南版11/19, 毎日東部版11/20, 静岡11/21）

11/20　佐野丹丘展於沼津ギャラリーほさか（-25）。（静岡11/16, 毎日東部版11/20）

11/23　木村賢太郎《**大地の赤牛**》設置於池田20世紀美術館。（朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/26, 静岡11/26）

11/23　菅沼稔銅版画展於沼津ギャラリータケイ（-29）。（沼津朝日11/22）

11/23　API現代アメリカ版画チャリティーショー於沼津桃中軒（-27）。（沼津朝日11/22, 沼津毎日11/22, 静岡11/24）

11/23　大石靖「猫展」於沼津ギャラリーほさか（-29）。（静岡11/24, 沼津朝日11/25, 沼津毎日11/26, 毎日東部版11/27, 読売静岡版11/29, 県油協no.35）

11/24　集団はままつ展於浜松由美画廊（-29）。（静岡11/24）

11/29　落合英男個展於県庁西館展示室（-12/5）。（静岡11/24, 12/5, 朝日静岡版11/29, 読売静岡版11/29, 毎日中部版12/4）

12/ 1　ピカソ展於池田20世紀美術館（S53.2/28）。（朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/3, 静岡12/19, S53.1/3）

12/ 1　成瀬憲油彩画展於沼津ギャラリーほさか（-6）。（毎日東部版11/27, 朝日伊豆岳南版11/28, 読売静岡版11/29, 静岡12/1）

12/ 1　古内秀昴油絵展於静岡田中屋伊勢丹（-6）。（静岡11/30, 毎日中部版12/4）

12/ 1　川端政雄個展於清水戸田書店（-6）。（静岡11/19,

12/1, 朝日静岡版11/30, 毎日中部版12/4)

12/ 1　はらかわゆうこ・すぎやま真穂二人展於静岡ラ・フォリア(-29)。(静岡12/1, 毎日中部版12/25)

12/ 1　柄沢斉展於浜松由美画廊(-13)。(朝日遠州版12/1, 静岡12/1, 5, 8, 毎日静岡版12/7, 中日遠州版12/9)

12/ 1　山本ゆき江水彩小品展於浜松花菱(-7)。(毎日遠州版11/27, 読売静岡版11/29, 朝日遠州版11/30, 静岡12/1)

12/　築地進個展於静岡松坂屋(-6)。(静岡12/4)

12/　友安昭作品展於静岡西武(-7)。(静岡12/3)

12/ 2　杉山良雄展於新静岡センター(-6)。(読売静岡版11/29, 毎日中部版12/4)

12/ 4　佐藤徹個展於浜松花菱(-18)。(県油協no.35)

12/ 6　堤達男《海の子》除幕式於熱海網代小学校。(静岡11/11, 16)

12/ 6　木津悠志個展於静岡ガスサロン(-11)。(朝日静岡版12/6, 読売静岡版12/6, 毎日静岡版12/7, 静岡12/8)

12/ 6　創元会浜松支部展於浜松市美術館(-11)。(読売静岡版11/29, 静岡12/1, 7, 朝日遠州版12/6, 中日遠州版12/9)

12/ 7　鳩巣第3回展於沼津ギャラリーほさか(-11)。(読売静岡版11/8, 15, 沼津朝日12/6, 9, 朝日伊豆岳南版12/7, 静岡12/8, 沼津毎日12/10)

12/ 8　佐藤徹個展於浜松ギャラリー花菱(-18)。(毎日静岡版12/7, 静岡12/8, 朝日遠州版12/8)

12/　酒本雅行彫刻展於静岡田中屋伊勢丹(-13)。(毎日中部版12/11, 読売静岡版12/13)

12/ 9　石川登喜夫展於沼津スナック山河(-17)。(沼津毎日12/10)

12/ 9　日下泰輔展於伊東江戸屋(-12)。(県油協no.35)

12/10　木原康行銅版画展於浜松谷島屋(-18)。(朝日遠州版12/10, 毎日遠州版12/14)

12/　山野辺義雄版画展於静岡画廊しずおか(-15)。(読売静岡版12/13, 毎日中部版12/14)

12/13　岩田猛・梅本健三郎陶芸二人展於沼津ギャラリーほさか(-20)。(沼津朝日12/11, 毎日東部版12/11, 朝日伊豆岳南版12/14, 静岡12/15, 沼津毎日12/18)

12/14　沢村耕雲・西猷二人展於静岡さくらや(-19)。(朝日静岡版12/13, 毎日中部版12/18)

12/14　大久保覚郎展於焼津藪崎新聞店(-19)。(朝日静岡版12/14)

12/15　志賀旦山『駿河の四季』刊行。(沼津朝日12/1, 9, 13, 静岡12/2)

12/15　伊藤豊成展於島田中電ホール・喫茶あかしや(-22)。(朝日静岡版12/11, 読売静岡版12/13, 中日遠州版12/16)

12/15　現代アメリカ版画展於浜松由美画廊(-20)。(朝日遠州版12/15, 毎日遠州版12/18)

12/16　市川正三「私の散歩道護国神社」(静岡12/16)

12/16　折本美弥子展於浜松浜松画廊(-22)。(朝日遠州版12/16, 毎日遠州版12/18)

12/　静粋会展於静岡西武(-21)。(静岡12/17, 読売静岡版12/20, 毎日静岡版12/21)

12/20　遠州美術協会第22回展於浜松市美術館(-25)。(静岡12/15, 21, 22, 中日静岡版12/22, 毎日遠州版12/24)

12/　定義・芸術展於県庁西館展示室(-25)。(朝日静岡版12/25)

12/21　堤達男《人魚》修復完成。(毎日東部版11/21, 12/3, 22)

12/22　青島正和展於沼津マルサン書店(-27)。(毎日東部版12/14, 沼津朝日12/22)

12/22　沼津美術研究所10周年記念展於沼津ギャラリーほさか(-27)。(毎日東部版12/18, 沼津朝日12/22, 静岡12/22)

12/22　志賀旦山画集原画展於静岡谷島屋書店(-27), 於沼津マルサン書店(-S53.1/4)。(静岡12/17, 朝日伊豆岳南版12/19, 30)

12/22　北川民次版画展於静岡白岩画廊(-27)。(静岡12/19, 朝日静岡版12/19, 毎日静岡版12/21)

12/22　杉山良雄身延街道スケッチ展於清水戸田書店(-27)。(静岡12/23, 読売静岡版12/23)

12/26　野島青茲《春鶯囀》細江町へ寄贈される。(中日遠州版12/27)

12/29　堀池慶作日本画小品展於清水戸田書店(-1/3)。(清美協no.164)

12/29　増田大咢個展於静岡幸文堂(-1/4)。(静岡12/26, 毎日静岡版12/28)

# 自然系博物館と美術館の連携「いきもののかたち　ビュフェの“自然誌博物館”」展を例に

ベルナール・ビュフェ美術館　雨宮千嘉
ベルナール・ビュフェ美術館　井島真知
ふじのくに地球環境史ミュージアム　岸本年郎

## はじめに

ベルナール・ビュフェ美術館において、企画展「いきもののかたち　ビュフェの“自然誌博物館”」(2023年7月15日−10月1日)を開催した。静岡県立のふじのくに地球環境史ミュージアム(以下、ふじミュー)との共催で、ビュフェ美術館所蔵の絵画作品と、ふじミュー所蔵の標本を展示した。

芸術家が自然をどう捉え表現したのかをテーマとした展覧会はこれまでにも数多く開かれており、「美術館でZoo」(福岡市美術館、2013年)や「自然と美術の標本展　「モノ」を「みる」からはじまる冒険」(横須賀美術館、2016年)など、美術作品と標本を一緒に展示する展覧会はこれまでにも開催されてきた。本展も、ビュフェの絵画作品と、そこに描かれた生きものやその近縁のものの標本をあわせて展示する試みである。

本稿では、本展覧会を振り返りながら、館種を超えた連携や、美術館での生物標本の展示の可能性を探ってみたい。

## 展示のねらい

ベルナール・ビュフェは(1928-1999)は、戦後の具象画壇を代表するフランスの画家である。画面を削るような鋭い線と抑制された色使い、虚飾を排した独自の人物描写によって、19歳で批評家賞を受賞し、一躍有名画家となった。ビュフェは子どもの頃から博物館や図鑑が好きで、夏休みを過ごした海辺では貝や蟹などにふれて遊び、美術館でも絵の中のうさぎやめんどりに見とれていたという。少年時代にビュフェが採集してつくったという、昆虫の標本箱の写真も残っている。1952年からは毎年テーマを決めて連作を発表する個展を開催しており、1964年の個展のテーマは「ビュフェの博物館(Le Muséum de Bernard Buffet)」であった。約50年に及んだ画家人生において、生きものをモティーフにした作品を繰り返し描いている。

ビュフェが描く生きものは、決して写真のように「本物そっくり」ではない。ビュフェが美しい、おもしろいと感じたところを、ビュフェのスタイルで誇張して描いている。触角や脚が長かったり、それらが不思議な場所から生えていたり、実物と比べるとおかしなところもあるが、絵としてバランスよくおさまっており、個性的で印象の強烈なものが多い。そして、生きものたちは生きた姿ではなく、台座にのった剥製として描かれているものも多く、カンヴァスいっぱいに大きく描かれた虫は、まるで標本をピンでとめたようでもある。ビュフェの絵を見ていると、ビュフェは生きものの生き生きとしたようすよりは「かたち」に興味があったのではないかと思えてくる。実物の標本とビュフェの絵をならべて展示することで、ビュフェが魅力を感じた「いきもののかたち」がみえてくるのではないか、そしてそれをビュフェがどう表現したかったのかが明らかになるのではないか、というのが今回の展示のねらいであった。

## 共催にむけて

本展を企画するにあたって、ビュフェ美術館の学芸員、雨宮と井島は、ビュフェの作品とあわせて標本を展示できないかと、ふじミューに問い合わせてみることにした。展覧会開催(2023年夏)の約1年前のことである。ふじミューは2016年に開館した静岡県立の自然系博物館であり、建物は旧高校校舎のリノベーションである。「100年後の静岡が豊かであるために」を活動テーマとして展開しており、学校時代の教室と什器を活用した展示はデザインやアートの役割を重視したもので、常設展は日本空間デザイン賞大賞を受賞している。これまで2館の間に直接の交流はなかったので、ふじミューの問合せ窓口にメールを送ったところ、数日のうちにふじミュー側から、標本の貸し出しは可能であり、具体的に希望する標本(生物)の名前などを知らせてくれれば、どの標本を貸し出すかを判断したいという前向きな返信があった。さらに、ビュフェの生きものの作品から同定を試みたいので、出品予定作品について細部のわかる大きな画像を送ってほしいとの要望が出された。そこで美術館側は、作品の画像を送るとともに、標本の選定の基準となるように、展示についての考えを以下のように伝えた。

・「いきもののかたち」を楽しむ展示としたい（生態の解説には重きを置かない、しなくてよい）。ビュフェが愛したであろうその「かたち」を楽しむのが企画の肝である。
・標本と絵は1対1の関係である必要はない（標本を「これの絵を描きました」という解説のために置くのではない）。
・標本たちはビュフェの絵を解説するための添え物ではなく、作品と同列に展示される。見る人が絵と標本の両方の「かたち」を楽しみ、どちらにも新しい発見があるようにしたい。
・ビュフェの絵について「生きもの」の専門家による自然科学的な発見を歓迎する。
・ビュフェの作品は"標本"らしい絵に絞る。たとえ生物が描いてあっても、静物画は選択せず、「標本らしく」描いているものを中心にする。（花瓶にいけた花は今回は展示しない）。

メールでのやりとりを経て、顔合わせと標本の下見として美術館の担当者がふじミューを訪ねた。絵の画像を見ながら、収蔵室で展示できる可能性のある標本を選んでいく。鳥類では、ビュフェがたくさん描いているフクロウのなかまや羽の模様が美しい鳥、作品にもある海鳥のなかまなどが候補となる。これらはみな静岡の標本でもある。魚類では、ビュフェがよく描いているマトウダイの標本があるとのことで、ぜひ展示しようと話し合う。ふじミューには主に在野の研究者により収集された充実した世界中の昆虫のコレクションがあり、本展のふじミュー側の主担当となった昆虫担当の岸本が、ビュフェの作品といっしょに楽しめるものを選ぶことになった。美術館からはチョウやクワガタムシ、トンボなどビュフェの作品に登場する昆虫たちについて伝え、またビュフェの昆虫好きを理解してもらうため、ビュフェが子どものころに採集した昆虫標本の写真を共有した。
その後、岸本がビュフェ美術館の企画展示室を訪れ、部屋の雰囲気や広さ、ビュフェ作品を視察した。この時に昆虫標本について、どこにいくつの標本箱をどのように設置するかを決定した。岸本も、昆虫や剥製などの標本を美術作品のように楽しむ機会となればと考えており、展示室の雰囲気については、「美術館らしさ」をキープしようということになった。
標本はむきだしでなくアクリルカバーをかけるという美術館側の判断もあり、その後もう一度美術館からふじミューに標本計測や台とアクリルカバーの相談に行き、展示室のしつらえを最終決定した。メール以外では、顔を合わせての打ち合わせは3回だけだったが、企画の初期に展示についての考え方やお互いの役割を共有できていたので、企画はスムーズにすすんだ。

**展示概要**

会場はベルナール・ビュフェ美術館別館の2階、約280平米の企画展示室。通常の動線では、来館者は先に本館・新館の展示室でビュフェの人生と作品の変遷を楽しんだあと、この企画展示室で、「生きもの好き」というビュフェのもうひとつの顔に出会うことになる。
本展では、油彩25点、版画20点（リトグラフ12点、ドライポイント8点）、水彩2点（六曲一隻の屏風1点含む）、デッサン4点の全51点のビュフェ作品を（表1）、そしてふじミューからは235点（骨格2、剥製10、液浸1、昆虫222）の標本を展示した（表2）。ビュフェの絵画作品は壁面に、標本類は部屋の中央に展示し、作品と標本を安全にじっくり観察できるよう、展示物間のスペースを確保した。剥製や液浸の標本はすべてアクリルカバーをつけた。昆虫の標本箱（ドイツ箱）は、台に固定し、その蓋のガラスのみで観察できるようにした。
展示室に入って正面の壁で、さっそく作品と標本がいっしょに出迎える。この正面の壁の標本のみ、絵と同じように壁にそって展示した。本展の広報ビジュアルにした作品《赤い昆虫》と、ビュフェがよく描いたモティーフである《蝶》、そして《馬の頭》、そしてそれぞれの隣に、作品とつながるイメージの標本が並べられた。《赤い昆虫》については、実際にはこのような昆虫は存在しないのだが、岸本にはすぐにそのモデルとして思い浮かぶものがあった。南米原産のテナガカミキリである。作品は実在の虫よりずいぶん赤みが強く、形も異なるのだが、前胸や翅端の突起、妙に伸長した前脚などは強くそれを思わせるものである。ヨーロッパには分布しない昆虫であるが、ビュフェは博物館の標本か本の中で見て、モティーフにしたのであろうか。本種は英語でHarlequin beetle（道化師の甲虫）と呼ばれ、ピエロをしばしば描いたビュフェの展示に相応しいものに思われ、また印象の強い絵であることも手伝って、メインビジュアルとしてパンフレットやポスターに使用した。また、この企画展に合わせたグッズとしてこの絵をあしらったTシャツを製作・販売したところ、たいへん好評で期間中に完売した。冒頭に展示した《蝶》についてはその色合いと翅型から、似たものとしてゴライアストリバネアゲハを選んだ（写真1、2）

展示は、「鳥」「昆虫」「海のいきもの」「陸のいきもの」のコーナーに分けて配置。各コーナーの見出しでは、画家の生きものとの関わりを紹介した。画家の「生きもの愛」がわかるエピソードのほか、写真資料も多く展示し、生きもの好きなひとりの人物としてのビュフェが伝わるよう工夫した。

写真1　企画展示室入口

写真2　絵と標本がならぶ展覧会広報チラシ

＜鳥＞

コーナーパネルでは、自然学者アンリ・ダルモンが鳥のデッサンをする様子を憧れのまなざしで見つめた若きビュフェのエピソードを紹介し、鳥の剥製たちとビュフェの描いた鳥たちを展示した。ビュフェ作品は壁面に展示し、壁と壁のあいだの空間に剥製がならぶ。ビュフェの描いた鳥たちも枝や台に載った剥製の姿なので、このスペースはまるで博物館の鳥類展示室のようになった（表紙上写真）。

＜昆虫＞

描いた昆虫をほめてくれた先生のおかげで絵描きを志したという少年時代のエピソードから、ビュフェの生きもの作品のルーツともいえるトンボを最初に配置。その後甲虫、カメムシ、ハエ、ハチなど、油彩と版画を長い壁面に一堂に展示した。あわせて、8つのドイツ型標本箱を展示。作品と標本との関連付けは岸本が行い、展示される絵に合わせて、そのモティーフとなったと考えられる昆虫を選出した。選出にあたっては、世界各地の標本を用いて、ビュフェがモデルにしたと考えられる昆虫、および、奇妙な形態をしており、ビュフェが生きていればきっと好んだであろう標本を選ぶように努力した。《とんぼ》については、触角が長く描かれている作品もあり、よりその姿に似ているウスバカゲロウやツノトンボといった脈翅目昆虫の標本をトンボとともに展示した。甲虫では明らかにヨーロッパミヤマクワガタと思われる《くわがた虫》に合わせて世界のクワガタムシを1箱に、《褐色の昆虫》（油彩）は、形態は著しく異なるものの色や斑紋はアフリカ産のゴライアスオオツノハナムグリを思わせるもので、これに合わせて世界の特徴的なコガネムシ類（カブトムシ類を含む）を1箱に、そして、展示室入り口の《赤い昆虫》に合わせてカミキリムシを1箱にまとめて展示した。また《てんとう虫》は、どうみてもテントウムシには見えない作品で、その長い触角や斑紋から南米産のオオキノコムシ類がイメージされるので、それらとともに各種甲虫の標本を1箱展示した。また、《たいこうち》に合わせて、タイコウチなどと共にカメムシ類の標本を1箱展示した。また、《スズメバチ》、《はち》（実際にはこれらの作品はハエの特徴を備えている＜後述＞）などに合わせて、大型のハチ類やハエ類を展示した。（表紙下写真）展示室中央の小部屋の入口の壁にはビュフェが少年時代（1930年代）に製作した昆虫標本の写真画像を展示した。（写真3）この標本箱には当時のフランスで普通に採集できる昆虫が収められているものと考えられ、岸本による可能な限りの同定を加えた。そして前述の展示標本には、実際にビュフェが採集したこれらの昆虫やその仲間も加えるように心掛けた。その一例としてビュフェの標本のなかにあるトラハナムグリの仲間（*Trichius fasciatus*）に合わせ、中学生時代に岸本が採集した大阪産のヒメトラハナムグリを展示するという遊びを忍び込ませた

りもした。また、ピンに刺した標本が描かれている《蝶とワイン》(写真4)は、触角の形態や眼状紋の配置から明らかにヤママユガの仲間をモティーフにしているようにみえるものの、タイトルは"蝶"となっている。そのため、標本としては、まるで蝶のように見える艶やかな蛾であるニシキオオツバメガや欧州産の大型で優美なイザベラミズアオを、世界最大級のヨナグニサン、ナンベイオオヤガとともに展示した。

写真3　ビュフェの標本箱のパネル

写真4　《蝶とワイン》1951年

展示室中央の小部屋は、チョウの作品と標本だけを集めたコーナーである。ビュフェにとって「蝶」はさまざまな技法でいくども描いた重要なモティーフでもある。ビュフェ美術館ならではの一作として、ビュフェが来日した際に描いた、カラフルでさまざまなかたちの蝶たちが舞う六曲一隻の金屏風も展示。左右の壁は油彩とリトグラフによる蝶、そして中央にはモルフォチョウの標本箱、屏風と向き合う壁にはさまざまなかたちの世界の蝶の標本箱を12箱重ねて設置した。12の標本箱は、重ねて棚のようにするしくみにし、壁一面が蝶の標本で覆われるようにした。蝶といえば、その美しい色彩がまず思い浮かぶが、今回の展示のテーマは「かたち」であり、そのため蝶の標本のセレクトについても色よりも形にこだわった。今回壁一面に魅せる12の標本箱のうち、10箱はアゲハチョウ科のもののなかから選びだし、翅の形、尾状突起の有無など、色よりも形の多様性を見せることにこだわった。ビュフェは多くの蝶をモティーフとした作品を残しているが、その特徴としてその形が実に多様で面白いことが挙げられる。今回のこの小部屋では、実際の蝶の形態の多様性とビュフェの想像上の形態の多様性を向かい合わせて対比し、その落差もしくは拮抗を楽しむ空間を作ることができたのではないかと考えている(写真5、6)。

写真5　ビュフェの油彩と屏風

写真6　ビュフェ作品と標本箱で見せる多様な「かたち」のチョウ

＜海のいきもの＞

ビュフェは少年時代の夏休みを母とフランス北西部ブルターニュの海で過ごしていた。その思い出のエピソードに始まり、母と思い出の海岸に捧げた版画、カニ、マトウダイなどを描いた作品を選んだ。ケースにはマダイ、トゲノコギリガザミの剥製、マトウダイの液浸標本が並ぶ。ビュフェがこうした生きものたちのどういう部分（トゲトゲしたヒレやハサミなど）を好んでいたのかが見えてくる。（写真7）

写真7　「海のいきもの」展示コーナー

＜陸のいきもの＞

導入として、ビュフェがごく初期に発表した黒インクによる動物デッサンのシリーズ「動物寓意集」を紹介した。美術館はこの作品は所蔵していないため、このシリーズを掲載した画集を展示した。当時動物園にもいなかったと思われる珍しい生きものも描かれていることから、少なくとも一部は博物館などの剥製を描いたのではないかと思われる。そのほか、ヒキガエル、アカギツネの標本とともに、《ガマ》《キツネ》の油彩、南仏でウマを描いた水彩やドライポイント（版画）のレイヨウなども展示した。（写真8）

写真8　「陸のいきもの」展示コーナー

**展示室でのアクティビティ**

本展の最後に、来館者が絵を描くことができるアクティビティコーナーをつくった。壁面には、インクによるデッサンや、骨格を描いた版画作品、リトグラフの鳥や魚などの作品を展示し、部屋の中央に机を配置してアクティビティコーナーとした。標本の画像をカードにしたものを数種類置き、それにトレーシングペーパーを重ねて写し取るという活動である。写し取りながら、生きもののかたちやもようを観察することができる上、ビュフェが生きものへの興味と観察眼をもとに自由に描いたように、そこに自由に書き足すこともできる。また写し取りなしで自由に描くことができる白紙も用意した。トレーシングペーパーをつかって写し取るという活動は、子どもたちに大人気であった。ちいさな子どもには少し難しいかとも思っていたが、未就学児でもストレスなく取り組めているようだった。こうした活動を展示室内に用意することによって、本展のテーマである、いきもののかたちの観察と創造を追体験しながら、長く展示室に滞在してもらえることとなった。また、同じグループの中で展示を見る速度が違う場合も、アクティビティをしながら他の人を待つなどの時間調整の場ともなった。（写真9）

写真9　アクティビティコーナー

**ワークショップ**

関連ワークショップも実施した。「生きものをじっくり観察×描いてみよう」では、展示室でビュフェが生きものをどう描いているかを見た後、気になった標本（部分でも、全体でも）をスケッチし、それをもとに、絵具やクレヨンをつかって、自分のスタイルで「いきもののかたち」を描いた。講師は美術館学芸員がつとめ、観察のポイントや絵具やクレヨンの使いかたのコツなどを伝え、参加者それぞれの観察と創造を共有した。

ふじミューの研究員が講師となったワークショップも実施した。こちらは特に絵を描く活動に結び付けることはせず、生きもののかたちを専門家と一緒に楽しむことに重点を置いた。「動物の骨をじっくりしらべよう！」はふじミューの西岡佑一郎研究員を講師とし、参加者がグループごとに1体分の哺乳類の骨を並べることに挑戦した。骨にはさまざまなかたちがあること、動物の種類によってかたちがちがうこと、それが動物のくらしともかかわっていることなどを実感するワークショップとなった。「昆虫のからだをじっくりしらべよう！」は、本展担当者である岸本が講師をつとめた。野外でバッタなどの昆虫を捕まえたり、研究者による昆虫採集の方法を見せたりしたあと、室内に戻り、参加者に配った昆虫標本を基に、形態的特徴を観察。ハチ目とハエ目の違いなどを学び判別するなど、様々な昆虫を目レベルで分類することを試みた。2つのワークショップともに「いきもののかたち」を存分に楽しみ学ぶことができたものと考えている。

**展示してみての発見－博物館より**

ふじミューの岸本は、ベルナール・ビュフェが昆虫をはじめ、様々な動物を描いていることについて知識としては知っており、興味はあったが、深く触れあう機会を持てずにいた。今回、実際に作品を目の当たりにし、決して写実的でない絵の中から、ひとりの芸術家が見たであろう、そして想像したであろう生物の姿を後追いする作業は、当初考えていたより刺激的で知的興奮に満ちたものであった。今回作品を見ているなかで、ビュフェの動物を基にした作品には特徴があることに気づかされた。まず、写実的でないものにも何らかのモティーフとなったであろうモデルの存在が想起されること、そして形態の細部を見ていくと、緻密な観察に基づくと考えられる部分と大胆な想像によって描かれている部分があり、それらが渾然一体となっているのが、ビュフェの動物作品の魅力であるということである。どの絵にも実在のモデルの存在が感じられ、そのモデルであろう動物の標本と作品を見比べることで様々な気づきを得ることができた。例えば、展示する蝶の標本を選択するに当たり、「かたち」の多様性にこだわることとし、なるべく翅形の多様性を強調できるような種を選ぶために、世界のアゲハチョウ類を俯瞰し直してみたところ、これまでに漠然と考えていた以上の「かたち」のバリエーションの存在を改めて認識できたということがある。また、アンバランスに見える作品上の蝶の翅型にも、誇張はあるが、基本的には大きく変わらない実際のチョウが存在するという気づきもあった。これらは、ビュフェの想像の世界と実際の動物の多様性の拮抗ということができるだろう。ビュフェは動物の「尖った部分」、「トゲトゲ」に魅力、執着があるらしいことが分かったので、なるべく「ビュフェの好きそうな標本」を探し出す行為はキュレーションとして純粋に楽しかった。今回の、ビュフェの作品を通して生きものの「かたち」に迫るという試みは、モデルもしくはモティーフ（実物）とアート（人の手による作品）を並置し、見比べることで、両方を観察・理解するという試みであった。この手法は今後様々な美術作品に応用できる可能性を感じることができたという点において、博物館としてたいへん有意義であった。

**展示してみての発見－美術館より**

標本があまりに魅力ある展示物であることから、そちらにばかり注目が集まり絵が添え物のようになることを心配してもいたが、見る人のほとんどは標本も作品もどちらも楽しんでいた。どちらを先に見るか、どちらを主とするかはそれぞれだが、絵と標本の両方があることで、比べて見て違和感を感じたり、なぜこんな風に描いているのだろうと不思議に思ったり、見る人は絵と標本を行ったり来たりすることになる。それが見る人に発見をもたらすようだった。また、ビュフェの作品（特に油彩）は大きなものも多いので、他の展示室より天井高が低い企画展示室に展示するとかなりの迫力があり、それも標本に負けない理由のひとつであったように思う。

昆虫の標本を見ながら、昆虫を捕まえた時の思い出を話す来館者も多く見られた。持ったら痛かった、かまれたことがあるなど、来館者にとって身近な標本も多かったようだ。キツネやヒキガエルの標本も、来館者の発話が多い標本であった。標本によって引き出される経験とあわせてビュフェの作品を見てもらえたようだ。

ビュフェのパートナーの記述によると、ビュフェの描くいきものは、「空想もまじえて」描いているという。こうした記述から、美術館学芸員は、ビュフェの描いた生きものには空想部分が多いと考えてきたが、実際の作品と標本を見てみると、想像だけで描いたのではなく、実際には昆虫など動物をよく知っていたからこそ描けたものが多いことがわかった。例えば《ハチ》(写真10)という作品は、これは本当にハチなんだろうか?と思わせる絵であるが、これをふじミューの岸本がみたところ、この作品にはハエのなかまの特徴が見て取れた。ハチには前後2対、4枚の翅があるが、ハエのなかまでは前の翅だけが飛ぶために使われ、後ろの2枚は小さな突起のようなかたちになる。この突起は「平均棍」というのだが、ビュフェの《ハチ》にはこの平均棍が描かれているのである。ガガンボを描いたと思われる《褐色の昆虫》(ドライポイント)にも、この突起が描かれているが、実際ガガンボには平均棍があり、それは本展に展示した標本でも確認することができた。ビュフェは昆虫のからだのこうしたパーツを知っていて描いたのだろう。そして、それを《ハチ》にも描いてしまうほど、お気に入りのパーツだったのかもしれない。「空想」が加えられてはいるが、それは実際の観察や知識に基づいたものだったのだろう。学芸員が思っていた以上に、ビュフェという画家が生きものを愛し、観察し、よく知っていたのだと、本展を通じて知ることができた。

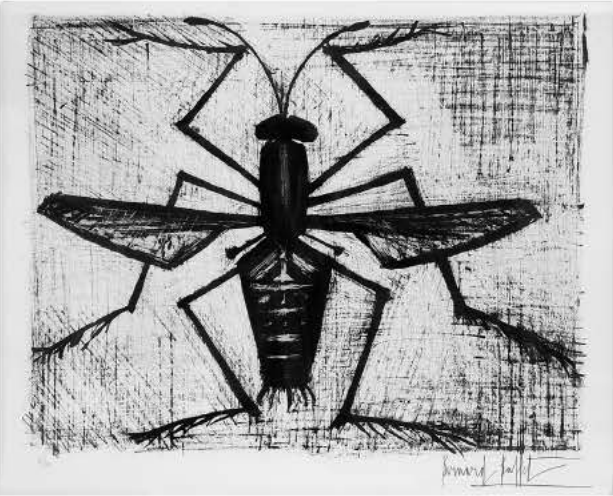


写真10　《ハチ》1964年

**美術館に標本を展示することについて**

今回の企画展では、博物館が所蔵する生物標本を美術館に運び展示するという形をとった。美術館や人文系博物館での生物標本資料の展示は、防虫や防カビの点から躊躇されることが多い(俎上にのせることさえ難しい?)ように感じていたが、今回は美術館からの申し出にはじまり、博物館側からの積極的な協力を経て実現することができた。今回は博物館における標本管理の状況(例えば毎年燻蒸を行っていること)や、ビュフェ美術館の作品の性質(すぐに昆虫に加害されるような資料でない)から問題ないと考えられたという背景があり、ビュフェ美術館の雨宮・井島に自然史系の博物館での勤務経験があったということも、今回の展示がスムーズに実現した一因かもしれない。今回の試みは美術館の来館者にとって新しい体験となったようであり、博物館の常連が美術館に足を運ぶきっかけとなったことも伺えた。また企画者として振り返ってみると、その充実感と達成感の内容には、これまでに自館で開催した企画展では感じられなかった新しい気づきがいくつもあった。このように、両館にとって喜ばしい成果があり、今後の連携の可能性を拓くものとなったといえよう。美術館における標本展示については、一定のハードルはあるものの、どのようなものなら可能か、またどのようなものが効果的で、面白いものになるのか。今後、議論がはじまり、様々なコラボレーションが誕生することを期待したい。

表1　展示品リスト（絵画）

| タイトル（和） | タイトル（仏） | 制作年 | 素材・技法 | サイズ（cm/h×w） |
|---|---|---|---|---|
| 赤い昆虫 | Le longicorne rouge | 1963 | 油彩 | 130×89 |
| 蝶 | Papillon | 1963 | 油彩 | 89×116 |
| 馬の顎 | La mâchoire de cheval | 1970 | 油彩 | 195×130 |
| 小さいミミズク | Petit duc | 1963 | 油彩 | 100×65 |
| 枝の上のフクロウ | Chouette sur une branche | 1987 | 油彩 | 92×65 |
| トラフズク | Le moyen duc | 1990 | 油彩 | 81×60 |
| ふくろう | Tête de hibou | 1959 | ドライポイント | 23.5×33 |
| メンフクロウ | Chouette effraie | 1994 | デッサン | 65×92 |
| 三羽のふくろう | Trois Chouettes | 1988 | 油彩 | 113×145 |
| 鳥 | Oiseau | 1963 | 油彩 | 19×24 |
| 鳥のいる静物 | Nature morte aux oiseaux | 1951 | 油彩 | 27×46 |
| 極楽鳥 | L'oiseau de paradis | 1990 | 油彩 | 130×89 |
| 七面鳥 | Dindon royal | 1963 | 油彩 | 89×130 |
| 海つばめ | Les hirondelles de mer | 1963 | 油彩 | 81×100 |
| 花瓶と鳩 | Vase de fleurs et pigeon | 1990 | 油彩 | 92×65 |
| とんぼ | Libellule | 1959 | 油彩 | 54×65 |
| とんぼ | Libellule | 1957 | 油彩 | 97×130 |
| 褐色の昆虫 | Insecte brun | 1963 | 油彩 | 130×97 |
| くわがた虫 | Le lucane | 1964 | リトグラフ | 74×53 |
| てんとう虫 | La coccinelle | 1964 | リトグラフ | 74×53 |
| たいこうち | La nèpe | 1964 | リトグラフ | 74×53 |
| スズメバチ | La guêpe | 1964 | リトグラフ | 54×73.5 |
| ハチ | L'abeille | 1964 | リトグラフ | 54×73.5 |
| 褐色の昆虫 | Insecte brun | 1964 | ドライポイント | 57×75.5 |
| 蝶とワイン | Nature morte aux papillons | 1951 | 油彩 | 65×81 |
| 赤と黄の蝶 | Le papillon rouge et jaune | 1964 | リトグラフ | 54×73.5 |
| 緑の蝶 | Le papillon vert | 1964 | リトグラフ | 54×73.5 |
| オレンジの蝶 | Le papillon orange | 1964 | リトグラフ | 54×73.5 |
| 蝶 | Papillon | 1988 | 屏風（水彩） | 六曲一隻 |
| 蝶 | Papillon | 1959 | 油彩 | 46×65 |
| 蝶 | Papillon | 1962 | 油彩 | 60×92 |
| 蝶 | Papillon | 1959 | 油彩 | 50×65 |
| サン＝カスト（エピローグ） | Épilogue（Saint-Cast） | 1962 | ドライポイント | 50.5×66 |
| 蟹（サン＝カストより） | Le crabe（Saint-Cast） | 1962 | ドライポイント | 50.5×66 |
| 蟹 | Le crabe | 1963 | 油彩 | 81×100 |
| 魚 | Poisson | 1962 | ドライポイント | 57×76 |
| 魚の剥製 | Le poisson naturalise | 1955 | 油彩 | 54×73 |
| 魚 | Poisson | 1963 | 油彩 | 81×100 |
| ガマ | Le crapaud | 1964 | 油彩 | 81×116 |
| キツネ | Le renard | 1987 | 油彩 | 89×130 |
| 馬 | Le cheval | 1951 | 水彩 | 50×65 |
| かもしか | Gazelle | 1962 | ドライポイント | 76×56.5 |
| アカガエル | La grenouille | 1994 | デッサン | 50×65 |
| 鳥の骸骨 | Squelette d'oiseau | 1964 | ドライポイント | 76×56 |
| ヒゲワシ | Gypaète | 1994 | デッサン | 65×92 |
| おんどり | Le coq | 1959 | ドライポイント | 76×56.5 |
| 小さな鳥 | Le petit oiseau | 1964 | リトグラフ | 54×73.5 |
| ふくろう | La hulotte | 1982 | リトグラフ | 58×76 |
| 小さなふくろう | Petit duc | 1984 | リトグラフ | 76×57 |
| レイヨウの頭 | Tête de antilope | 1994 | デッサン | 50×65 |
| かさご | La rascasse | 1964 | リトグラフ | 54×73 |

表2　展示品リスト（標本）

| 展示位置 | 和　名 | 学　名 | 標本 |
|---|---|---|---|
| 入口<br>導入部 | テナガカミキリ | *Acrocinus longimanus* | 乾燥標本 |
| | ゴライアストリバネアゲハ | *Ornithoptera goliath* | 乾燥標本 |
| | ウマ | *Equus caballus* | 骨格標本 |
| 鳥 | トラツグミ | *Zoothera aurea* | 剥製標本 |
| | ユリカモメ | *Chroicocephalus ridibundus* | 剥製標本 |
| | オオコノハズク | *Otus semitorques* | 剥製標本 |
| | フクロウ | *Strix uralensis* | 剥製標本 |
| | オオコノハズク | *Otus semitorques* | 剥製標本 |
| | アカネズミ | *Apodemus speciosus* | 剥製標本 |
| 海の<br>いきもの | マダイ | *Pagrus major* | 剥製標本 |
| | トゲノコギリガザミ | *Scylla paramamosain* | 剥製標本 |
| | マトウダイ | *Zeus faber* | 液浸標本 |
| 陸の<br>いきもの | ホンドギツネ | *Vulpes vulpes japonica* | 剥製標本 |
| | アズマヒキガエル | *Bufo japonicus formosus* | 剥製標本 |
| スケッチ部屋 | オオバン | *Fulica atra* | 骨格標本 |
| 昆虫<br>（トンボ） | レフルゲンスミナミカワトンボ | *Euphaea refulgens* | 乾燥標本 |
| | カウピミドリカワトンボ | *Neurobasis kaupi* | 乾燥標本 |
| | ルクトゥオサシボリカワトンボ | *Vestalis luctuosa* | 乾燥標本 |
| | アオハダトンボ | *Calopteryx virgo* | 乾燥標本 |
| | オニヤンマ | *Anotogaster sieboldii* | 乾燥標本 |
| | オオヤマトンボ | *Epophthalmia elegans* | 乾燥標本 |
| | ミヤマアカネ | *Sympetrum pedemontanum* | 乾燥標本 |
| | コシアキトンボ | *Pseudothemis zonata* | 乾燥標本 |
| | ハッチョウトンボ | *Nannophya pygmaea* | 乾燥標本 |
| 昆虫<br>（カミキリ） | タイタンオオウスバカミキリ | *Titanus giganteus* | 乾燥標本 |
| | トゲフチオオウスバカミキリの一種 | *Bandar* sp. | 乾燥標本 |
| | キベリカタビロハナカミキリ | *Pachyta erebia* | 乾燥標本 |
| | フタコブルリハナカミキリ | *Stenocorus coeruleipennis* | 乾燥標本 |
| | クロオオハナカミキリ | *Macroleptura thoracica* | 乾燥標本 |
| | ヒゲブトハナカミキリ | *Pachypidonia bodemeyer* | 乾燥標本 |
| | オニホソコバネカミキリ | *Necydalis gigantea* | 乾燥標本 |
| | ミヤマカミキリの一種 | Cerambicinae Gen. et sp.1 | 乾燥標本 |
| | ミヤマカミキリの一種 | Cerambicinae Gen. et sp.2 | 乾燥標本 |
| | アオスジカミキリの一種 | *Xystrocera* sp. | 乾燥標本 |
| | カミキリムシの一種 | Cerambycidae Gen. et sp. | 乾燥標本 |
| | ボルネオベニボシカミキリ | *Rosalia borneensis* | 乾燥標本 |
| | スマトラベニボシカミキリ | *Rosalia inexpectata* | 乾燥標本 |
| | シロスジカミキリの一種 | *Batocera* sp. | 乾燥標本 |
| 昆虫<br>（コガネムシ） | カブトムシ | *Trypoxylus dichotomus* | 乾燥標本 |
| | モーレンカンプオオカブト | *Chalcosoma moellenkampi* | 乾燥標本 |
| | ゴホンヅノカブト | *Eupatorus gracilicornis* | 乾燥標本 |
| | オオセンチコガネ | *Phelotrupes auratus* | 乾燥標本 |
| | レックスゾウカブト | *Megasoma rex* | 乾燥標本 |
| | マレーテナガコガネ | *Cheirotonus peracanus* | 乾燥標本 |
| | ゴライアスオオツノハナムグリ | *Goliathus goliatus* | 乾燥標本 |
| | ヒメトラハナムグリ | *Lasiotrichius succinctus* | 乾燥標本 |
| | オオツノカナブン | *Dicronorhina micans* | 乾燥標本 |
| | シロテンハナムグリ | *Protaetia orientalis* | 乾燥標本 |
| | クワガタコガネの一種 | *Kibakoganea* sp. | 乾燥標本 |
| | キンギンコガネ | *Crysina chrysargirea* | 乾燥標本 |

| 展示位置 | 和　名 | 学　名 | 標本 |
|---|---|---|---|
| | コフキコガネ | *Melolontha japonica* | 乾燥標本 |
| 昆虫<br>（ハチ他） | ウマノオバチ | *Euurobracon yokahamae* | 乾燥標本 |
| | サトジガバチ | *Ammophila sabulosa* | 乾燥標本 |
| | オオスズメバチ | *Vespa mandarina* | 乾燥標本 |
| | サキグロムシヒキ | *Machimus scutellaris* | 乾燥標本 |
| | シオヤアブ | *Promachus yesonicus* | 乾燥標本 |
| | ミカドガガンボ | *Ctenacroscelis mikado* | 乾燥標本 |
| | シロスジベッコウハナアブ | *Volucella tabanoides* | 乾燥標本 |
| | ツノトンボの一種 | Ascalaphidae Gen. et sp. | 乾燥標本 |
| | キバネツノトンボ | *Libelloides ramburi* | 乾燥標本 |
| | ウスバカゲロウの一種 | Myrmeleontidae Gen. et sp. | 乾燥標本 |
| 昆虫<br>（蛾） | ニシキオオツバメガ | *Chrysiridia rhipheus* | 乾燥標本 |
| | ヨナグニサン | *Attacus atlas* | 乾燥標本 |
| | ナンベイオオヤガ | *Thysania agrippina* | 乾燥標本 |
| | イザベラミズアオ | *Graellsia isabellae* | 乾燥標本 |
| 昆虫<br>（甲虫） | オオエンマハンミョウ | *Mouhotia batesi* | 乾燥標本 |
| | オオヒョウタンゴミムシ | *Scarites sulcatus* | 乾燥標本 |
| | アカヘリエンマゴミムシ | *Manticola scabra* | 乾燥標本 |
| | アオオサムシ | *Carabus insulicola* | 乾燥標本 |
| | オオスナハラゴミムシ | *Diplocheila zeelandica* | 乾燥標本 |
| | ミズスマシの一種 | Gyrinidae Gen. et sp. | 乾燥標本 |
| | エゾゲンゴロウモドキ | *Dytiscus marginalis* | 乾燥標本 |
| | ガムシ | *Hydrophilus acuminatus* | 乾燥標本 |
| | ヒラタシデムシ | *Silpha paerforata* | 乾燥標本 |
| | アカモンオオモモブトシデムシ | *Diamesus osculans* | 乾燥標本 |
| | オオヒゲコメツキの一種 | *Oxynopterus* sp. | 乾燥標本 |
| | トガリコメツキの一種 | Elateridae, Semiotinae Gen.et sp. | 乾燥標本 |
| | ヒラコブオオルリタマムシ | *Megaloxantha mouhoti* | 乾燥標本 |
| | ツマアカルリタマムシ | *Chrysochroa fulminans* | 乾燥標本 |
| | キンイロジョウカイ | *Themus episcopalis* | 乾燥標本 |
| | オオキノコムシ科の仲間 | Erotylidae Gen. et spp. | 乾燥標本 |
| | ナナホシテントウ | *Coccinella septemapunctata* | 乾燥標本 |
| | クラヤミハムシの仲間 | *Timarcha* spp. | 乾燥標本 |
| | アカモンオウサマゾウムシ | *Brachycerus ornatus* | 乾燥標本 |
| | ホウセキゾウムシの一種 | *Eupholus* sp. | 乾燥標本 |
| | オオオサゾウムシの一種 | Dryophthoridae Gen. et sp. | 乾燥標本 |
| 昆虫<br>（クワガタムシ） | パプアキンイロクワガタ | *Lamprima adolphinae* | 乾燥標本 |
| | ルニフェルミヤマクワガタ | *Lucanus lunifer* | 乾燥標本 |
| | セリケウスミヤマクワガタ | *Lucanus sericeus* | 乾燥標本 |
| | ミヤマクワガタ | *Lucanus maculifemoratus* | 乾燥標本 |
| | カステルナウツヤクワガタ | *Odontolabis castelnaudi* | 乾燥標本 |
| | フェモラスツヤクワガタ | *Odontolabis femoralis* | 乾燥標本 |
| | オニツヤクワガタ | *Odontolabis siva* | 乾燥標本 |
| | メタリフェルホソアカクワガタ | *Cyclommatus metallifer* | 乾燥標本 |
| | モーレンカンプオウゴンオニクワガタ | *Allotopus mollenkampi* | 乾燥標本 |
| | ギラファノコギリクワガタ | *Prosopocoilus giraffa* | 乾燥標本 |
| | パリーフタマタクワガタ | *Hexarthrius parryi* | 乾燥標本 |
| | マンディブラリスフタマタクワガタ | *Hexarthrius mandibularis* | 乾燥標本 |
| | ヒラタクワガタ | *Dorcus titanus* | 乾燥標本 |

| 展示位置 | 和　名 | 学　名 | 標本 |
|---|---|---|---|
| 昆虫（カメムシ類） | ヘリカメムシの一種 | Coreidae Gen. et sp.1 | 乾燥標本 |
| | ヘリカメムシの一種 | Coreidae Gen. et sp.2 | 乾燥標本 |
| | カメムシ科の複数種 | Pentatomidae Gen. et spp. | 乾燥標本 |
| | キエリアブラゼミ | *Tacua speciosa* | 乾燥標本 |
| | テイオウゼミ | *Megapomponia imperatoria* | 乾燥標本 |
| | ユカタンビワハゴロモ | *Fulgora laternaria* | 乾燥標本 |
| | タイワンタガメ | *Lethocerus indicus* | 乾燥標本 |
| | ジャワタイコウチ | *Nepa rubra* | 乾燥標本 |
| | タガメモドキ | *Hydrocrynus* sp. | 乾燥標本 |
| 蝶平置き | ディディウスモルフォ | *Morpho godartii didius* | 乾燥標本 |
| | レテノールモルフォ | *Morpho rhetenor rhetenor* | 乾燥標本 |
| | ヘレナモルフォ | *Morpho rhetenor helena* | 乾燥標本 |
| 蝶壁1 | アオスソビキアゲハ | *Lamproptera meges* | 乾燥標本 |
| | アオスジアゲハ | *Graphium serpedon* | 乾燥標本 |
| | オナガタイマイ | *Graphium antiphates* | 乾燥標本 |
| | アリステウスオナガタイマイ | *Graphium aristeus* | 乾燥標本 |
| | アサクラアゲハ | *Graphum eurous* | 乾燥標本 |
| | ティンデラエウスタイマイ | *Graphium tynderaeus* | 乾燥標本 |
| | アフリカオナガタイマイ | *Graphium antheus* | 乾燥標本 |
| | エンドクスタイマイ | *Graphium endochus* | 乾燥標本 |
| | タイワンタイマイ | *Graphium cloanthus* | 乾燥標本 |
| 蝶壁2 | パルホソバジャコウアゲハ | *Losaria palu* | 乾燥標本 |
| | デュプレダホソバジャコウアゲハ | *Losaria doubledayi* | 乾燥標本 |
| | ベニモンホソバジャコウアゲハ | *Losaria neptunus* | 乾燥標本 |
| | ウスバジャコウアゲハ | *Cressida cressida* | 乾燥標本 |
| | クーンホソバジャコウアゲハ | *Losaria coon* | 乾燥標本 |
| | アケボノアゲハ | *Atrophaneura horishanus* | 乾燥標本 |
| | オオハゲタカアゲハ | *Atrophaneura sycorax* | 乾燥標本 |
| 蝶壁3 | カギバアゲハ | *Meandrusa payeni* | 乾燥標本 |
| | テングアゲハ | *Teinopalpus imperialis* | 乾燥標本 |
| | ギフチョウ | *Luehdorfia japonica* | 乾燥標本 |
| | ヒメギフチョウ | *Luehdorfia puziloi* | 乾燥標本 |
| | シナシボリアゲハ | *Bhutanitis thaidina* | 乾燥標本 |
| | シボリアゲハ | *Bhutanitis lidderdalii* | 乾燥標本 |
| 蝶箱4 | コロンブスオナガタイマイ | *Eurytides columbus* | 乾燥標本 |
| | プロタシラウスタイマイ | *Eurytides protesilaus* | 乾燥標本 |
| | エリタリオンジャコウアゲハ | *Parides erithalion* | 乾燥標本 |
| | ハーネルトンボジャコウアゲハ | *Parides hahneli* | 乾燥標本 |
| | ベルスアオジャコウアゲハ | *Battus belus* | 乾燥標本 |
| | キオビフトバネアゲハ | *Papilio aristeus* | 乾燥標本 |
| | タスキアゲハ | *Papilio thoas* | 乾燥標本 |
| 蝶箱5 | グロセスミスオナシアゲハ | *Papilio grosesmithi* | 乾燥標本 |
| | ダルダヌスアゲハ | *Papilio dardanus* | 乾燥標本 |
| | ドルーリーオオアゲハ | *Papilio antimachus* | 乾燥標本 |
| | ザルモクシスオオアゲハ | *Papilio zalmoxis* | 乾燥標本 |
| | オリバズスルリアゲハ | *Papilio oribazus* | 乾燥標本 |
| | デララランデアゲハ | *Papilio delalandei* | 乾燥標本 |
| | マンゴウラアゲハ | *Papilio mangoura* | 乾燥標本 |

| 展示位置 | 和　名 | 学　名 | 標本 |
|---|---|---|---|
| 蝶箱6 | ビクトリアトリバネアゲハ | *Ornithoptera victoriae* | 乾燥標本 |
| | ゴクラクトリバネアゲハ | *Ornithoptera paradisea* | 乾燥標本 |
| | チトヌストリバネアゲハ | *Ornithoptera tithonus* | 乾燥標本 |
| | ブルキシタアゲハ | *Troides prattorum* | 乾燥標本 |
| | アンフリサスキシタアゲハ | *Troides amphrysus* | 乾燥標本 |
| | アカエリトリバネアゲハ | *Trogonoptera brookiana* | 乾燥標本 |
| 蝶箱7 | メガネトリバネアゲハ | *Ornithoptera priamus* | 乾燥標本 |
| | アカメガネトリバネアゲハ | *Ornithoptera croesus* | 乾燥標本 |
| 蝶箱8 | アポロウスバ | *Parnassius apollo* | 乾燥標本 |
| | オオアカボシウスバ | *Parnassius nomion* | 乾燥標本 |
| | アカボシウスバ | *Parnassius bremeri* | 乾燥標本 |
| | テンザンウスバ | *Parnassius tianschanicus* | 乾燥標本 |
| | アメリカミヤマウスバ | *Parnassius smintheus* | 乾燥標本 |
| | テネディウスウスバ | *Parnassius tenedius* | 乾燥標本 |
| | アウトクラトールウスバ | *Parnassius autocrator* | 乾燥標本 |
| | チャールトンウスバ | *Parnassius charltonius* | 乾燥標本 |
| | ウスバシロチョウ | *Parnassius citrinarius* | 乾燥標本 |
| 蝶箱9 | オオルリアゲハ | *Papilio ulysses* | 乾燥標本 |
| | ブッダオビクジャクアゲハ | *Papilio buddha* | 乾燥標本 |
| | アオネアゲハ | *Papilio peranthus* | 乾燥標本 |
| | キアゲハ | *Papilio machaon* | 乾燥標本 |
| | ナミアゲハ | *Papilio xuthus* | 乾燥標本 |
| | オナシアゲハ | *Papilio demoleus* | 乾燥標本 |
| | タミラナルリモンアゲハ | *Papilio tamilana* | 乾燥標本 |
| | ルリモンアゲハ | *Papilio paris* | 乾燥標本 |
| | ホッポアゲハ | *Papilio hopponis* | 乾燥標本 |
| 蝶箱10 | アンブラックスシロオビアゲハ | *Papilio ambrax* | 乾燥標本 |
| | オエノマウスアゲハ | *Papilio oenomaus* | 乾燥標本 |
| | ナガサキアゲハ | *Papilio memnon* | 乾燥標本 |
| | カバシタアゲハ | *Papilio agestor* | 乾燥標本 |
| | シロオビアゲハ | *Papilio polytes* | 乾燥標本 |
| | ウェイマーアゲハ | *Papilio weymeri* | 乾燥標本 |
| | テンジクアゲハ | *Papilio polymnestor* | 乾燥標本 |
| | ギゴンアゲハ | *Papilio gigon* | 乾燥標本 |
| 蝶箱11 | ナルキッサスミイロタテハ | *Agrias narcissus* | 乾燥標本 |
| | シロスジフクロウチョウ | *Caligo idomeneus* | 乾燥標本 |
| | ルリオビタテハ族の一種 | *Prepona chromus* | 乾燥標本 |
| | キモンスカシジャノメ | *Haetera piera* | 乾燥標本 |
| | ベニモンスカシジャノメ | *Cithaerias pireta* | 乾燥標本 |
| | ルリモンスカシジャノメ | *Cithaerias andromeda* | 乾燥標本 |
| 蝶箱12 | ウスイロフタオチョウ | *Polyura dolon* | 乾燥標本 |
| | ヨコヅナフタオチョウ | *Charaxes eurialus* | 乾燥標本 |
| | リンボルギコノハチョウ | *Kallima limborgi* | 乾燥標本 |
| | オオゴマダラ | *Idea leuconoe* | 乾燥標本 |
| | アサギマダラ | *Parantica sita* | 乾燥標本 |
| | クジャクチョウ | *Inachis io* | 乾燥標本 |
| | オオムラサキ | *Sasakia charonda* | 乾燥標本 |
| | スジマネシヒカゲ | *Elymnias nesaea* | 乾燥標本 |
| | トガリバメダマチョウ | *Morphotenaris schoenbergi* | 乾燥標本 |

# 浜松市美術館企画展
# 「みほとけのキセキⅡ－遠州・三河のしられざる祈り－」
# 開催記念シンポジウム「仏像フロンティア－遠州地域の仏教文化圏－」

成城大学　岩佐光晴　　上原美術館　田島整
奈良教育大学　山岸公基　　浜松市美術館　島口直弥

## 1　はじめに（島口）

浜松市美術館では2021年、遠州・東三河地域の仏像を一堂に会した企画展「みほとけのキセキ－遠州・三河の寺宝展－」（以下「みほとけ展Ⅰ」）を開催した。この展覧会は、浜松市美術館開館以来初めてとなる本格的な地方仏の展覧会で、重要文化財や静岡県・愛知県指定文化財の仏像を中心に、当地の一級品の作例を展示した。そして2023年、近年の調査で見出された作例、評価の見直しが必要な作例を中心に、遠州・東三河地域の仏像・仏教文化圏をさらに「深堀り」することを目指し、続編としての企画展「みほとけのキセキⅡ－遠州・三河のしられざる祈り－」（以下「みほとけ展Ⅱ」）を開催した。

「みほとけ展Ⅰ」では、展覧会を監修いただいた成城大学教授の岩佐光晴氏、奈良教育大学教授の山岸公基氏にそれぞれ講演会に登壇いただき、仏像の輸送・展示の技術協力を賜った上原美術館上席学芸員の田島整氏とトークイベントを開催した。それぞれの研究の視点から、遠州・東三河地域の仏像について示唆に富むお話をいただいた。そこで、「みほとけ展Ⅱ」では、岩佐氏、山岸氏、田島氏とともに、「みほとけ展Ⅰ」、「みほとけ展Ⅱ」に出陳した作例について、シンポジウム形式で多面的・多角的に議論を交わすことで、新たな視点や研究の視座が見出されるのではないかと考え、シンポジウム「仏像フロンティア－遠州地域の仏教文化圏－」を開催することとした。

岩佐氏には静岡県文化財保護審議会委員の立場から駿河地域（静岡県中部）の仏像を、山岸氏には愛知県史編纂や豊橋市普門寺の総合調査に携わった経験から三河地域（愛知県東部）の仏像を、田島氏には長年の伊豆半島の仏像悉皆調査や多数の展覧会実施経験をふまえ伊豆地域の仏像を、それぞれ遠州地域の仏像（主に「みほとけ展Ⅰ・Ⅱ」出陳作例）との比較を交えて紹介いただいた。その上で、遠州地域の仏像や仏教文化圏についての多面的・多角的な議論を交わしながら、問題提起をしたり、今後に向けた研究課題を明らかにすることを試みた。

図1 本シンポジウムの登壇者
（右から山岸氏、田島氏、岩佐氏、久保沙里菜氏〈司会〉、島口）

## 2　基調報告「遠州地域の仏像の概観－みほとけ展Ⅰ・Ⅱを通して－」（島口）

### (1)　遠州地域に伝わる主な作例

遠州地域最古の木彫像は摩訶耶寺の千手観音立像で、頭体幹部を針葉樹の一材から彫出し、内刳りは施さない。重量感と引き締まった腰周り、脚部の翻波式衣文は古様だが、表現の形式化・硬直化から、10世紀末の制作と思われる。同時期の作例として一木造りの龍禅寺の千手観音立像、頭陀寺の不動明王立像等があるが、太平洋戦争を期に失われた。11～12世紀前半では、府八幡宮の僧形八幡神坐像や女神像等の小像に内刳りを伴わない一木造りの作例が残るが、等身以上の作例では光禅寺の大日如来坐像、東林寺の天王立像（図2）、西楽寺の月光菩薩立像等、背刳りを施す作例が散見される。12世紀末では、定朝様式で正統的な割矧・寄木造りを伴う等身像が広く分布する。西楽寺の阿弥陀如来坐像や応賀寺の四天王立像等、玉眼嵌入を伴う作例も残る。13世紀では、岩水寺の地蔵菩薩立像（建保5年〈1217〉）や応賀寺の毘沙門天立像（文永7年〈1270〉）等、制作年が判明する基準作も比較的多い。

(2) 遠州地域の仏教文化圏

① 水辺の仏教文化圏

浜名湖の広大な水辺の北西に10～13世紀の仏像が多数分布する(図3・63頁参照)。水そのものの清らかなイメージ、人々の営みと生命維持に欠かせない水という存在への信仰心が関係するようで興味深い。12世紀以降、全国で池を伴う浄土庭園が造られるが、池を伴う庭園のある摩訶耶寺、浜名湖の湖面を浄土庭園の池に見立てた可能性がある舘山寺に、それぞれ定朝様式の阿弥陀如来坐像が伝わり、浄土庭園の流行と水辺の仏教文化圏形成の関連が考慮されよう。

② 山岳の仏教文化圏

浜名湖の北西や天竜川の上流は山岳地帯である。岩室観音堂の大日如来像頭部は、遠州地域屈指の巨像で、当時の寺院の勢力や天竜川上流の山岳地域における信仰の広がりが窺える。岩水寺の地蔵菩薩立像は「裸形着装像」で、玖延寺の薬師如来立像(図4)はその特異な造形から「一日造立仏」である可能性を指摘できる。岩水寺と、玖延寺の薬師如来立像がかつて伝わった薬師門寺は天竜川上流の山岳地帯の東西に位置し、「生身仏」への信仰の伝播と受容の様相が垣間見える。

③ 三遠国境の仏教文化圏

三遠国境には、遠州・東三河地域それぞれに10～13世紀の仏像が分布する。摩訶耶寺の不動明王立像(12世紀)は、普門寺(豊橋市)の不動明王立像(12世紀)と不動十九観をもとにした造形の共通性に、図像写しの可能性が考慮される。新城市・林光寺の薬師如来坐像(嘉応3年〈1171〉)の銘文に、遠江国を示すと思われる「当国十二郡」の記述、普門寺住職「永意」の名が見られ、東三河地域と遠州地域の仏教文化圏の強い結びつきを示唆するものといえる。

(3) 遠州地域の仏教文化圏形成の背景

浜名湖という特異な地形に起因して形成された浜名湖北岸の街道は、都と遠江国、三河・遠江両国分寺を結び、東西の人的交流を通して遠州地域に豊かな仏教文化をもたらした。その受容には、藤原俊盛ら都と繋がる荘園領主、宣光寺の地蔵菩薩坐像(永暦元年〈1160〉)を制作できるほどに財を成した在庁官人等、地域の権力者の存在も欠かせない。これら複合的な要素を背景に、遠州地域の仏教文化圏が育まれたものと推察される。

図2 東林寺天王立像(背面)

図4 玖延寺薬師如来立像

## 3 基調講演①「三河地域からみた遠州地域の仏像」(山岸)

旧三河国は現在の愛知県東半で静岡県に属する遠州(旧遠江国)とは県境を隔てているものの、隣接する別国であったという状況は遠州東隣の駿河地域と同様である。伝来の過程で遠州・三河両地域間を移動した仏像も一定数存在するだろうが、ここでは三河地域から遠州地域にもたらされた仏像一例と、現存する仏像の性格を考察する際重要な情報を提供する仏教工芸(梵鐘)一例をまず紹介したい。

浜松市天竜区秋葉寺の金剛力士立像2軀は、鎌倉時代寛元年間(1243～1247)に三河国阿弥陀寺(現愛知県新城市熊野神社)に安置するため造立されたが、明治18年(1885)に移坐されたことが確証される。次に袋井市蔵の梵鐘(図5)は昭和58年(1983)に袋井市岡崎で発掘されたが、三河国渥美郡東紇哩岡寺(=現豊橋市普門寺)に高松院(姝子内親王。1141～1176)が施入したとの平治2年(1160)の銘が陽鋳され(実際の鋳造は1162年以降か)、戦国期頃に移動した可能性が大きい。

高松院は鳥羽天皇と美福門院との間の皇女、近衛天皇の同母妹であり、異母兄後白河天皇の皇子二条天皇の中宮となった人物で、現普門寺に梵鐘を施入したのは、平治元年2年時点で三河国が高松院の院宮分国であったためかとも推測される。12世紀中葉の普門寺の仏像は、伝釈迦如来坐像が半丈六像で規模も大きいうえ、当初薬師寺(奈良市)金堂薬師三尊像中尊のように薬壺を持たない薬師如来像として造立された可能性が高く、また八角裳懸座が久安4年(1148)銘の三千院(京都市)阿弥陀三尊像中尊

と共通するなど、中央との密接な関係が想定される。普門寺や現静岡県湖西市の大知波峠廃寺といった、東に浜名湖（遠淡海）を臨む三河・遠江両国の境、弓張山系に点在する寺院群と、山城・近江両国境の山上にあって東に琵琶湖（近淡海）を臨む比叡山延暦寺とは立地が近似しており、高松院は第二の比叡山を三遠国境に造ろうとしたのかもしれない。

三河国まで下向した形跡のない高松院とは異なり、12世紀に確かに三河・遠江両国にわたって活動し、関係する可能性のある仏像・寺院が現存する二人の人物とその周辺に、続いて目を向けよう。藤原顕長（1117/8～1167）は「夜の関白」とも称された白河法皇の近臣藤原顕隆と源顕房（六条右大臣。1037カ～1094）の女との間の子で、受領として保延2年～久安元年（1136～1145）の間に三河守、久安2年～同5年（1146～1149）に遠江守、久安5年～久寿2年（1149～1155）には三河守に再任している。ところで袋井市西楽寺の縁起を記した中世史料『西楽寺勧進記』（室町時代・弘治3年〈1557〉）には、堀河天皇（在位1086～1107）の治世に源顕房により再興されたと記される。源顕房の西楽寺再興への関与は付会の説とも受け取られがちだが、顕房の兄源俊房は笠原牧（遠江国城飼郡。のち笠原荘とも）を所領としており遠江国と有縁の人物で、西楽寺日光・月光菩薩立像の制作年代推定に際して考慮すべき伝承と思われる。源顕房自身が遠江国に下向した形跡は認められないが、藤原顕長の外祖父であり、上述の日光・月光菩薩像のほかにも平安時代後期の仏像を数軀伝える西楽寺の整備に、遠江守の任にあった藤原顕長が血縁の関係で関与した可能性も考えられる。

次に源範頼（1150?～1193?）は源義朝と遠江国池田宿（現磐田市）の遊女との間に生れ遠江国蒲御厨（現浜松市）で育って「蒲冠者」と呼ばれ、源頼朝の代官として源義仲・平氏追討に赴き、義経とともにこれらを滅ぼした人物で、元暦元年（1184）に三河守に任じられた。建久元年（1190）以前に離任したが、同時期に三河国奉行人を務めた安達盛長（1135～1200）の婿でもある。近世史料だが『三河刪補松』（安永四年〈1775〉）に範頼が三河守であった時に藤九郎（安達盛長とその子安達景盛とに共通する通称）を監として造営した七堂として現豊川市財賀寺・普門寺・現蒲郡市長泉寺など七か寺が挙げられており、長泉寺と財賀寺には範頼三河守在任中の制作とみて無理でなくかつ同一仏師の作と認められる仏像が現存することから、この伝承には一定程度史実が反映されていると考えられる。長泉寺の阿弥陀三尊・不動明王・毘沙門天の一具像は北条時政により創建された伊豆の国市願成就院大御堂の阿弥陀如来・不動三尊・毘沙門天像（文治2年〈1186〉運慶作）と同じ尊像のセットで（1185年に完成した源頼朝創建の鎌倉勝長寿院にも同一セットが祀られたとする説が有力）、京都・奈良の影響力が卓越していた平安時代後期に対して、東海道の東、鎌倉からの文化波及が認められるところに新味がある。普門寺客殿の阿弥陀如来坐像（図6）は、北条義時発願の願成就院本尊阿弥陀如来坐像（建保3年〈1215〉）、北条泰時息女発願の横浜市證菩提寺本尊阿弥陀如来坐像（嘉禎2年〈1236〉）、北条政子発願の鎌倉市寿福寺薬師如来坐像（建暦元年〈1211〉）と作風がきわめて近く、これら鎌倉幕府の枢要を担った人物に重用され、かつ鎌倉時代を通じて東三河の地頭であり続けた安達氏の二代目に当たる安達景盛（？～1248）の関与を積極的に想定してよいと思われる。

図5 梵鐘（袋井市蔵）

図6 普門寺客殿阿弥陀如来坐像

### 4　基調講演②「駿河地域からみた遠州地域の仏像」（岩佐）

駿河国の範囲は、現在の御殿場市、裾野市、沼津市、富士市、富士宮市、静岡市、焼津市、藤枝市、島田市を中心とする地域を示すが、当地域の仏像を考える上で、まず注目されるのが『日本霊異記』中巻第三十九に記載される以下の説話である。

淳仁天皇の時代、天平宝字2年（758）に遠江国と駿河国の境を流れる大井川のほとりの鵜田里の川岸の砂の中から「私を取り出してくれ」という声がした。そこを通りかかったある僧が、その声がしたので調べ、掘り出してみると、六尺五寸の薬師仏の木像で両耳が欠けていた。その僧は、信者に呼びかけて寄付を集め、仏師を招いて耳を修理し、仏堂（鵜田堂といわれている）を建て、像を安置して供養した。この仏像は霊験があらたかで光を放ち、願いごとをよくかなえてくれるので、僧俗ともに敬ったという。

この像は発見された8世紀半ばよりも前に造立されたといえ、7世紀に遡る可能性もあるが、少なくともこの地域には早くより仏教文化が定着していたことが知られる。ここで語られている鵜田堂は現在島田市に所在する鵜田寺と考えられている。同寺にはこの説話に出てくる像は伝来しないものの、駿河地域には一木彫像の古像が比較的多く伝来している。この点が、遠州地域の仏像と比較しての当地域の特色の一つといえる。鉄舟寺の千手観音立像（図7）及び諸像、坂ノ上薬師堂、中野観音堂などに伝来する諸像はその代表的な作例である。

また、遠州地域にはあまり見られない当地域の仏像の特色としては、富士信仰に基づく造像が盛んに行われていたことである。富士宮市に所在する村山浅間神社は富士山の南西麓に鎮座し、富士山を御神体とする富士信仰の中核的な神社であるが、明治時代の廃仏毀釈により打撃は受けているものの、神宮寺であった興法寺伝来の仏像が少なからず伝来している。その代表的な作例が、正嘉3年（1259）に浅間神の本地仏として造立された大日如来坐像である。また、裾野市に所在する茶畑浅間神社には、平安時代に遡る特異な姿をした四面女神坐像が伝来しており注目される。

また当地域には、鎌倉時代の慶派仏師によって造立された仏像の優品が比較的多く伝来していることも特色の一つといえる。富士市の瑞林寺には、墨書銘により治承元年（1177）に運慶の父康慶によって造立されたことが知られる地蔵菩薩坐像（図8）、裾野市の願生寺には運慶の作風を濃厚に伝える阿弥陀如来坐像、静岡市の新光明寺の阿弥陀如来立像と同市鉄舟寺の菩薩坐像は、それぞれ快慶の作風を濃厚に伝える像として注目される。

その他、鉄舟寺に伝わる文殊菩薩坐像は、像自体は平安時代・12世紀の作例であるが、平成25年度の修理に際して納入文書が発見された。その全容は解明されていないが、一部の文書に書かれた墨書から、永仁6年（1298）に戒忍という人物によって文殊菩薩の種字を五十万体分書かれたものであることが知られる。戒忍は、弘安3年（1280）に造立された叡尊の肖像彫刻（国宝・西大寺蔵）の像内に納められた文書等にその名が確認でき、鎌倉時代に戒律の復興で活躍した叡尊の門徒であったことがわかる。文殊信仰に基づく叡尊一派の活動は鎌倉で活発化するが、奈良と鎌倉の中間地である静岡での活動はこれまで知られなかった。その意味でも、今後注目されるべき作例といえる。

図7 鉄舟寺千手観音立像
（画像提供：京都国立博物館）

図8 瑞林寺地蔵菩薩坐像

### 5　基調講演③「伊豆地域からみた遠州地域の仏像」（田島）

静岡県は東西に長い。筆者は、静岡県の東南端、伊豆にある上原美術館で、21年間、伊豆半島の仏像の調査研究に携わってきた。本シンポジウムは、静岡県西端に位置する遠州地域の仏像がテーマであったが、遠州地域の仏像を、地理的に遠く離れた、伊豆の仏像と比較した場合、どのような特質が見えてくるのか。これがシンポジウムの基調講演で筆者に与えられた課題であった。私は3つの視点からアプローチしたが、本稿では、そのうちの2つを紹介したい。

(1) 最古の作例から見た伊豆と遠州

伊豆最古の仏像は、河津町谷津地区の南禅寺に伝来した26体の彫像群（現在は河津平安の仏像展示館蔵）のうち、薬師如来坐像と2体の天部像で、制作年代は9世紀半ばと考えられる（図9）。また残る23体のうち11体は10世紀の像と考えられるが、いずれの像も造形的に優れ、カヤを用いる正統な用材観に基づく造像である点からも、中央作と考えられる。私は、これらの像を、838年以降、10世紀まで噴火活動が継続していた神津島の噴火を、仏の力によって抑える目的で、中央政府によって造像されたと考えている。

一方、遠州、すなわち旧遠江国にあたる静岡県西部は、10世紀以前の木造の仏像の遺例に恵まれない。かつて現在の浜松市中央区に存在した頭陀寺の薬師如来坐像、不動明王立像、龍禅寺の千手観音立像が10世紀の作例と考えられるが、戦災で焼失し、現在は写真でしか見ることができない。現存作例としては、浜松市北区三ヶ日町、摩訶耶寺の千手観音立像が10世紀とされるのが、管見の限り、ほぼ唯一の作例である。これらの像を見る限り、遠州最古の仏像は、伊豆と比べるとほぼ一世紀が降り、また、地方色が認められる。伊豆より都に近く、また文献上、古くから陸路での往来が記録されている遠州の方が、時代が降り、また地方色が顕著である点は逆転現象と表現したくなる状況だが、これは遠江の隣国であった駿河においてもおおよそ同様の傾向が見られる。南禅寺諸像が噴火の鎮静化を祈る中央造像とする説が認められるのであれば、伊豆の造像事情は極めて特殊なものといえよう。あくまでも現在確認されている作例のみによる推論であり、今後の調査と研究の進展をまたねばならないが、現時点では、遠州への仏教文化の本格的な導入の時期は、天台、真言という平安仏教勢力が地方に順当に教線を拡大した、10世紀以降であったことを示しているように思える。

(2) 霊木を用いた造像

伊豆と遠州の像には、共通点も存在する。その例として、磐田市の府八幡宮の女神坐像（図10）と、河津町谷津の南禅寺に伝えられた神像を紹介した。府八幡宮の女神坐像は像高48.3cm、像の全容を針葉樹の一材で造る坐像で、11世紀の像とされる。一方、南禅寺の神像は像高130cm前後の立像。内部が朽ちて空洞になったクスを用いた一木造りで、おおよそ11世紀後半から12世紀の像と考えられている。両者は、材質、年代、一方は坐像、他方が立像である点などに差異があるが、一方で、いずれも像の全容を一材で造り（南禅寺の女神像は両手首先のみ別材を寄せる）、確実にそうだとは言えないまでも、表面を素地としていたと見られるなどの共通点が認められる。とりわけ、府八幡宮の女神像が、正面に大きな節があり、背面にねじれやゆがみが見られる材を用いる点、南禅寺の神像が、内部が朽ちて空洞になった材を用い、また女神像では、やはりねじれた材を用いる点は、通常、造像に適さない材を用材に選ぶという点で、共通点が認められる。同様の例として伊豆には、像表面に七つの節が確認できる伊豆の国市、宗徳寺の僧形坐像（図11）があり、これらはいずれも、霊木を用いた像と考えられるが、遠く離れた遠江と伊豆に、共通する造像思想があるらしいことが分かる。さらに視野を広げると、広島県三原市の善根寺収蔵庫には、口から顎にかけて節があり、縦に大きく開口するかのような異相をみせる僧形坐像があり、同様の例は全国各地から報告がある。

比較により、遠州と伊豆の仏像の間に差異があることを確認したが、同時に共通点も存在した。遠州の仏像調査はまだ進んでいるとは言い難い状況にある。今後調査が継続されれば、差異と共通点という二つの軸にさらに多くのプロットが落とされ、遠州の歴史や文化の特質がより鮮明に見えてくると思われる。甚だ雑駁な試論ではあるが、このことを提案して、基調講演とした。

図9 南禅寺の仏像群（河津平安の仏像展示館）

図10 府八幡宮女神坐像

図11 宗徳寺僧形坐像

## 6　シンポジウム「仏像フロンティア 遠州地域の仏教文化圏」（岩佐、山岸、田島、島口）

### 水辺の仏教文化圏について－

島口：遠州地域の平安・鎌倉時代の仏像は天竜川の河口、浜名湖北西部、愛知県境の山岳に分布している。特に天竜川や浜名湖の水辺をふまえ、遠州地域の仏教文化圏を「水辺の文化圏」とも見ることができると考えるがいかがか。

田島：仏像にとって、海とのつながり、海とつながる川における水上交通は重要である。内陸よりも海上交通で外と通じていたと考えられる。いい仏像は海側に伝わることが多い。浜名湖をどう考えても湖上交通があっただろうし、どこがその港や要衝の地域だったのかも大切。遠州地域で港として機能している場所はどのあたりか。

島口：浜名湖はかつて現在よりも北側に位置していた。遠州灘とは浜名川という川でつながっていたとされる。浜名川には、大水等の災害で頻繁に流されたとされる浜名橋が架かり、これが約170mほどの長さだったことから、浜名川は比較的大きな河川だったと考えられる。ただし、当時の港や湖上交通に関する資料に乏しく、詳細は不明である。ただし、現在の磐田市の今之浦付近にあったとされる大之浦は、港としての機能があり、その周辺が栄えたと考えられている。

田島：広大な遠州灘をそのまま横切るということは難しいと思われる。やはり、各地域の小さな港を経由しながら、東へ西へと進むと考えるのが自然であるし、そうした港との結びつきが、水辺の地域に伝わる仏像の存在と関係しているかもしれない。

島口：水辺に栄えた仏教文化圏として著名なのが琵琶湖周辺である。本展に向け、琵琶湖北東の長浜市周辺に出かけたが、水辺から程近い平地に平安時代の仏像が豊かに伝わっているし、古仏を多く伝える己高山からは琵琶湖の湖面を見通すことができる。山岸先生は逆に琵琶湖西岸の比叡山周辺と浜名湖西岸の弓張山系周辺の地理的関係と寺院の位置の類似を指摘されている。

山岸：比叡山にも成立史があるが、最澄の入山に先行する寺院があったらしい。比叡山からは遅れるが、10～12世紀の弓張山系周辺の山寺について考えれば、豊橋市の普門寺は今でこそ山のふもとの平地にあるが、かつては山上にあり、山道を辿れば大知波峠廃寺に至る。こうした宗教の道、宗教圏がまずあって、それを前提に考えると、高松院等が寺院を大規模化しようと考えたのかもしれないし、比叡山や琵琶湖西岸周辺の様相が影響を与えたのかもしれない。

島口：水辺の仏教文化圏を考える際に、水そのものへの信仰、浄土信仰や池を伴う浄土庭園の広がり等も注目される。応賀寺の阿弥陀如来坐像は、かつて浜名湖の内浦湾を擁する舘山寺にあった。岩佐先生は、阿弥陀堂が内浦湾を望むように建てられた可能性から、内浦湾の湖面を浄土庭園の池に見立てていたのではないかと指摘されている。

岩佐：水には聖なるイメージがある。浜名湖と琵琶湖は関連付けて考えてよいと思う。応賀寺の仏像について指摘したように、景観を利用するということを当時の人々が考えていてもおかしくない。聖なる場所としてよくイメージされるのが川、湖、それから山も重要である。いずれにせよ、浜名湖の水辺は重要な視点と思われる。

### 山岳信仰との関連は－

島口：岩佐先生より、水辺に加え山岳に関する話が出たが、伊豆地域もかなり山深い地域に仏像が伝来しているように思われる。伊豆地域の山岳信仰やそれにともなう仏像の造像、仏教文化圏の様相についてはどうか。

田島：伊豆市の金龍院には旭滝という105mの滝があるが、その滝の脇にあるお堂の本尊が千手観音立像であった。これについては山岳修験との関係がある

ように思われる。伊豆は熱海の伊豆山神社を中心とする修験と、箱根の方からの系統もある。特に伊豆山修験の影響は大きく、そういった意味では山岳との関わりも伺える。

慶派の作例について－

島口：遠州地域には山岳地域には、「一日造立仏」である可能性が指摘できる作例や「裸形着装像」等、13世紀の生身性を付与された作例が伝わる。特に岩水寺の「裸形着装像」である地蔵菩薩立像は、慶派仏師・運覚の作である。ただし、遠州地域全体を見渡すと、慶派仏師の作例は多いとはいえない。慶派と言えば伊豆地域には数多くの作例が伝わるが、改めて伊豆地域の慶派の仏像について紹介いただきたい。

田島：伊豆地域はやはり、北条氏との関係が色濃い。願成就院の運慶諸像は北条時政が発願している。かんなみ仏の里美術館の阿弥陀如来及び両脇坐像は実慶作で、北条宗時の墳墓堂にまつる本尊であった可能性が高い。修善寺の大日如来坐像も実慶の作であるが、源頼家の霊を慰めるために頼家の妻か母・北条政子が発願した可能性が推定されている。いずれの慶派の像にも北条氏の影があり、慶派が北条氏の中でブランド化されていたともいえる。

島口：東三河地域では、普門寺に慶派特有の上げ底式の像底をもつ阿弥陀如来坐像が、熊野神社には、行慶・鏡慶作の阿弥陀如来坐像・聖観音坐像が伝わり、慶派の作例が広く点在しているように思われるがいかがか。

山岸：三河地域は西三河と東三河に分かれるが、西三河の滝山寺の聖観音立像が運慶作例として著名である。また、西尾市・専長寺の阿弥陀如来立像は快慶作品に極めて近い。一方で東三河は、熊野神社の行慶・鏡慶作の像があるものの、運慶・快慶のような慶派の主要仏師とまでは言えない。伊豆の慶派の様相に即して東三河を考えるならば、東三河は鎌倉時代を通じて安達氏の支配下であったということが重要である。承久の乱後、足利氏が西三河を支配するが、三河全域が足利氏一色になったわけではないと考えている。普門寺の阿弥陀如来坐像は、鎌倉周辺の慶派作品に極めて近く、鎌倉との深い関係が窺える。蒲郡市・長泉寺の阿弥陀三尊は、運慶・快慶の新しい作風より守旧的であるものの、おそらく同一仏師の作と考えられる宝冠阿弥陀如来坐像が豊川市の財賀寺に伝わっている。

島口：田島先生から伊豆の慶派作例の状況、山岸先生から東三河の慶派仏師の状況を伺った。ここで、フロアより、岩佐先生へ「遠州地域への慶派の足跡を教えてほしい」との質問が出ている。基調講演で岩佐先生がお話しされた駿河地域に慶派作例が伝わっている。駿河から遠州にかけての慶派の作例についてお話いただきたい。

岩佐：駿河地域には慶派の正系仏師が関わったと考えられる作例が比較的多く伝わっている。関東地方でも、近年の調査で、運慶や快慶の作例が確認されている。これらの像はやはり鎌倉との関係で伝来しているように思われる。こうした関東地方における鎌倉との関係のあり方が、駿河地域にも及んでいたのかもしれない。

島口：遠州地域は地理的に離れ、鎌倉からの流れが及んでいないということか。

岩佐：地理的というよりも、鎌倉との「関係の距離感」があったのかもしれない。

一木造り、木の節やうろと材料－

島口：山岳信仰の話から慶派の話につながったが、ここで時代を平安時代に遡りたいと思う。一木造りの作例について、基調講演で話題が多くあがった。田島先生は南禅寺の諸像について紹介されていた。

田島：寄木造りの場合、材料は「材」という感じがあるが、一木造りの場合は、単なる「材」というよりも、「聖なるもの」から「聖なるもの」を生み出すという考え方、なるべく1本の木から彫りたいという思いがあるように思える。

島口：木の節を使った作例の話もあったが。

田島：この材で作りたいということが、先にあるような気がする。

島口：本展では府八幡宮の神像2躯、普門寺の菩薩形立像と聖観音立像、正圓寺の地蔵菩薩立像に木の節が見られる。木の節や木のうろを生かした作例は駿河地域にも多いのか。

岩佐：坂ノ上薬師堂の諸像が一木造りであるが、木の節やうろが顕著な作例はあまりないように思われる。中野観音堂にもあるかもしれないが、もう少し調べてみないと何ともいえない。

島口：東三河地域はどうか。

山岸：一概には言えないが、そうした作例があることは間違いない。

定朝様式について－

島口：11～12世紀には、遠州・東三河地域には定朝様式の作例が大変多くみられる。岩佐先生は遠州地域の定朝様式の作例の多さについて指摘されているが。

岩佐：定朝様式とともに重要な要素は寄木造りである。定朝様式と寄木造りをセットで受容するのが正統的なあり方だと思う。寄木造りという技法はそんなに簡単にできる技法ではないように思われる。定朝が確立する技法だが、構造をよく理解して組んでいかないとなかなかうまくいかない。まず学ぶことができるのは様式である。駿河地域には寄木造りを伴わない定朝様式の作例も散見される。それに対し、遠州地域は寄木造りを伴って定朝様式を受容している点が異なる。

島口：伊豆地域の定朝様式の作例はどうか。

田島：がっつり定朝様式といえる作例が少ない。岩佐先生と、地方は常に中央を見ているという話をした。中央のスタイルが気になっていて、取り入れようとしている。そのため、定朝様式の形は取り入れられているものの、一木造りである場合もある。定朝は効果的な木の組み方である寄木造りを様式とセットで確立しているのに、形だけ真似している。ある意味、形をそれっぽく作っているという感じがする。我々も仏像を調査する際、像底を見て構造を判断する。外からでは見えない。定朝様式を真似した人も像底や制作の過程を見なければ、木の組み方までは分からない。ですから、正統的な定朝様式・寄木造りではなく、古風なものが多いように思う。

作風と構造の時代的乖離－

島口：定朝様式の作例について、その作風と構造の時代的な齟齬について、興味深いお話を伺えた。今の話を聞いて、西楽寺の月光菩薩立像（図12）のことを思い浮かべた。この像は一木造りで、背刳りを施す古様な構造を示している。両腰の翻派式衣文の名残も古様であるが、垂髻の形状、正面に舌状に垂らす衣、浅く整えられた衣文線等は、新しい要素といえる。岩佐先生のご協力により樹種鑑定も実施し、材はヒノキと同定されたことをふまえ、私は12世紀前半の制作と考えた。こうした作風と構造の混在について、新しい時代の作風を先取りしていると見るのか、古い構造が残っているとみるのか、判断が難しい。平安時代後期の玉眼像についても同様の問題が想定されるがいかがか。

田島：私が以前、調査である地蔵菩薩を見たとき、鎌倉風だがやや穏やかな作風だったため、私はそれを鎌倉風が崩れた鎌倉時代後期の作例と判断した。しかし、他の研究者に「逆はないか。」と問われた。その研究者は鎌倉風になりきっていない古い作例と考えたようだ。このあたりの判断は非常に難しい。

島口：遠州地域にもそうした時代の過渡期を示すような作例、作風と構造に時代的乖離がみられる作例が散見され、ある種、新しいものを先進的に取り入れる都会的な側面と古様な部分を残す地方的な側面が混在しているように思われる。岩佐先生、山岸先生はどのようにお考えになるか。

岩佐：背刳りのある東林寺の天王立像や西楽寺の月光菩薩立像は12世紀の作例だと考えるが、これがもし都の仏像だとしたら、この時代であれば、背刳りはせず割矧ぎをしていたように思う。内刳りの作業効率を考えたら絶対に割矧ぎのほうが都合がよいはず。しかし、材を割って矧ぎ付けるという技術は案外難しく、中には思ったように割れなかったと思われる作例も散見される。

山岸：私は西楽寺の月光菩薩立像は、11世紀末の制作であると考える。造形の面でこの像が古いと考えるのは、側面から見た腹部の強いはみ出しによる肥満した体形が平安時代後期的な衣文表現と共存していること、耳に掛かる鬢髪の根元に髪の結節があるためである。鬢髪の結節は、西暦1000年を前後する作例に見られ、定朝様式の流行する頃の作例にはほとんど見られない。そうしたことから、西楽寺像は新しい要素はありながらも古様で、西楽寺に残るテキストの情報をふまえ、11世紀末の制作と考えるのが妥当と思われる。

今後の遠州地域の仏像・仏教文化圏について－

島口：さて、時間も差し迫ってきたので、先生方から遠州地域の仏像、仏教文化圏について最後に一言ずつお願いしたい。

岩佐：三河地域との国境の話が出ていたが、東の大井川

流域について調査してみるのも面白いと思う。

田島：静岡の仏像の調査は全国の他の地域同様追いついていない。私も伊豆地域を調査しているが、どこまでやれるか。遠州の仏像は今見ているものが全てとは思えない。本来は現状よりさらに豊かであると思う。さらに調査が進むよう、参加者のみなさんにも、もっと声をあげて浜松市、浜松市美術館を応援してほしい。

山岸：基調講演でもふれたが、遠江国笠原荘は、守護は北条氏だが地頭は鎌倉時代の末まで安達氏である。有力御家人が治め、造寺・造像にも関与した可能性のある荘園もあったということを言い添えたい。

図12 西楽寺月光菩薩立像（正面・背面）

図13 シンポジウムの様子

## 7　おわりに（島口）

「みほとけ展Ⅱ」の開催は、文化財指定のない作例や新たに見出された作例、評価の見直しが必要な作例について、現状確認できているものを総ざらいし、「みほとけ展Ⅰ」に出陳した国や県等の文化財指定を受けている作例を含め、様式、作風、構造、制作年代等の情報を整理・比較することで、遠州地域の仏教彫刻史の展開についてより精度の高い考察が可能になった。また、調査が叶った作例数の増加に伴い、遠州地域の仏像の分布やその傾向についても精度を高めることができた。これら最新の研究について、本シンポジウムにおいて展覧会担当学芸員が展覧会に向けた調査研究の過程をふまえ基調報告した点は、「仏像フロンティア」と称した遠州地域の仏教彫刻研究に一石を投じるものとして意義のあることといえる。

各シンポジスト（山岸・岩佐・田島）による基調講演は、いずれも遠州地域の仏像や仏教文化圏について考えるうえで示唆に富むものであった。加えて、三河地域、遠州地域、駿河地域、伊豆地域の仏像はこれまではそれぞれのフィールドにおいて調査研究がなされてきてはいるが、その特徴や傾向について比較・検討し合う機会は多くはなかったものと思われ、各地域の仏教彫刻研究においても画期的といえよう。

山岸氏は、湖水（浜名湖・琵琶湖）に対する普門寺・大知波峠廃寺跡と比叡山との立地の類似から水辺の仏教文化圏形成の背景を推察した上で、造像背景に安達氏の関与が想定される普門寺客殿の阿弥陀如来坐像と関東・伊豆地域の北条氏関係の作例、運慶ら慶派仏師の作例との類似・関連を指摘した。岩佐氏は、駿河地域には一木彫像の古像が比較的多く伝来していること、富士信仰に基づく造像が盛んに行われていたこと、鎌倉時代の慶派仏師によって造立された仏像の優品が比較的多く伝来していることを遠州地域の差異として指摘した。田島氏は、遠州地域最古の仏像は伊豆地域より1世紀が降り地方色が認められること、木の節やうろのある材を用いた像の存在に、伊豆地域と遠州地域に共通する造像思想を指摘した。

基調講演をもとに議論が交わされたシンポジウムは、「みほとけ展Ⅰ・Ⅱ」で見出された遠州地域の仏像・仏教文化圏に関するトピックスをもとに進行された。水辺・山岳の仏教文化圏の形成、一木造りと背刳りの問題、定朝様式と割矧・寄木造り、慶派の作例の伝来を主要テーマに、登壇者それぞれの研究の立ち位置からの発言により議論を広げ深め

ることができた。特に、西楽寺の月光菩薩立像については、その像容（様式、作風）や構造、最新の樹種同定の結果、寺院に残る文字資料の情報等を根拠に、制作年代を11世紀後半に置く意見と12世紀前半に置く意見が分かれた。これはさらなる検討の余地を残す問題ではあるものの、これまであまり注目を集めることがなかった本像について、展覧会とシンポジウムをきっかけとして複数の研究者の目にとまり、多面的・多角的な検討と様々な可能性が示されたことは、本シンポジウム開催の大きな意義の1つといえる。

本シンポジウムで議論された事柄は、遠州地域の仏像・仏教文化圏について考えるうえでの「点」の1つにすぎない。こうした機会を繰り返し設定し、点と点を線で結び、線で面をなすことが、研究の進展に不可欠といえる。本シンポジウムの議論を「仏像フロンティア 遠州地域の仏教文化圏」について考えるうえでの基盤とし、さらなる調査研究に邁進したい。

シンポジウムの案内フライヤー

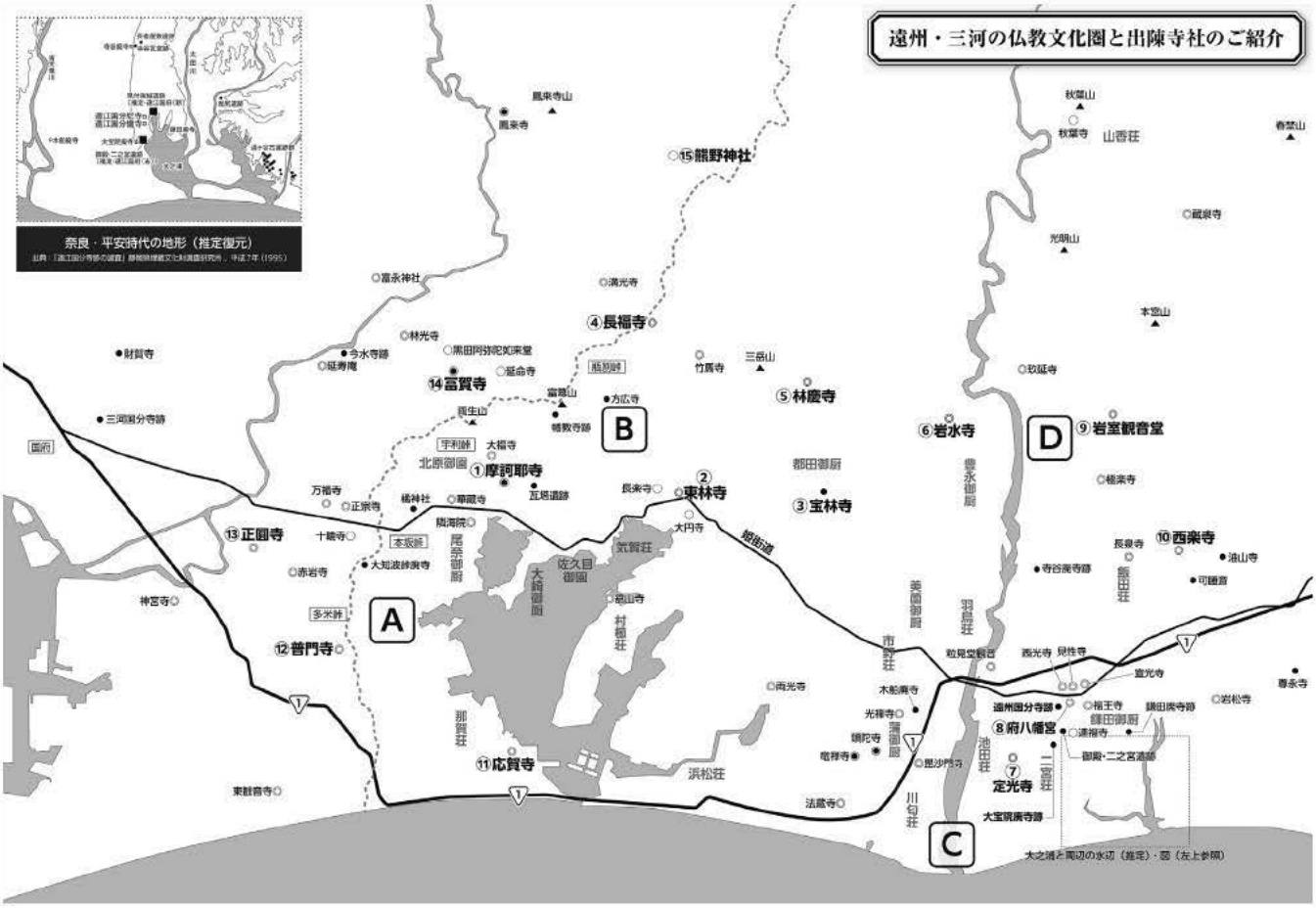



図3 遠州地域の仏像の分布（仏教文化圏）
※「みほとけ展Ⅱ」展示図録より転載（島口・2023年）

◉10世紀の作例が伝来　◎11～12世紀の作例が伝来　○13～14世紀の作例が伝来
A 浜名湖北西地域　B 浜名湖北部地域　C 天竜川河口地域　D 天竜川上流地域

# 突撃！となりのミュージアム！Vol.3
## －「有度丘陵の片隅で多分野のミュージアムの在り方を語る」篇－（報告）

一般財団法人清水港湾博物館（フェルケール博物館）　椿原靖弘
東海大学海洋学部博物館（静岡県博物館協会事業推進グループ）　手塚覚夫
ふじのくに地球環境史ミュージアム　早川宗志
静岡県立美術館（静岡県博物館協会事務局、報告者）　貴家映子

静岡県博物館協会（以下、静博協）の事業推進グループでは、本協会の事業をより開かれたものとし、各加盟館園から気軽にアイディアを寄せられるような、プラットフォーム化を目指す機運が高まっている。そのなかで、各館の課題や関心事を共有しあう場として、加盟館園同士の相互インタビューを、令和3年度から実施している。

3回目となる今回は、事業推進グループ内唯一の理系学芸員である手塚氏の提案で、理系ではあるが別分野の専門家である早川氏を訪ねることになった。また、同じ静岡市内より椿原氏にもご参加いただき、人文系博物館からの視点が共有された。

会場となったのは、高校をリノベーションした博物館であるふじのくに地球環境史ミュージアム（以下、ふじミュー）。インタビュー前には、早川氏の案内で常設展を視察し、館のミッションをデザイン性豊かに伝える個性的な展示を堪能した。

文系と理系が揃っての、そして、事業推進グループ以外のメンバーを加えての、初の相互インタビューとなった今回は、博物館の基本的な業務をめぐる現状や課題、分野ごとの相違点、ご近所の博物館ならではの連携についてのアイディアなどが共有され、新鮮な驚きと学びに満ちたものとなった。以下に、その内容をダイジェスト版でお届けする。

### 異なる分野の業務内容とその到達点について

早：植物分野の研究員としては、静岡にはどんな植物がいて、どんな暮らしぶりをしているのか、各分類群の標本を集めて、調べるというのが基本的な業務になります。その結果、ある植物の生態や新種が新たに分かることも。

手：水族分野においては、皆さんにご覧いただいている生物たちの生活史、卵から成熟するまでの過程を明らかにするというのが一つの到達点としてあります。

早：気候や生態系が変動する中で、植物標本の収集には終わりが無いので、到達点というのはないのかもしれません。

貴：美術館では、イデオロギーが変わると収集の枠組みにも修正が必要になるというような意味で到達点がないと言えるかも。

椿：人文系の博物館としては、やはり、人びとへの教育を重視します。文化的水準を上げられるような事業を意識して行っています。

### 各館の設立趣旨と事業の在り方について

椿：博物館の設立趣旨と、実際の業務とは齟齬が生じるときもありますよね。

早：当館（ふじミュー）は、7年前の設立時に、地域学や100年先など新しい価値観も考慮に入れてコンセプトを検討しました。現状では、業務の多くがその方針に沿って行われています。

手：当館（東海大）は、海に囲まれた日本において資源を海洋に求め、その研究の成果を社会に還元し、科学によって人類の幸福に寄与するという趣旨で設置されました。現在は教育や研究に特化した運営を行っています。

椿：当館（フェルケール）は港の役割や歴史を保存・普及をするという設立趣旨があるなかで、設立当時は人文系の博物館が地域に少なくて、求められる事業が多岐に

わたりました。趣旨にこだわらず、来場者のことを意識して事業を企画することもあります。

貴：年間の予算の組み立てなどから、専門外の企画を扱うこともありますが、広く文化について学んでいただくきっかけと考えています。

早：やむを得ず、設立趣旨とは異なる事業をやることになっても、その館らしい「わくわく感」を提供できるような工夫をしたいですね。

**収集保存、調査研究、教育普及、それぞれのバランスについて**

椿：県立美術館は、学芸員は研究職として採用されて、研究に重きをおくというのが開館当初からの方針ですよね。一方で、当館（フェルケール）は、来場者が展示をどう受け止めるかを重視していて。それぞれ比重が異なりますよね。

貴：美術館業界を見渡しても、一般のお客様だけじゃなくて、その分野の研究者や他の学芸員を意識して企画を作っているようなところはあるかもしれません。

手：当館は、お客様に見てもらうために生き物を育てているという前提があって、そのために魚を集めて、育てて、卵が孵って。その積み重ねが研究に発展し、論文を書いたり、学会で発表したりしています。

貴：自分は研究に苦手意識もあり、館の存在意義が問われる時代という危機感もあって、教育普及に注力しているほうですね。

早：館全体でバランスが取れていることが大事なのではないでしょうか。得意な人が得意なことをやってうまく回っていれば良いのではないでしょうか。

椿：当館（フェルケール）のような小規模な館で、自分が決定権を持つ立場になると、バランスが取れているのか不安になります。

貴：学芸員が楽しんで業務をしているかも重要では。収集や研究に対する熱意は、きっと展示を見ている方にも伝わると思います。

**建物の老朽化対策について**

手：当館（東海大学）は海水を扱うことから、建物が傷みやすくて困っています。みなさん、修繕計画はどうされていますか。

早：元校舎だった当館（ふじミュー）はオープンした時点で築34年でした。フロントヤードの見える部分は改修しましたが、バックヤードは学校のまま。博物館仕様ではない部分や老朽化で苦労することもありますが、運用を工夫して何とかしています。

貴：県立施設は、県全体で調整している建築物の修繕や長寿命化の計画のなかに入っているので、館の運営予算とは切り離されているんですよ。その代わり、希望は出しますが、自由に改修はできません。

椿：当館（フェルケール）は、建設時には学芸員がいなかったので、使い勝手が悪い部分もあります。また、建設から30年以上経過しており修繕も必要で、その都度、対応しています。ふじミューが学校をリノベーションしているというのは、館の個性にもなるし良いですね。だからこそ色んなデザイン賞を受けているんでしょう。

早：厳密な温湿度管理が必要となる美術品が展示できないなどデメリットもありますが、それも館のコンセプトとして捉えられますね。

**館独自の他館との協力体制について**

早：当館（ふじミュー）は日本平動物園と協定を結んでいて、動物の遺骸を標本にさせてもらっています。また、東日本大震災をきっかけにできた“植物系学芸員メーリングリスト”を利用しています。令和2年7月豪雨で熊本が被災した時は、現地では動けない状況だったので、植物標本を各地の博物館へ送って処置しました。

椿：川崎市市民ミュージアムの被災資料について、神奈川県内の博物館の学芸員が中心となってレスキュー（安定化）作業を継続しているとか。静岡県内の博物館同士でも助け合える関係があると安心です。そのためには日常的な連携がいざというとき役に立ちそう。静博協は、もともとは当時、若手の学芸員同士が集まって情報交換のために設立されたと聞きました。

手：静博協の講習会などを通じて他館の方と多少なりとお互いを知っているということは、役立つように思います。

椿：大地震が来て海側に津波の被害が出たときに、どこがどれだけ被災していて、どんなレスキューが必要か、県内ですぐに把握できるような連絡体制が重要です。そのためには日常的に気楽に連絡できるような、顔と名前

が見えている関係を築いておきたいですね。

**博物館同士や地域との連携について**

早：三保や有度丘陵地域での博物館同士、あるいは地域との連携で取り組まれていることはありますか。

手：以前、当時の東海大学自然史博物館と久能山東照宮とで協力して、久能山にお参りした後に、有度丘陵の地層を見に行く企画がありました。化石も掘って、博物館でそれをクリーニングしレクチャーを聞いてという地域連携となりました。

貴：そこに植物や美術、港の歴史もからめて、静岡まるごと楽しむツアーとか楽しそうですね。夏休みの自由研究でも使えそう。大人向けに仕立てて旅行会社を誘致しても良いかも。

椿：三保をテーマに歴史、民俗、文学、美術など多分野の学芸員が集まって展示をやりたいという話が出たこともありますね。

手：東海大学付属静岡翔洋小学校とは、顕微鏡を持って行ってプランクトンを見たり、安倍川の上流を一緒に訪ねて三保半島との関係を学んだりして連携しています。

貴：最近はSTEAM教育なども盛んですし、一つのテーマに多分野からアプローチするのは学びを深めることにもつながるそうです。アウトリーチ連携の可能性も。

早：地域の魅力を発掘することにもつながるし、美術館・博物館をつなぐ周遊性も出て来て面白そうですね。

**静岡県博物館協会に期待すること**

早：単独館では難しいことに力を発揮してほしいです。せっかく面白いことをやっていても上手く広報できていない館も多いので、広報の勉強会を開くとか。ノウハウを共有する場を設けて、かつ、小規模館などで苦労している学芸員の声を拾うようなことをしてもらえれば。

貴：もう少し気軽に集まれる場があると良いですよね。いま事業推進グループでも研究会の計画がありますが、双方向で議論できるような場を増やすなど。

椿：以前実施した、資料の撮影など分野を越えて必要なテクニックの講習もあると助かります。

---

本インタビューの詳細は、後日、静岡県博物館協会ウェブサイト「しずはく.net」にて、加盟館園向けに公開します。館園同士の交流を活発化するため、今後も相互インタビューは継続される予定です。訪ねてみたいミュージアム、学芸員などのアイディアがありましたら、加盟館園の皆さまからも是非、インタビュー企画をお寄せください。

# 2022年度第2回講習会
# 博物館の防災を考える　歴史資料編
# ～「しずおか史料ネット」の設立に向けて～（報告）

沼津市明治史料館（静岡県博物館協会事業推進グループ）　木口亮

日　時：令和5年3月19日（日）
会　場：静岡市歴史博物館　講座室
対　象：静岡県博物館協会加盟館園の関係者及び一般
形　式：対面及びオンライン配信
参加者：会場30名（定員40名のところ）・オンライン20名
登壇者：田中文雄氏（静岡平和資料センター　センター長）
　　河合修氏（静岡県スポーツ・文化観光部
　　文化財課　課長代理）
　　奥村弘氏（神戸大学理事・副学長・
　　歴史資料ネットワーク代表委員）
　　（登壇順）
司　会：木口亮（沼津市明治史料館　主査（学））
共　催：静岡市歴史博物館
次第
13:00　受付開始
13:30　開会
13:30～14:00　田中文雄氏　報告「令和4年9月水害による水損資料のレスキュー活動」
14:00～14:30　河合修氏　「静岡県文化財等救済ネットワークの現在」
14:40～15:30　奥村弘氏　「史料ネットの30年－災害時の歴史文化資料保全活動の全国的展開－」
15:30～16:00　質疑応答
16:00　閉会

■主旨

令和4年9月、台風15号の接近にともなう大雨で、静岡市清水区の大規模な断水など県内の広い範囲で大規模な水害が発生し、あまり報道されなかったが貴重な文化財も被災してしまった。「東海地震」説に基づいて様々な災害対策を講じてきた災害対策先進県である静岡県だが、これら被災資料の救出に当たっているのは、個々の団体や有志であり、組織的な支援は必ずしも行き届いていない。

全国に目を向けてみると、被災した歴史資料のレスキューや、予防などの活動を行なう「史料ネット」という組織がある。阪神・淡路大震災を契機として近畿地方で結成された「歴史資料ネットワーク」をはじめとして、以後各地で組織が立ち上がり、東日本大震災や近年頻発する豪雨災害などにおいて被災した資料のレスキューや修復作業などにおいて相互協力などしている。そしてひるがえってみれば、当県内は具体的な救援活動や、その前提となる資料の悉皆調査を行うような体制が不十分である。

本講習会は将来的な「しずおか史料ネット」の設立に向けて、他地域の史料ネットの設立の経緯や活動の実際を学ぶ機会としたい。

■報告「令和4年9月水害による水損資料のレスキュー活動」

話者　田中文雄氏（静岡平和資料センター　センター長）

静岡平和資料センター及び同センターを運営するNPO法人静岡平和資料館をつくる会の経緯について説明の後、令和4年（2022）9月24日の静岡豪雨災害による被災および資料レスキューの状況について、具体的な報告があった。

同会が静岡市南部図書館（静岡市駿河区南八幡町所在）の地下室に所蔵資料の一部を預けていたところ、9月24日、部屋内の床上60センチまで浸水し、棚の下2段が水没した。図書館々長から浸水についての連絡があり、田中氏が同日午後に現場に行った時には既に水は引いていた。同図書館は約20年前に浸水したことがあるが、その後対策されていたとのことで安心していたが、被災してしまった。（※豪雨時に浸水防止板を設置するようになっていたが、この時には措置されなかったという情報もある）

翌々日からセンターのスタッフらがレスキュー活動に入る。廃棄するものとレスキューするものに選別。センターの出版物、雑誌類（日露戦争以降戦中のもの等も含む）、展示に使用したパネル類などは廃棄。鉄のカバンや布製行李、スクラップブック、クリアファイル入り、手帳、写真、本などをレスキューした。

24日にあった県博協からの被災状況伺いには当初返信せず、状況を把握してから返信しようとしたため、28日になって県博協に報告した。29日、県博協事務局の新田氏が現場視察。冷凍庫とビニール袋による資料の現状維持、作業場所の確保をアドバイス。

10月3日、県博協からコンテナ6個を借り、水損した資料をビニール袋に詰める。4日、NPO文化財を守る会（県博協賛助会員）の友田氏が視察。水損資料の一時保管、作業に必要な資材・人員の協力を申し出る。5日、コンテナ4箱（ビニール袋68ケ）を守る会の冷凍庫に入れる。15日、守る会の修復場で守る会、センタースタッフら13人が友田氏の指導の下、ビニール袋3袋の乾燥作業を実施。

①解凍②選別③ナンバリング④写真撮影⑤資料を本体から外す⑥水洗⑦水分除去⑧エタノール噴霧⑨乾燥

21日、立花氏（西蔵寺住職、県博協賛助会員、守る会々員）より作業場所の提供、冷凍庫の寄付の申し出を受ける。

11月19日、田中氏、友田氏、立花氏とセンタースタッフら8人で今後の作業手順について打ち合わせ、確認。12月5日、静博協で同センター救済のための臨時予算90,000円の採択決定。この後、道具をそろえる、ボランティアを募る、ボランティア保険の契約などして体制を整える。

2月26日　西蔵寺で第1回目の乾燥作業を実施。参加者はセンター員9人、守る会7人、県立中央図書館7人、計23人。

乾燥作業は今後本格的に進め、月に1～2回、約1年間進める計画である。

■「静岡県文化財等救済ネットワークの現在」

話者　河合修氏（静岡県スポーツ・文化観光部文化財課）

【静岡県の文化財防災体制】

静岡県の文化財行政を所管する文化財課は以前は教育委員会にあったが、文化財法改正（平成31年4月1日施行）にともない、知事部局のスポーツ文化観光部となった。静岡県では令和元年度に「静岡県文化財保存活用大綱」を作った。今後、各市町が「大綱」を元に「地域計画」を作っていくなかで、文化財が棄損されない形を目指していくことになる。

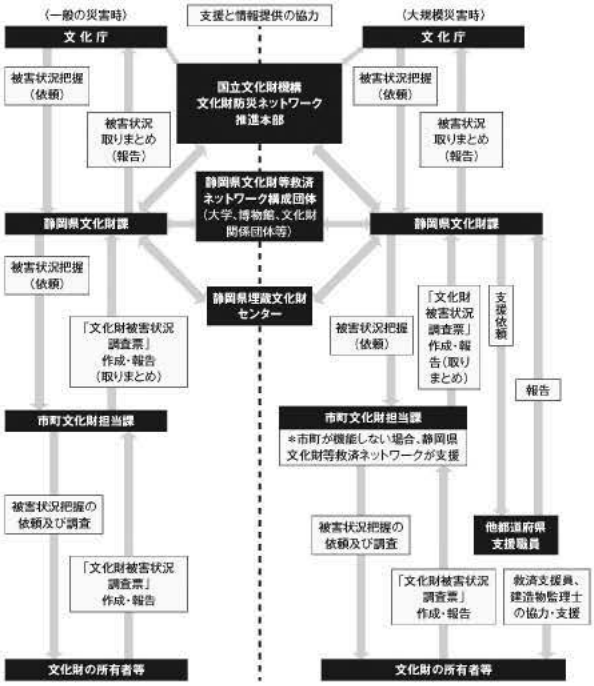
この「大綱」の中に第5章として「防災・災害発生時の対応」を定めている。この中で、国や県の指定文化財については、例えば震度5強の地震（静岡地震（平成21年））で崩れた駿府城の石垣を元通りに組みなおして修復するなど、原状通りに復旧するという方向性で取り組んでいる。

【静岡県文化財等救済ネットワーク】

静岡県では、平成24年3月に「静岡県文化財等救済ネットワーク」を立ち上げた。大学研究室、博物館関係団体、NPO、各種学会、関係業者、自治体の文化財所管課でネットワークを組織。「大綱」では「定期的に情報共有会議を開催している」とあるが、近年は新型コロナウィルスの蔓延で開催できていない状況である。コロナの取り扱いが変わるので会議を再開し、休止中にも判明してきた問題点などを共有していきたいと考えている。

ネットワークの目的は、発災したときの県内文化財の被災状況の情報収集、レスキューをしてもらいたいというところにある。この点については、「大綱」において「災害時の文化財の被害状況把握のフローチャート」として一般災害と大規模災害の各々について定めてあるが、ネットワークの問題点として、ネットワークを動かす鍵になっている県文化財課に情報が集まってこないと発動できない、あるいは、想定外の災害が起きた時には県文化財課が動けず、やはり発動できないということがわかってきた。

その他、文化財等救済支援員・静岡県文化財建造物監理士などの制度を創設し、発災時の人材の確保に努めているが、参加者の高齢化もあり、新たな人材の獲得などの課題がある。




図「災害時の文化財の被害状況把握のフローチャート」
『静岡県文化財保存活用大綱』P.46

【実際の災害に際して（令和4年台風15号豪雨災害、令和3年熱海伊豆山土石流など）】

ここまで見てきたように国・県の指定文化財についてはフローチャートができており、被災した場合は情報が入るが、未指定の文化財については把握が難しいこともわかってきた。

例えば、先ほど報告があった昨年9月の台風15号豪雨災害における南部図書館の事例については、発災後しばらく経ってから人づてに聞いたものだった。また、ある山間部の市町では指定文化財ではないが自治体史を作るときに整理した古文書類が土砂に飲まれてしまったが、この情報が県に入ったのは12月になってからのことだった。こういったところをフォローしていけば、その地域の歴史が失われないで済むが、そうでなければ地域の歴史が抜け落ちてしまうことになりかねない、県ももう少し気を使っていったほうがいいだろうと個人的に考えている。

フローチャートの右側が大規模災害の想定だが、この中で市町が機能しない場合が入っているが、令和3年の熱海の土石流災害の場合がこれにあたり、1か月半後に県文化財課が調査に入ったが、市の文化財所管課が他に手を取られて昨日できない。こういう場合に県が前に出なければならないし、文化財等救済ネットワークが支援することを目標にしている。

国の文化財防災センターとも連携を図っており、大規模災害が発生して多くの資料をレスキューしなければならない状況になったら、国が乗り込んできてくれるというのが最終的なバックアップとして用意されている。

災害はいろいろな状況を生むので、必ずしもシミュレーション通りになるものではなく、フローチャートに縛られると救えるものも救えなくなってしまう。日々、各個人が情報を集めてシミュレーションをし続けることが大事だと認識している。

大規模レスキューが発生した際には活動する。ぜひ暖かく見守っていただきたい。

■「史料ネットの30年－災害時の歴史文化資料保全活動の全国的展開－」

講師　奥村弘氏（神戸大学理事・副学長・歴史資料ネットワーク代表委員）

【はじめに】

1995年1月の阪神・淡路大震災をきっかけに地域の歴史文化資料の保全や活用について携わるようになり、関西の歴史学会、学芸員、図書館員、学生、一般の方など様々な歴史文化にかかわる人たちが活動するようになった。その後、地震、水害などの大規模災害が多発し、その都度被災した地域で史料ネットが設立されてきた。

災害に備えるうえで大事なことは、災害時にできることを具体的にイメージすることであろうと考えている。災害における局面は多様であるので、対応も様々なものが求められる。30年近くやってきているけれども、体系的に議論できるほどに経験知がまだまだ積み重ねられていないので、学びながら柔軟に考え、とりあえずやってみるということが大事。また、多くの歴史文化関係者（一般の歴史ファンも含む）にかかわってもらえるような活動形態を考えてくこと。これらが大事なことであろうと考えている。

現代は、人口減と高齢化を原因として地域の社会と文化の解体の危機が拡大しており、そこにくわえて大規模災害により歴史文化遺産が物理的に失われることは、地域社会の記憶を歴史として引き継ぐ文化の消滅の危機である。人口減少と高齢化　文化を維持していく素地が失われている。この状況で地震や水害が起こると、それまでの蓄積を一気に押し流してしまう。

・重層的な地域社会と地域歴史資料の関係

大規模な合併をした自治体における周辺地域の対応が困難になっている。地域社会の中にその地域の近世・近代初頭の歴史資料は概算で20億点以上（アジアでこれだけ地域資料が残っているのは日本だけ）。

災害が起きると、歴史資料が物理的に滅失し、またその歴史資料を支える人々の結合（コミュニティ）が弱体化してしまうこともある。また、「復興」からの歴史が始まってしまったり、災害美談が地域の歴史の全体として語られていく（歴史の徳目化）、というような過去を切り離してしまうことも起こりやすい。これらを防ぐためにも、地域の歴史を伝える資料をできる限り救済して「丸ごと残して」いく必要がある。また、どのような災害であったのかを語るような資料も残していく必要もある。

このような地域の記憶を歴史として引き継ぐ課題を明確化するために、地域住民自身が参加する手法と、それを可能とする新たな学術的方法として地域資料学を構築し、市民といっしょに地域歴史遺産を守るような社会にしていきたい、というようなことを考えている。

【歴史資料ネットワークの歴史資料保全の活動から】

第1期　1995年2月～4月　「分限」を超えて
　　歴史資料保全情報ネットワークの成立　歴史関係団体の関係強化

第2期　1995年4月～1996年3月　地域とともに
　　巡回調査、市民講座、震災資料への取り組み等開始

第3期　1996年4月～2002年5月　長期化への対応
　　歴史資料ネットワークと改称、目的活動の明確化

第4期　2002年5月～2004年6月　恒常化
　　市民と歴史学会による組織　個人会員、サポーター制導入

第5期　2004年6月～2011年　大規模水害時の保全活動開始

第6期　事務局長等の中心メンバー世代交代
　　2011年～　現在　東日本大震災対応　広域連携の展開

「地域の歴史と記憶を未来に」ということで、当初は1年くらいがんばろうと始めたのが、今も続いている。1995年当時の特色で、「分限」を超えて＝それぞれの職種の人が自分の領域だけでは被災地対応ができないから、それを超えて協力してやっていこうということが、様々な領域で議論されていた。歴史文化の中では何ができるか、というところで遺産とか資料の保存くらいはできるだろうというところから始まった。

【地域の人と一緒に活動していくことの大切さ】

宝塚市での古文書教室は、当初はレスキューした古文書を読んでみようということで始まったのが、現在も「宝塚古文書を読む会」として続いている。

大規模災害後に復旧・復興していくときに、自分たちの町がどうだったのかを知りたいという欲求が出てくる。「守る」と同時に「知る」ことで次の復旧・復興にも大きな影響をもつことが多い。

2004年秋の兵庫県大水害で初めて水害に遭った資料の保全に取り組むことになった。水害が起こるのは暑い時が多く、カビが生えたり、また泥除けボランティアの人たちがすぐ入るなど急激に資料状況が悪化するという状況を経験することになった。

宮城史料ネットは、2003年宮城県北部連続地震に際して結成された団体で東日本大震災でもレスキュー活動をおこなった。これは災害が起こったので作ったパターンだが、東日本大震災を契機に作られたパターン、大学に拠点がある場合とそうでない場合などいろいろな形がある。それぞれの実情に応じた形があるのであろう。

【なにを対象とするのか】

被災地で文化遺産の保全に当たる場合、何を文化遺産と考え、なぜそれを保全しようとするのか、このことがこれまでの大規模自然災害でも、今後の震災でも問われ続けている。阪神・淡路大震災時の活動の中で私たちは、地域の風景が失われても地域の記憶を失わず、それを次世代に引き継いでいくことこそ歴史資料保全活動の目的であるとして、被災した歴史資料の保全を図った。地域に生きる人々にとって歴史資料は重要な意味をもつものであり、したがってこれを保存するという考え方は、それ以降も継続。私たちはそれを地域歴史遺産（地域文化遺産）と表現するようになった。

「被災した歴史資料」と「災害資料」の双方を対象としていく。家族の写真など個人の記憶にかかわるものも重要な文化遺産と考えていくようになってきた（阪神淡路のときには保存の対象となっていなかった）。また、石巻市の本間家土蔵は、さほど古いものではないが、津波に耐えて残ったことから地元で保存運動が起こった。

このように地域の人々が意識的に残し、引き継がれていくものが地域歴史遺産なのではないかと考えはじめている。これについては国でも考え始めており、2004年7月、内閣府「災害から文化遺産と地域をまもる検討員会」という、文化遺産が大事にされていて、住民が活発なところは災害にも強い、という発想のもとに開かれ、文化遺産とは世界遺産、国宝などに限定する必要はなく、未指定の文化遺産も含めて地域の核となるようなものとした。

【どの時点から地域文化遺産保全を進めるのか】

レスキューのプロセスとしては以下の流れとなる。

被災状況把握→救出→一時保存→安定化（一次処理）→修復→保存活用

1. 被災地の多様性
2. 歴史関係者と住民の信頼関係　予断を排す（大変だろうから…はやめる）

3. 人命救助と被災者の生命維持の活動の収束
4. 周辺分からの活動の重要性　盗難
5. 自治体関係者　地域防災計画の記述
6. 事前の関係者協議　一時保存場所と資金・人

被災地に入るタイミングは、人命救助と被災者の生命維持がひと段落してから、1週間経ったくらいで行ってみたほうがいい。どのような信頼関係があるかにもよるが、発災後1週間経過して入ったときに、なんで来たんだ、といわれるようなことはほとんどなかった。言われたら謝って帰ってくればいい。

自治体職員は人命救助、復旧に全員があたることが、地域防災計画に位置付けられている。熊本地震では、1人しかいない学芸員が半年間復旧に割かれて、文化財救援ができなかったという。兵庫県では、史料ネットと県文化財課が協力して、市町で文化財関係の講習を開き、市町の防災担当課職員を呼んで、文化財防災というものがあるんだということを知ってもらう、ということをやった。地域防災計画に文化財防災を書き込んでもらう。

また、必ず外から盗難する人が入る。これは表に出ていないことが多い。

一時保存場所を確保できるかどうかが大事。博物館などで事前に準備するようなところもでてきている。2018年7月豪雨の際の愛媛資料ネットワークの事例としては、芸予地震以来の自治体、歴史団体の関係ができていたこともあり、とりあえず漁協の冷凍庫を確保できた。

【災害時の活動の前提としての日常活動】
・相互に知り合っておくことの重要性
・具体的イメージ形成　災害時の活動や保全活動　ワークショップへ参加してみる
・地域歴史文化の継承　災害の記憶だけが引き継がれることはない。日常的な地域文化遺産の把握とその共有。このプロセスを大事にしてほしい

【被災地再建における歴史文化関係者の重要性】
・被災地の歴史関係者の生存を確保し、未来に歴史をつないでいくための活動
・被災地域社会の過去と大震災の現在の記憶を未来につなぐ地域歴史遺産を保全していく活動

【大規模自然災害において文化遺産の果たす「力」】
・大規模自然災害からの復興をデザインする力
・地域の共同性を象徴し、被災者を励ます力
・地域の共同性の基礎となり、被災者や支援者を結びつける力
・大規模災害の記憶を継承し、災害に強い文化を創出する力

いろいろな意見が出て、試行錯誤を繰り返しながら未来に進んでいけたらいいなと考えている。だいたい8割くらいは失敗していて、2割くらい成功したら大成功くらいの感じで、みんなで未来を考えていけたらいいなと考えている。

奥村氏が最も伝えたかったことは、「相互に知り合っておくことの重要性」であろう。すなわち「飲み会をしとけば大丈夫」説である。社会の有り様も変わり、そこに加えてのコロナ禍もあったが、奥村氏の教えを静岡県でも実践し、地震対策だ けではなく文化財防災においても先進的であることを目指したい。

【講演会で示されたこの問題に関する参考文献】

奥村弘『大震災と歴史資料保存 －阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』吉川弘文館　2012年
歴史資料ネットワーク編『歴史の中の神戸と平家』神戸新聞総合出版センター　1999年
動産文化財救出マニュアル編集委員会編『動産文化財救出マニュアル』クバプロ　2012年
歴史学研究会編『震災・核災害の時代と歴史学』青木書店　2012年
奥村弘編『歴史文化を大災害から守る　地域歴史資料学の構築』東京大学出版会　2013年
奥村弘他編『地域歴史遺産と現代社会』神戸大学出版会　2018年
天野真志・後藤真『地域歴史文化継承ガイドブック　付全国資料ネット騒乱』文学通信 2022年3月　PDF/EPUB無料配布

注

注1：日本古典全集　朝日新聞社　一九五一年

注2：同注1

注3：『中世日記紀行集』新日本古典文学大系　岩波書店　一九九〇年

注4：『群書類従』巻第三三一　紀行部六　第十八号　續群書類従完成会　一九二八年

注5：『續群書類従』三三一号下　続群書類従完成会　一九五七年

注6：『續群書類従』三三一号下　続群書類従完成会　一九五七年

注7：慶龍寺の「十団子由来 駿河国宇津谷延命地蔵尊略縁起」

注8：なお、慶龍寺の石製延命地蔵は峠の中腹にあった地蔵堂に安置されていたが、明治時代の廃堂に伴い、同寺に移されたと伝えられる。

注9：野本寛一「峠の信仰と文学」―古代駿河編―『地方紙静岡』四　一九七四年

注10：日本古典文学大系　岩波書店　一九五八年

注11：『駿河記』上巻　六七〇ページ　足立鍬太郎校定　一九三二年

注12：『駿河国新風土記』下巻　九六七ページ　国書刊行会　一九七五年

注13：『藤枝市史』資料編2古代・中世　№一四四　藤枝市史編さん委員会　二〇〇三年

注14：『静岡県史』資料編4　№九一八　一九八九年

注15：『藤枝市史』資料編2古代・中世　№一九〇

注16：『駿河記』巻十九、桑原藤泰著　六七三ページ　一九三二年

注17：この仏像は岸和田藩主岡部氏の子孫の岡部長職が明治時代に岸和田市へ移した

注18：藤枝市岡部町若宮八幡宮例祭資料

注19：『藤枝市史』資料編2　№二四

注20：『藤枝市史』資料編2　№三九

注21：『静岡県史』資料編6　№五五　一九九二年

注22：『静岡県史』資料編5　№六九四　一九九四年

注23：『藤枝市史』資料編2　№三五七

注24：『駿河記』　六七〇ページ　一九三二年

注25：『西行物語』敬文堂　一八九五年

注26：加えて、実際には西住は岡部を終焉の地とはしていない。四国の旅の後に往生を遂げており、西行は高野山を下って臨終をみとり、遺骨を高野山まで運んだ。

注27：『岡部町史』一九七〇年による

注28：加えるに、岡部郷と宇都谷郷の領主岡部氏は岡部御厨の荘官であり、ハレとケを司る神官といったマジカルな側面をもっていたと考えられる。それ故、伊勢神宮の荘園たる岡部御厨の経営に関わることができたのではないだろうか。なお、鎌倉時代の前半から駿河国は執権北条氏領となった。本稿では詳細を記さなかったが、御家人の岡部氏は頼朝の旗上げの時からの恩顧の御家人であったことが災いしたのだろうか、頼朝の死去とともに文献に記されることも少なくなり、没落していったかのようである。その後、駿河国は鎌倉幕府を主導する北条得宗家が守護となり岡部氏の岡部郷・内都谷郷も北条得宗家に浸食されていった。後に国衙領のひとつとなった宇都谷郷の預所が鎌倉の将軍持仏堂の供僧たちの代官であった事はこの間の消息を示すものである。岡部氏の経済的基盤となっていた岡部郷と宇都谷郷は鎌倉幕府の強固な管理の下に置かれることになっていったのであろう。この後、南北長期を経過し、今川氏の家臣として岡部氏が登場するまで、その動向は判然としない。記されなかったことが岡部氏の立場を示していたといえよう。

失せ侍りしを、犬の食ひ乱たして侍りき、かばねは近きあたりに侍るらん、といひければ尋るに見えさりければ、

笠はあれどその身は如何になりぬらん
あはれはかなきあめの下かな（注25）

『西行物語』の中では「笠懸けの松」は出てこない。御堂に笠が架けられ、西住が息を引き取った場所と記すのみである。（注26）ところが、岡部周辺では「我不愛身命但惜無上道」と書かれた笠が松に掛けられていた、と伝えてきた。それ故、岡部宿の傍らに「西住笠懸けの松」が伝承されてきたのである。

それはどうしてだろうか？

江戸時代の地誌を根拠として編纂された『志太郡誌』には、西行・西住の伝説を次のように記し、現代へも伝えている。

〔西住法師の墓〕　町の西方、西行山の中腹、字新地ヶ段に破塔あり、これ西住法師の古墳なり。西住は、武衛校尉佐藤憲清の家臣なり。保延三年八月、憲清世絆を脱して、総門の人となり、名を西行と改むるや、主とともに僧となり、主従東遊す。既にして佐夜を過ぎ、堰川を渡り跋歩漸く遠く、羸蹇の余り、西住病を得、岡部に至り遂に不帰の客となる。実に保延三年九月二十八なり。里人之を葬り墳を築き、碑を建て、其處を識す。西行、西住に訣る、和歌、乃寂然の弔詠等載せて千載集にあり。（中略）

〔笠懸松〕　西へ行く雨夜の月やあみだ笠影を岡部の松にのこして

後西行東奥に適くに乃て、再び此の地を経、其の跡を踏み、悲悼して止まず、追憶の什あり、曰く、

笠はありて身のいかにしてなかるらん哀はれはかなきあめが下とは（注27）

少し話しが長くなってしまったが、『西行物語』の成立は十三世紀中頃と推測されている。ところが、「関東下知状」にあるように建長元年（一二四九）には岡部宿は岡部郷から宇都谷郷へ移っていた。微妙な時期ではあるが、この宿場の移動と『西行物語』の成立のどちらが先か興味をそそられてしまう。岡部郷内で岡部宿があった場所の周囲を見渡すと、宿場推定地の北側に若宮八幡宮があり、現在もこの周辺を「松山」と呼んでいる。筆者は、この「松山」が「笠懸けの松」の本来の場所ではないかと考えている。

岡部宿では西住の終焉地を「笠懸の松」の伝承とともに記憶させた。そのため、岡部宿が移動する度に「笠懸の松」も移っていくこととなった。つまり、岡部宿と松の結びつきの強さを〝西行と西住の笠懸の松〟に仮託して伝承したのではないのだろうか。少なくとも、これにより岡部宿と松は永く繋がり続けることになったのである。

□ハレからケへ

西行と岡部宿について紐解いていくと、岡部宿に「松」のイメージがついていたのではないかと推測された。「松」は「高砂」に描かれ、詠われるように若さや不老長寿を意味する常緑の植物である。またハレの植物でもある。先に観てきたように「宇津の山」のイメージは、無、虚（うつ）、であり、それらから導き出された―遁世の地、鬼、妖怪、強盗、人殺しが出没する怖い場所―と捉えられており、マイナスのイメージが付いていた。それゆえ、冬に枯れてしまう蔦や楓が宇津の山の象徴となっていた。一方の岡部は松に例えられるように、永久、不変、などプラスのイメージが付いている。『伊勢物語』の作者はそれを意識していたのだろう。

□ふたたび、伊勢物語の東下りへ、　峠と再生について

現在、蔦の細道（図1のA路）はハイキングコースとなり、健脚ならば30～40分で登り降りすることができる。B路を廻っても3時間かからずに戻ることができる。実際には宇津ノ谷峠は難所というべき場所ではない。ところが、宇津ノ谷峠を難所と呼ぶべき理由があったのである。『伊勢物語』の中で、罪を背負った在原業平はケの世界である宇津の山を越えることにより再生し、新たな業平になって坂東への旅を続けていかなければならなかった。つまり平安時代の宇津の山は禊（みそぎ）の場ともみなされていたのであり、ここを越えるにはそれまでの俗縁を絶ち切らなければならなかったのであろう。それ故、業平は峠に入る前に都に残してきた人に別れの歌を詠んだのである。『伊勢物語』の作者は在原業平が再生するための場所として、あえて宇津の山に峠道を求めたと考えられよう。

長々と書いてしまったが、〝蔦の細道図〟は、在原業平が山道に入る前に歌を詠む、というのが本来の構図であり、蔦の細道で修行者と出会う構図を描くことは『伊勢物語』作者の主旨とは異なっている、ということである（注28）。

□『西行物語』と岡部の松

さて、岡部宿の旧地が判明したところで、話しを進めたい。

岡部に関わる文献を通覧していくと、岡部には〝松〟が似合うとかねてから感じていた。これは岡部を題にした和歌に「松」を詠み込んだ作が多いことの印象によっている。気がつくものを挙げれば次のような歌がある。

『東関紀行』

前嶋宿を立ちて、岡辺の今宿うち過ぐるほどに、片山の松の陰に立寄て、かれいゐなど取出たるに、風冷じく、梢にひゞきわたりて、夏のまゝなる旅衣、うすき袂もさむくおぼゆ。

これぞこのたのむ木のもと岡べなる松のあらしよ心して吹け

止駄郡岡部駅にあり、長明道の記云。かた山の松の陰に立よりて

身のうさのまたともしなきたぐひかな岡べの里の松の一もと

中務卿親王

かへりくる程はなけれど朝露のをかべのまくづうら枯れにけり

前大納言 為家

冬日さすけしきも淋し松たてる岡部の里は山陰にして

参議 為相（注24）

調べれば他にも出てくるであろうが、実は岡部には松で知られた歌枕がある。江戸時代の岡部宿の本陣にほど近く、宿の北側の山麓に「西住笠懸けの松」という名所がある。先代の松は一九六〇年代に枯死してしまったが、現在はその傍らにあった小株が「西住笠懸けの松」とされており、その根元には西住の墓塔と伝えられる宝篋印塔の部材が転がっている。西住は鎌倉時代の歌僧の西行の兄弟子にあたり、岡部地域では西住が息を引き取ったと伝えられる場所を「笠懸けの松」の伝説とともに大切に受け継いできている。西住の最後は『西行物語』に語られているが、岡部宿と西行物語の関係は巷の知るところであったらしく、享保十一年（一七二六）に江戸の柑本兵五郎（南浦）が西行山最林寺に寄進した西行像が岡部宿東側の浄土宗西行山西林寺の観音堂に安置されていた。ところが、近代になって西林寺が廃寺となったため、現在は近隣の専称寺で保管している。

鎌倉時代中ごろに成立したとされる西行物語のなかで、岡部宿を舞台とした西住の最後が描かれている。同行の西住とともに坂東を旅していた西行は遠江国天竜川の渡しで人員超過となった渡し舟から降りろと、ある武士に打ち据えられた。この仕打ちに力で対抗した西住を仏の道に背くこととして西行は戒め、その後の同行を許さず、独りで東へと旅を続けた。そして、旅の途中で再び西行は駿河の岡部宿に着くと、

只一人、あらしの風の身にしみて、うき事いとと大井川、紫海の波をわけ、涙も露もあきまさる、黒髪の袖しほりもあへす行く程に、駿河国、岡部の駅といふ所につきて、荒れたる御堂に立ち寄り、やすみて居たりけるに、何となく後の方を見やりたりけるに、古き日笠かけあるを、あやしと見るに、過にし春の頃、都にて、互に先たてば、環来穢国、最初引攝のちきりを結びし、同行の東の方へ修行にいでし時、あながちに、分れをかなしみしかは、これをかたみにとて我不愛身命但惜無上道とかきたりし笠はありながら、主はみえざりければ、おくれ先だつ習らひ、早やもとの雫となりけるやらん、とあはれに覚えて、涙をおさへて、宿のものに問ひければ、京より此春修行者の下りて、ありしが、此御堂にて疾病をして、

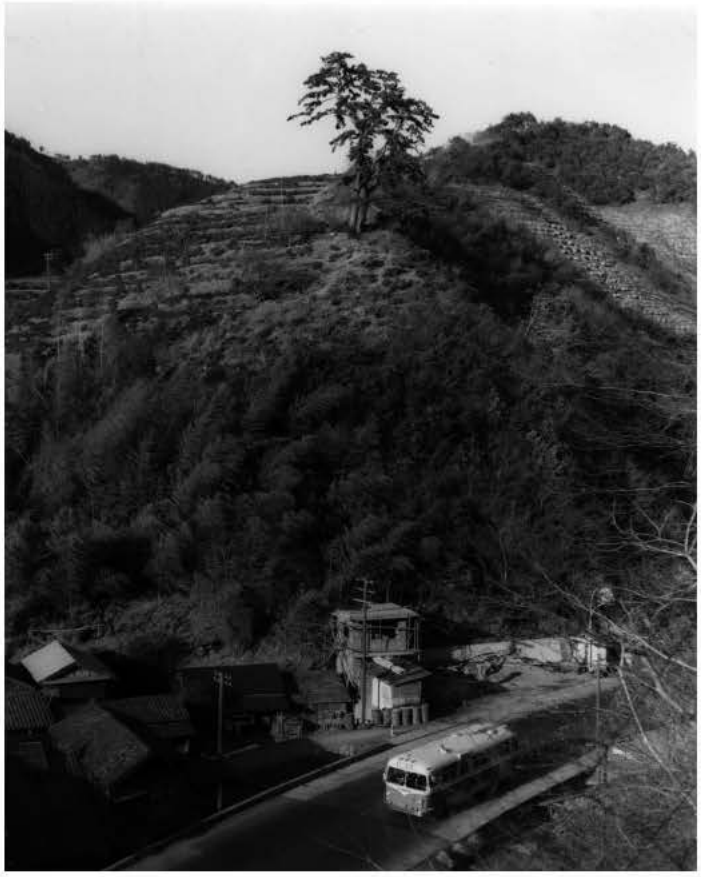


図16　西住笠懸けの松（1960年代）／藤枝市提供

には岡部宿は岡部郷ではなく宇都谷郷の中にあり、加えて、「今宿」と呼ばれていた。また、宇都谷郷については建武元年（一三三四）の「雑訴決断所牒」に「内谷郷」と表記されており（注21）、続いて元亨二年（一三二二）の親玄譲状案には「駿河国内谷郷内宿分」と記されているため、今宿は内谷郷内にあったこと、宇都谷郷＝内谷郷であることを裏付けている（注22）。岡部郷についていえば、永禄八年（一五六五）に発給された藤枝市高田の常楽院所蔵の今川氏真の文書に「岡部郷常楽院領」として「村良」が載っている（注23）。常楽院の寺史によれば、寺の旧地は子持坂の字常楽であることから、岡部氏の発祥地の仮宿を含めて、朝比奈川流域のうち平野部に近い朝比奈川中流域部分が岡部郷であったと考えられる。加えて、若宮八幡宮の天正八年（一五八〇）の修造棟札によれば、岡部七郷として、岡部本村・内谷・仮宿・横内・高田・村良・兎島が挙げられており、朝比奈川中流域周辺部が岡部郷という考えを後押ししている（図12・15参照）。なお、九月十五日を中心に挙行される若宮八幡宮の祭礼の記録をみると、若宮八幡宮（図15①）を出立した神輿は岡部宿本陣裏の御旅所（同②）で一泊し、もてなしを受けた後、翌日に若宮八幡宮へと還っていく。これは、若宮八幡宮の氏子である岡部宿の住人が仮宿地域から内谷地域へ移り、新たに岡部今宿を形成したため、氏神の若宮八幡宮の神輿が新設された岡部宿へ渡御したのであろう（図15）。加えて、内谷地区の本郷の立石神社（図15③）の祭礼においても、神輿は内谷新町と呼ばれる江戸時代の岡部宿加宿内谷村の御旅所（同④）で歓迎を受けて翌日、立石神社へと還っていく。今でも加宿内谷村地域の住民は立石神社の氏子となっていて、岡部宿と同様に、加宿内谷村も本郷から移った人々により構成されていたことを物語っている。『駿河記』をみると「内谷」の項目は「本郷」と「新町」に分けられている。つまり現在の本郷は内谷郷の本郷で、『駿河記』で記す「内谷」部分であり、岡部宿加宿内谷村が内谷新町である。したがって、中世の宇都谷郷（内谷郷）は「本郷」と「新町」（加宿内谷村）、そして「宇津ノ谷峠へと続く岡部川の上流部を含めた地域」であったと考えられる。（図15）

これらのことから、岡部氏が領地とした岡部郷と宇都谷郷は朝比奈川中流域と岡部川の周辺部にあたること、そして、岡部宿は当初は岡部郷内の仮宿地域にあり、後に宇都谷郷へ移動していったと考えられる。

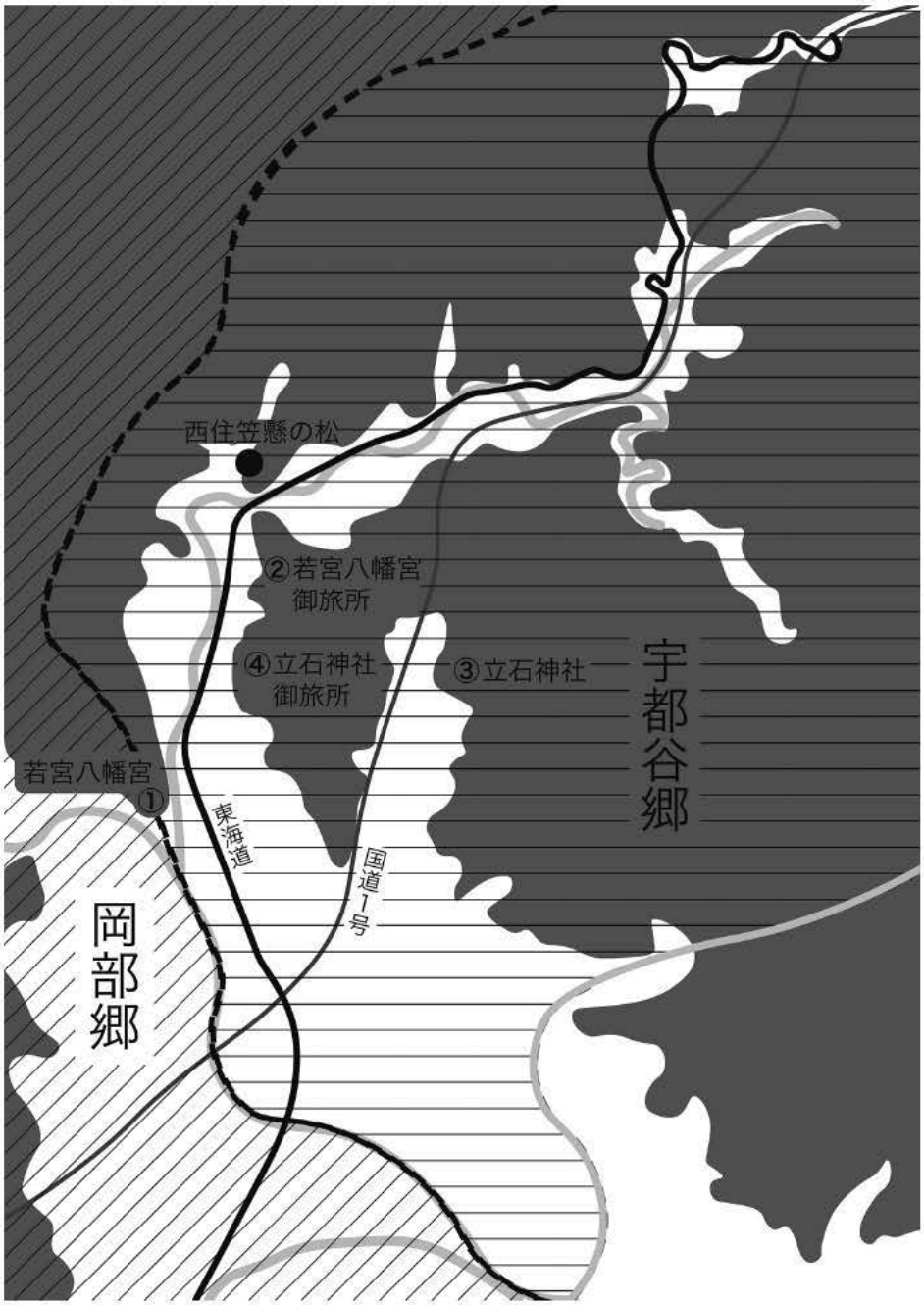



図15　岡部郷と宇都谷郷／地理院地図（国土地理院）より作成

東京国立博物館に所蔵されている。そして、館跡近くの若宮八幡宮は岡部氏が建立したと伝承され、京都の石清水八幡宮の分霊を勧請したというものの明治期の記録に「天照大神」も祭神とした、と記述されていることに注目したい（注18）。それというのも、南北朝時代の『神鳳抄』には伊勢神宮の御厨として「岡部御厨」が記されており（注19）、若宮八幡宮が合祀していた天照大神は伊勢神宮内宮の祭神であった。御厨は神に供える食物を貢納するために設置された所領のことだが、現在でも若宮八幡宮で九月十五日周辺に行われる「カミコロバシ」と「七十五膳」の神事は、御厨内から集めた供物を伊勢神宮へ納める折に、若宮八幡宮に仮納めした様子を伝えていると考えられる。特に七十五膳は氏子の村々から集めた米や稗などの穀類とともに山の幸、川の幸七十五種類を膳に載せて八幡宮本殿に納めていること、そして、「カミコロバシ」は戦前には「カメコロバシ」と呼ばれ、別名で「タイヘイ」とも呼ばれていたが、神事のなかに竹に吊るした藁の容器から液体を汲み出すしぐさを含んでいることから「瓶コロバシ」「大瓶（たいへい）」が本来の名称で、瓶に入れた酒の貢納のようすを示していると考えられよう。したがって、これらの神事は南北朝時代に伊勢神宮内宮へ食物と酒を貢納する折に、若宮八幡宮へ仮納めした過程が神事として伝わったと考えられ、その貢納に岡部氏が関わっていたと考えられよう。その証拠に、岡部氏館跡の裏に内宮権現（狼明神）が祀られていたのであり、伝説に仮託して、狼＝大神（天照大神）、もしくは狼＝オオカメ＝大瓶、として自らの出自と信仰の拠り所を伝えてきたのである。岡部氏の館跡の裏にあたる山腹に祀られた内宮権現は本来、天照大御神であり、若宮八幡宮に祀られていたものが伊勢神宮への献納がなくなったことにより、いつしか八幡宮から出てしまい、朝比奈川を渡って岡部氏館裏に勧請されてしまったのである。岡部氏の伝説の中で同氏が若宮八幡宮を祀り、狼に助けられたのは、岡部氏が伊勢神宮の御厨の貢納に関わっていたこと、つまり、おそらくは岡部氏が御厨の荘官であったことと伊勢神宮の祭神に守られていたことを伝えていたのである。

図13　カミコロバシの神事と藁の容器

## □岡部郷と宇都谷郷

それでは、史料により岡部宿の移動を追っていこう。先述の『駿国雑志』の巻十一の岡部駅の項目には、「当駅は三度変われり、始め仮宿河原にあり、中頃、八幡山の麓に移し、後今の処に移す」と記されていた。岡部宿は初め仮宿地域に置かれていたと伝えているのである。この仮宿地域は伝岡部氏館跡のある朝比奈川南側の地域である。話は鎌倉時代に遡るが、仁治三年（一二四二）に記された『東関紀行』に「まへ嶋の宿をたちて、岡部のいますくをうち過ぐるほと、かた山のまつのかけに立よりて…」と岡部宿が記されている。この当時、鎌倉時代の前半には岡部宿は旧地からすでにいますく（今宿）に移っていた（注20）。紀行文のため史料として捉えるには躊躇するところもあるが、先の建長元年（一二四九）の「関東下地状」の表題にも「久遠寿量院領駿河国宇都谷郷今宿傀儡与雑掌僧教円争論条々」とあるように、一三世紀中頃

図14　旧岡部宿周辺（手前森が若宮八幡宮、川の対岸が中世の岡部宿比定地）

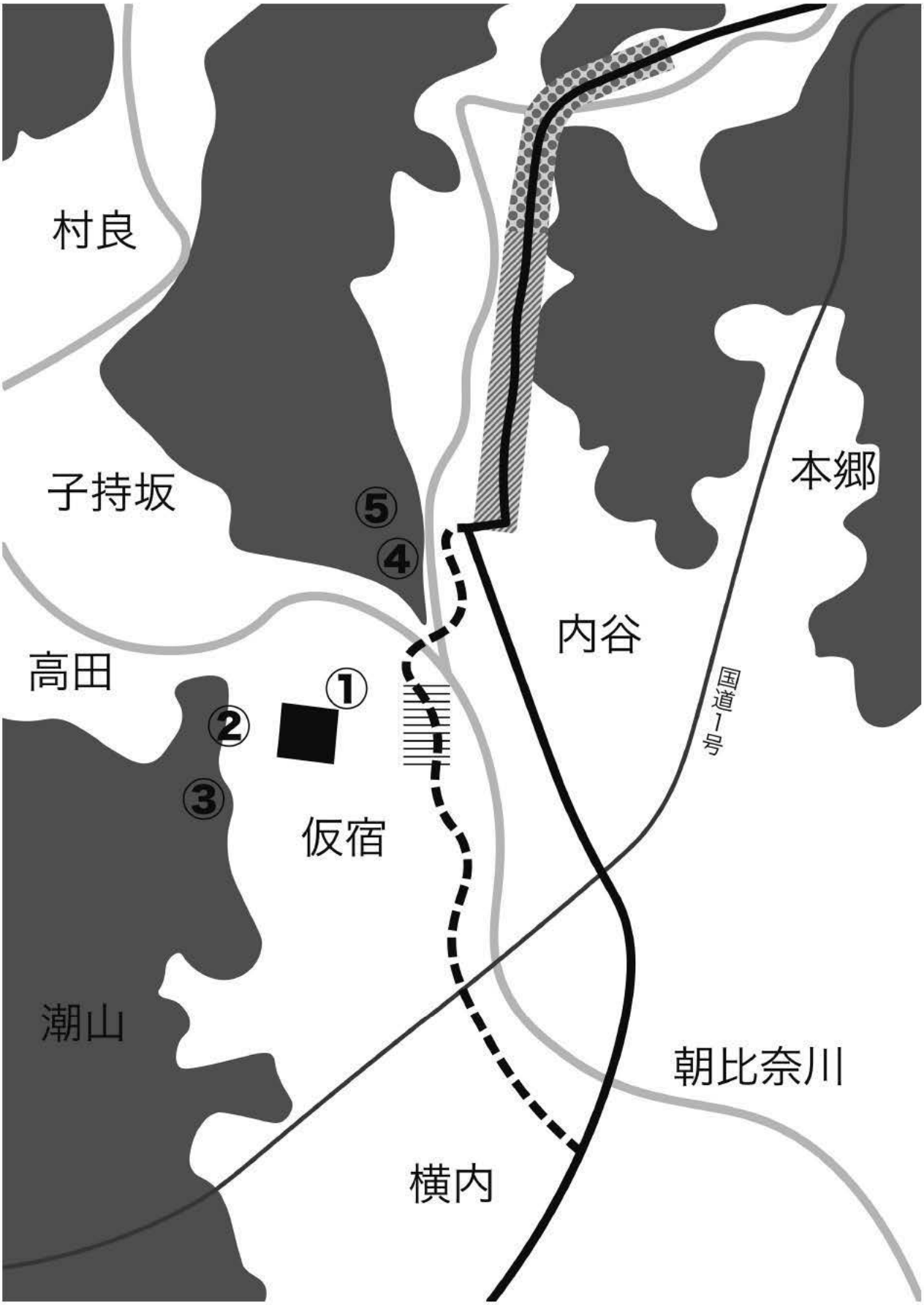



図12　岡部氏と岡部郷、宇都谷郷／地理院地図（国土地理院）より作成

加宿内谷村　岡部宿　中世の東海道　中世の岡部宿（予想）

① 押場（伝岡部氏館跡）　② 万福寺跡　③ 内宮権現跡　④ 若宮八幡宮　⑤ 松山

□ 岡部の里と岡部氏

江戸時代後半の地誌『駿河記』に次のような記述がある。

【仮宿】

里人の伝云、往古堤中納言駿河国にさすらひ給ひ、松山の麓に仮に住せられし時に、一子の無ことを憂ひ、松山の八幡宮に通夜して祈誓をこめられしに、満願の夜館に帰り給ふに、小坂を過る時路のほとりに、大なる狼の赤児を口に咥え来たり、中納言殿の御前に捨て置き去る。卿怪しみ取揚げ視給へば、錦の直垂に赤児をつつめり。卿限りなく喜び、抱きテ館に帰り、小児を視るに、肩に狼の歯のあと付たり。されど命につつがなかりし故に、乳母に仰て養育し給ふ。斯て勅免ありて帰洛の時に、此児を此里に残し置く。此児成長に及び、天性俊傑武勇の人なり。是朝比奈岡部両氏の遠祖なり。その遺跡とて狼を神に斎祭りて内宮権現と崇むと云。此孫児の事一説には岡部権守泰綱と云。(後略)(注16)

図11　宇都谷郷周辺図／地理院地図(国土地理院)より作成

要約すれば、昔、堤中納言兼輔卿が駿河にさすらい、松山の麓に仮に住まわれた時に子どものないことを悲しんで、松山の八幡宮に願をかけた。満願の夜に帰ろうとすると、狼が赤子をくわえて中納言の前に置いて行った。喜んだ中納言は赤子を抱えて館に帰ると、赤子の肩には狼の歯形が残っていた。この子が岡部と朝比奈の両氏の先祖となった。また、その遺跡として、狼を神として祀り、内宮権現とした、と伝えている。続けて「瑞龍山万福寺」として、「時宗、…本尊阿弥陀仏体内仏恵心作四寸、(中略)当寺と仲正寺の際を押場坪、あるいは御屋敷と言い伝えて、堤中納言のここに座したりという」と載せている。図12に示したが、江戸時代から仮宿には岡部氏館跡と考えられていた場所があった。

岡部氏の祖先とされた堤中納言は三十六歌仙中の藤原兼輔(八七七～九三三年)のことである。兼輔は賀茂川堤に邸宅があったことから堤中納言と呼ばれていたというが、この兼輔の子孫を主張する藤原南家の岡部一族が平安時代の終わり頃から史書に登場している。彼らは源頼朝の御家人となり、足利尊氏の家臣として知られ、戦国時代には駿河今川氏の重臣として活躍した。駿河国を武田氏や徳川氏が領有すると、それぞれの戦国大名の家臣として複数の岡部氏が散見されるようになった。

寿桂尼の文書にもあった字名の「松山」は若宮八幡宮④の北⑤、内宮権現③は岡部氏館跡①裏の丘陵中腹に鎮座していた。館跡があったとされるオシバム坪は現在でも「押場」の小字名が残る。ちなみに、「押場」は潮山と朝比奈川と葉梨川に囲まれた平坦部のなかでは最も標高が高い場所にあたり、館を営むには適した場所である。また、廃寺となっているが、伝館跡の北側の時宗万福寺②の本尊・阿弥陀如来像は大阪府岸和田市の岸和田市立郷土資料館の所蔵となり、平安時代後半の仏像と評価されて、府指定文化財になっている。(注17)桑原藤泰が見ることがかなわなかった内宮権現の狼の御神体二つは、実は室町時代の瀬戸産の狛犬で、現在は

また、『駿河国新風土記』では次のように記している。

蔦の細道は宇津の山にかゝる東のかた、麓の道を云なり、岡部のすくを出て、宇津の山に至るに、凡二十町ばかり山間の潤川に傍て躋らずして、南のかた谷間に入る事古老の伝へに、蔦のほそ道ハ此間なりといへり、この山間にかく平坦なる所あり、里人老爺が平と呼、風土記に載する所の本原神社の跡にて、もと神社平なるを訛りてしか云伝へしにや、其所より、うつの山今の官道より二丁ばかり南を越へて、うつ谷村の東乃かたへ出るなり（後略）（注12）

江戸時代の地誌では、現在でも字名として残る「神社平」の横と猫石の左を通り頂上に至る道を蔦の細道と紹介し、一方では宇津の山という範囲内にそれはあると示していた。いずれにしても宇津ノ谷峠という記述はなく、「宇津の山」が地域の名称として使われていた。

## □ 岡部宿と岡部郷と宇都谷郷　― 点か面か ―

『伊勢物語』の世界から宇津の山について考えてきたが、次に宇津の山と、対のように記述されてきた「岡部」について考えていきたい。

現在の「岡部」は、静岡市と藤枝市を隔てる宇津ノ谷峠の西側に位置し、藤枝市の岡部町域にあたる。

建長元年（一二四九）の「関東下知状」は、駿河国宇都谷郷今宿の傀儡子と宇都谷郷の領主・岡部権守との裁判についての裁許状だが、この文書中に「岡部権守自領岡部宇都谷両郷以来、代々如此雑事一切不被宛行之処、」とあり（注13）、岡部権守（岡部泰綱かその子の忠綱）が岡部郷と宇都谷郷の領主であったことがわかる。加えて、当時の宇都谷は郷名であって、単なる谷や峠の名称ではなかったことも判明する。

続いて、古代から中世の宇都谷が示す範囲について考えていきたい。宇津ノ谷という地域は現在では静岡市の西端にあたる小さな集落とその地域を示している（図1・2参照）。ところが、平安時代中頃の『和名類聚抄』中、駿河国有度郡の項には、「内屋」「宇都乃夜」「宇都乃也」の郷名が記されている。（注14）また、「関東下知状」に記された宇都谷郷も郷名であった。ところで、宇津ノ谷峠の西側にあたる大字内谷（現在は「うつたに」と呼ぶ）は「うちのや」とよむことができ、語感が近いことから宇津ノ谷と内谷は関連があるのではないか、と以前から注目されていた。そのような中で、戦国時代に駿河国主の今川義元の母・寿桂尼が発給した朱印状の写は宇都谷郷の位置を再考させてくれる。

うつたりの内長慶寺かた山さかゐ之事
一まつ山　一うしろ山　一へいしかや
一めくら沢　一きハたかや　いつれも如前々さかゐとしてせいくい（ほカ）すへきもの也、仍件如、
天文十六未丁年卯月二月
（印文「帰」カ）
すいくわういん（注15）

これは、駿河府中の瑞光院に宛てた文書で、「うつたり」内にある長慶寺領と駿府の瑞光院領の境を示し、各々の寺領の管理を行うことを伝えたものである。この文書の「うつたり」は先の「宇都谷」であり、文書内の字名を地図内に比定すると、「まつ山」は若宮八幡宮の周辺部、「へいしかや」は、岡部町川原町の南の「平治が谷」、「めくら沢」は宇津ノ谷に近い「廻沢」、「きハたかや」は宇津ノ谷峠に入る谷間の「木和田谷」、「うしろ山」は漢字で書けば「後山」であろうが、「うしろ山」→「後山」→「ご山」→「郷山」と推定され、「松山」に続く丘陵東側の「郷山」に比定できよう（図11）。これらの地名は全て岡部川の流域部にあたり、中世後半にはこの地域は宇都谷郷に含まれていたと考えられる。これを考慮すれば、江戸時代の岡部宿は旧宇都谷郷の中にあり、宇都谷郷＝内谷であれば、宇都谷郷には、現在の内谷に加えて岡部川周辺地域が含まれる、と推測できる。つまり宇都谷は単に宇津ノ谷峠周辺の山間部ではなく、志太平野北西部の宇津ノ谷峠へと通じる平地から山間部へと続く地域と考えられる。また、江戸時代の東海道五十三次の岡部宿は中世の宇都谷郷内に位置していたのである。（図12）

少し話しが厄介になってきているが、次に岡部郷の比定地を考えていきたい。ここで注意したいのは、岡部宿は最初から宇都谷郷内にあったわけではない。江戸時代の岡部宿は現在の宇津ノ谷峠の西、約一・五㎞に本陣や問屋場が設けられ、加宿の内谷村を含めて長さ約二㎞が宿場となっていた。

ところで、先の『駿国雑志』では、「岡部宿は三度かわれり」と記されている。やはり岡部宿は宇都谷郷ではなく、元は岡部郷内にあったのであろう。それでは、最初の岡部宿はどこにあったかを検証していきたい。これは、とりもなおさず岡部郷の位置を探すことになるのである。

うつ（『伊勢物語』・平安時代）
夢にも人にあわぬ（別れ）（『伊勢物語』）
修行者（山臥）あり（『海道記』・鎌倉前期）
無縁の世捨て人ある（『東関紀行』・鎌倉前期）
うつの山涙に袖の色ぞこがる、（『十六夜日記』・鎌倉後期）
浄土信仰のもとに念仏を唱える遊行僧の修行場（『閑居の友』『撰集抄』・鎌倉前期）
六道の場（六地蔵の設置・中世かと思われるが時期不明）
巨岩信仰の場（猫石・古代～）
鬼が出現する場所（十団子伝説・中世）
人殺しの舞台（『蔦紅葉宇都谷峠』・近世）
猫又（『獨道中五十三駅』・浮世絵・近世）

宇津ノ谷峠に付けられたこれらのイメージは、『伊勢物語』により語られた「うつ＝無」から夢想される空虚感に根差したものと考えられる。中世には「宇津の山」を越える道を「つたの下道」、次第に「つたの細道」と呼ぶようになった。ただし、それは形而上の道であり、近世以降に街道として使われていなかった図2のA路をそれに当てたのであろう。

『伊勢物語』では東国に左遷された在原業平はこの宇津の山で京の愛しい人に別れの歌を詠むことになる。この行為には作者が捉えた意図を感じることができる。「峠」を越える、と形容するごとく、ひとつの高みを登りそこから降る、という行為は苦労を伴う。それゆえ人は峠を越えることにより新たな人間に再生する、という観念があったと考えられよう。つまり、罪を背負っていた在原業平は、痛みを克服して「うつ」の峠を越えることにより新たな人間に再生して、東国への旅を続けなければならなかった。そのため、うつの山を越える必要があったのである。いま一つ加えるならば、在原業平はうつの空間であるうつの山道に入るためには、その前に自らの因縁を断ち切り、自らが無となって「うつ」の空間に入らなければならなかったのである。このような観点からいま一度『伊勢物語』を観てみると、「宇津の山にいたりて、わがいらむとする道はいと暗う細きに…」と記している。「わがいらむとする道」であるから、業平は宇津の山道に入る前に別れの歌を詠んでいた。また、その時に、無の空間の宇津の山道から降り、生の空間へと出てくるのが修行者であることは、作者が意図したことであろう。業平は象徴的な「生」の空間である京へと向かう修行者に「うつ」の外で消息文を手渡し、「生」との別れとけじめをつけた後にうつの山に入り、これを越えることにより新たな在原業平となって、東国への旅を続けたのである。したがって、『伊勢物語』の蔦の細道の段は、「宇津の山道に入る前に別れの歌を詠み、宇津の山道から出た修行者に消息文を手渡す」ことが本来の形態となる。しかし、古来より蔦の細道図として知られる意匠の中で、この点を意図したものはないように思われる。峠道で修験者と会わなければ、よい構図にならないからであろう。一方、『伊勢物語』の作者は、業平が別れの歌を詠み、自らの過去と決別するのに最も適した場所として〝うつの山〟を選んだのである。おそらくは、『伊勢物語』が執筆された以前から、当該地域は「うつ」な土地として広く知られており、作者はそれを利用して業平再生の舞台として設定したのであろう。

興味深いことに、歌舞伎の「蔦紅葉宇都谷峠」では十兵衛は悪事を働く前は峠を越えてきたのに、文弥を殺してからは峠を越えない。また、仁三も神奈川宿から文弥をつけてきたが、峠を越えない。もちろん、文弥も峠を越えることはできなかった。これは、因果を背負ったままの人間は再生できない（峠をこえられない）、という作家の設定ではないだろうか。業平のように現在の自分の境遇に別れを告げなければ峠を越えて、再生できなかった、ということであろう。

## 二　宇津の山、宇都谷郷と岡部郷

### □ 宇都谷郷と岡部郷

さて、『伊勢物語』の内容から宇津の山について考えてきた。これにより、「宇津の山」と「蔦の細道」は文学の中で創造された形而上の地域と道と考えられたであろう。それでも、当時の人たちはぼんやりとではあるが、蔦の細道は宇津の山の中にあり、宇津の山は現在の宇津ノ谷峠周辺のことと捉えてきたのである。

ところで、江戸時代の一八世紀後半以降に盛んに編纂された駿河国の地誌をみていくと、この文学上の「蔦の細道」を実際の道へと符合させようとしていた節がみえる。一八世紀後半に現地調査して纏められた駿河で最も古い地誌の『駿河記』には次のように記されている。

○蔦の細道　里人の伝云所は宇津谷山坂下より下り、右に入谷川に沿て行こと数百歩にして、樵路の険なる坂を攀躋し、小笹繁りたる間をかき分行き過る程に路の左の方少し平なる山畠あり。此処を「ジムヂイ平」と唱ふ。是より東に向たる処に小山ありて其辺大岩数多あり。其内に猫石と号るあり。此小山の左の方を過て峠に至る。是にて凡十二三町余。峠より富士山は丑寅に当りてよく見ゆ。峠を降れば暗き幽渓に入、険しき降なり。一町許して林の沢辺を過て、往還の平橋と云処に出るなり。（注11）

ここに採り上げられた猫と老婆は、日本の各地に残された猫又伝説のひとつで、年老いた猫は尻尾がいくつにも別れ、人をたぶらかす、という伝承に基づいている。ここでも、宇津ノ谷峠はつたの細道と混同されているが、妖怪が出る場所として扱われていた。この宇津ノ谷峠の「猫又」の話は、江戸時代にはよく知られていたらしく、歌川国貞(三代豊国)も「五十三次ノ内岡部丸子ノ間宇津谷猫石」と題して、歌舞伎の浮世絵を描いていた。ちなみに、ここで語られた神社平というのは岡部方面から蔦の細道を登る途中に存在したと伝わる神社跡のことである。今では神社は跡形もなく、神社の周辺に位置したという「猫石」の巨岩だけが鎮座している。明治時代の絵葉書には、注連縄が巻かれた猫石の写真があったが現在は石のみとなっている。民俗学者の野本寛一氏は猫石が宇津ノ谷峠の峠神の磐座であったのではないかと考え、「この形態こそ神社の原形の一つと言えよう。猫石の後方には大小の岩石が突出しており、この区域全体が神聖な場として崇められ、その中心たる猫石に手向けが行われていたのではあるまいか、猫石とその背後の石群、神社平という名称からして、この位置が古代峠信仰の重要な地点とされていたことはほぼまちがいなかろう。」と述べている(注9)。石が峠神や境神として認識されることがあり、猫石とその周辺が磐座として見られていたと筆者も考えている。猫石周辺は平安時代以前の巨岩信仰の痕跡であろう。

図10　猫石

□十返舎一九の『東海道中膝栗毛』に扱われた宇津ノ谷峠

さて、江戸時代の後半には「おかげ参り」と称した参詣旅行が盛んになった。おりからの旅行ブームに乗り、享和二年(一八〇二)から文化十一年(一八一二)にかけて出版された『東海道中膝栗毛』のなかに宇津の山が登場している。

喧嘩する夫婦は口をとがらして　鳶とろろにすべりこそすれ、それより宇津の山にさしかかったが、雨はしだいに篠を乱すように降りしきり、蔦の細道を心細くも杖をちからに十団子の茶屋に近くなって、弥次郎思わず坂道に滑りころげたので
降りしきる雨やあられの十団子　ころげて腰をうつの山道
岡部の宿の宿引きが待ちうけて、
宿引「お泊りでございますか」…(後略)(注10)

江戸時代後半に出版された滑稽本の同書は当時の庶民の感覚を教えてくれる。実は、江戸時代後半の宇津ノ谷峠を越す道は図2のBだが、やはり「蔦の細道」として扱われている。また、峠越えを心細くと形容しながらも、おどけた狂歌を挿入して微塵も暗さを感じさせない。江戸時代も後半から、全国で「おかげ参り」が流行するようになると街道の名所名物が旅愁を誘い、庶民も旅心を持つようになってきた。宇津ノ谷峠も中世以来の遁世の地のイメージを払拭し、マイナスのイメージから次第に街道名所へと転化していった。それらには、十辺舎一句の『東海道中膝栗毛』の弥次さん、喜多さんらが果たしたイメージは大きく、「こころ細くも」としながらも「ころげて腰をうつの山道」と笑い飛ばしてしまう軽さが際立っている。また、歌舞伎や浮世絵に描かれた十団子や猫又にも現実的な恐怖は感じられず、旅ブームとともに宇津ノ谷峠は「単なる東海道の名所」となったことが見受けられる。また、宇津ノ谷峠と蔦の細道も混同されて、宇津ノ谷峠＝蔦の細道の記述がみられるようになっていた。江戸時代の混乱でも予想がつくように、蔦の細道はあくまでも文学の中での、形而上の道であり、それを実際の土地に移そうと考えた結果がA路だったのである。

□小結

さて、文学に扱われた宇津ノ谷峠を概観してきたが、それらの中では、ぼんやりとだが宇津の山の中に峠道があると考えていたようだ。それらを纏めて〝宇津の山〟と呼んでいた。そして、江戸時代中頃までの宇津ノ谷にはマイナス・イメージがつきまとっていた。それらのイメージを掲示すると、左のように示されよう。

れているが、「六地蔵」とは仏教でいうところの、全ての生命は六種の世界に生まれ変わり、これを繰り返す、とする六道輪廻の思想に基づいて、六道のそれぞれを六種の地蔵が救うとする説から生まれたものである。他界への旅立ちの場である葬儀場や墓場に多く建てられており、道祖神信仰とも結びついて、街外れや辻に「結界の守護神」としても建てられた。これらのことを考慮すると、二つの六地蔵に挟まれた宇津ノ谷峠は、六種類に分けられた「六道＝無と死の世界」と捉えられていたと考えられる。やはり「うつ」は無に通じており、それへの恐れから鬼や幽霊が出現し、人殺しの舞台となったのである。

□ 歌舞伎「蔦紅葉宇都谷峠」

江戸時代後半に人気となった歌舞伎の演目に宇津ノ谷峠を扱ったものがあり、当時の庶民が抱いていた宇津ノ谷峠のイメージを教えてくれる。安政三年（一八五六）に江戸の一村座で初演された河竹黙阿弥の『蔦紅葉宇都谷峠』は世話物の歌舞伎演目として知られている。「因果同士の悪縁が、殺すところも宇都谷峠、しがらむ蔦の細道で、血汐の紅葉血の涙、この引明けが命の終わり、許してくだされ文弥殿」の名台詞で評判になったという（図8）。『東海道中膝栗毛』と同様に宇津ノ谷峠を越える近世の東海道＝蔦の細道、となっているのは江戸時代後半の特長といえよう。それでは、内容をみていこう。

江戸の貧しい家の娘、お菊は弟の文弥を石の上に誤って落としてしまい、それが原因で失明させてしまった。成長したお菊は自らを吉原へ身売りしてつくった百両の大金を文弥にもたせ、京へ上らせて座頭の官位を取らせようとする。文弥は京へ向かうが、途中の丸子宿で胡麻の蝿（＝コソ泥）の提婆の仁三が文弥の大金を狙う。しかし、仁三は同宿した伊丹屋十兵衛に取り押さえられてしまう。そもそも十兵衛は見受けした女房の代金の二百両の金策に京都に向かっていたが、半分の百両を作れずに丸子宿まで戻ったところだった。ところが、心細くなっていた文弥は宇津ノ谷峠を越えるまでの同道を十兵衛に願い出てしまった。翌日、文弥と十兵衛が峠まで来たところで、十兵衛は初めて文弥が持つ百両のことを知り、文弥に借金を申し入れするが断られてしまう。一度は考えを改めた十兵衛であったが、結局は文弥を殺して金を奪ってしまった。しかし、地蔵堂に身をひそめていた仁三が、その一部始終を見てしまっていた…。この後、江戸に戻った十兵衛は女房と店を始めるが、仁三に脅され、文弥の幽霊に悩まされていくのである。

全五幕一場の長編となる『蔦紅葉宇都谷峠』は、多くは文弥と十兵衛のからみがある序幕と大詰めの部分のみが上演されてきたという。前置きが長くなってしまったが、大詰めの「文弥殺し」の舞台となったのが宇津ノ谷峠の地蔵堂で、因縁からむ人殺しの場所だった。

図9「東海道五十三対　岡部」歌川国芳
／藤枝市郷土博物館・文学館所蔵

□ 石と猫

四世鶴屋南北作の『獨道中五十三駅』では、宇津ノ谷峠の猫石が扱われていた。実はこの演目の初演は、『蔦紅葉宇都谷峠』に遡り、文政十年（一八二七）の閏年に江戸河原崎座で上演された夏狂言で、この第四幕の「鞠子在古寺の場」に続き、「猫石怪異の場」として宇津ノ谷峠の猫石が登場した。この中では十二単衣を着た怪猫が行灯の油をなめる、今ではよく知られた妖怪が登場する。この歌舞伎は好評だったとみえて、後に歌川国芳が浮世絵「東海道五十三対」のシリーズ物として発表した（弘化二年［一八四五］頃）。同連作のうち、「岡部」には、背景の化け猫とともに娘を襲う老婆が描かれている（図9）。浮世絵中の詞書には次のように記されている。

蔦の細道神社平の上の方に猫石といふあり　古松六七株の陰に猫の臥したる形に似たる巨巌あり　其昔此所に一つ家ありて　年ふる山猫老女に化し　多くの人に害をなし人民を悩ませしに天命逃れず　終に死して其の霊　石と化すと世俗にこれを言い伝えけれども　そのしまい詳かならず

と対決してくれました。子供の姿で現れた鬼に「すみやかに本体を現せ」と言うと、彼はたちまち二丈ばかりの鬼の姿となりました。「なるほど、お前の神通力は大したものだ。わしはここで食べられても仕方がない。しかし、冥土の土産にその力をもっと見せてくれないか」鬼は得意になって、いろいろな形に姿を変えてみせました。そこでお坊さまが「今度はできるだけ小さなものに化けて、わしの掌にのることができるか」と言うと、小さな玉となってお坊さまの手のひらに乗りました。この時、お坊さまは持っていた杖で手のひらの玉を打ちました。すると、雷鳴がとどろき、玉は砕けて十個の粒となりました。お坊さまは「お前が将来里人を困らせることがないように迷いから救ってやろう」と一口に飲みこんでしまいました。

それから後、この峠には鬼の姿は現れなくなり、村人も旅人も大助かりしました。そして、数珠の形の小玉団子を作り、厄除けのお守りとして旅行の時に持たせたり、食べさせたりするようになりました。(注7)

図7　慶龍寺の石の延命地蔵

この伝説の中で鬼を退治するのは、ある僧、弘法大師、在原業平と、伝説により変わるが、いずれの話でも「宇津ノ谷峠に鬼がでる」のは同様である。

このように鬼が登場する話は「伊勢物語」の第六段「芥川」にも含まれている。芥川という河原で鬼に女が一口に喰われてしまうのである。宇津ノ谷峠の鬼が人を襲って食べてしまう、という伝説は「伊勢物語」の影響も想起させるが、この他にも『今昔物語』第二十七「於内裏松原鬼成人形噉女語」や『古今著聞集』変化第二十七にも女房が鬼に喰われる話があり、はっきり言いきれない。いずれにしても、これらの鬼譚の発生は遅くとも中世期にまで遡るであろう。ここでも宇津ノ谷峠のイメージがマイナス志向であることがわかってきたが、他にも宇津ノ谷を印象付ける事象を探してみたい。

□峠の地蔵

宇津ノ谷峠を越える近世の東海道（図2のB路）の東西の登り口には地蔵が祀られている。宇津ノ谷峠の東の慶龍寺には石製の延命地蔵が、西の岡部側には坂下の延命地蔵が祀られている(注8)。また、坂下の地蔵堂に安置された木造の半跏思惟地蔵像は鎌倉時代にまで制作が遡るが、万里集九が記した『梅花無尽蔵』(一五世紀後半成立)中に、坂下地蔵堂の近隣に天台宗の能清寺が存在していた記録があることから、この寺の廃寺に伴い地蔵堂に祀られた可能性が高い。地蔵信仰については、釈迦の入滅後の五十六億七千万年後に弥勒菩薩が出現するまでの間、現世に仏が不在となってしまうため、地蔵菩薩が仏の代りに地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の六道を輪廻する衆生を救う菩薩であるとされている。特に、浄土信仰が普及した平安時代以降、極楽浄土に往生の叶わない衆生は必ず地獄へ堕ちるという信仰が強まり、地獄における責め苦からの救済を地蔵に求めるようになったといわれる。なお、宇津ノ谷峠の双方の地蔵堂には「六地蔵」も祀ら

図8　「蔦紅葉宇都谷峠」　三代歌川豊国

とっている。

以往アヅマヂノカタヘ、サスラヘマカリ侍リシニ、宇津ノ山辺ノ桜、見過シガタク覚テ、奥深ク尋入テ侍リシニ、イトドダニ、ツタノ細道ハ心ボソキニ、日カゲモモラヌ木本ニ、形ノゴトクナル庵結テ座禅セル僧アリ。

齢ハ四十バカリニモナラント見侍リ。イカニイヅクノ人ノ、ナニツキテカ是ニハ住給フラム、又発心ノ縁聞マホシキヨシ尋侍リシカバ、我ハ是相模国ノ者也。武勇ノ家ニ生テ三尺ノ秋ノ霜ヲヨコタヘテ、胡籙ノ箭ヲ、ツカフベキシナノ者ナ。シカアレドモ…（後略）（注6）

宇津の山は鎌倉時代には浄土信仰のもとに念仏を唱える遊行僧の修行場と捉えられていた。奈良平安時代の権門仏教からはほど遠く、それらから逸脱した、いわゆる聖と呼ばれる僧たちが遁世する場所として宇津の山が考えられていたようである。また、『撰集抄』では「ツタノ細道」と表記されていることに注意したい。おそらくは文学上の「蔦の細道」の表記の最初は、鎌倉時代の三世紀中頃にまで遡るだろう。

□十団子の伝説

松尾芭蕉の弟子・森川許六の「十団子も小粒になりぬ秋の風」に詠みこまれた十団子は小豆ほどの大きさの上新粉を丸めて作った団子を十個ずつ糸でつないで丸くし、それを十本束ねてある。糸に連ねられた十団子は江戸時代の版本にも描かれて紹介されており、現在でも八月二十三日の地蔵盆のお施餓鬼の時に宇津ノ谷地区の慶龍寺で配布している（図5）。許六が見た十団子は小粒で厄除けのお守りであったらしいが、戦国時代の連歌師の宗長が記した『宗長日記』には「一杓子の十づゝ、かならずめろうなどにすくはせ興じて」と記されたように、食べるための団子もあったようである。また、岡部側の坂下地蔵堂では八月のお施餓鬼の時に、串に十円玉ほどの大きさの団子十個を刺してお供えしている（図6）。したがって、現在のように紐に通して携帯しやすい形になったのは、おかげ参りが流行した江戸時代中ごろ以降ではないかと推測される。ところで、この十団子には宇津ノ谷の慶龍寺と周辺の住民に伝わる伝説がある。

図5　慶龍寺で地蔵盆に販売する十団子

図6　坂下地蔵堂の十団子

昔、宇津ノ谷峠の北側に深い谷があり、その下に梅林院というお寺がありました。その寺の住職は原因不明の難病にかかり、その痛みがとてもがまんできず、仕方なく時々小僧にその血膿を吸い出してもらっていました。ところが、この小僧、血膿を吸うことが重なって自然に人肉の味を覚えてしまい、ついに人を食べる鬼となってしまいました。そうして宇津ノ谷峠に住み着き、峠を行き来する旅人を捕らえては食べ、人々を困らせていました。ある時、旅のお坊さまが困った村人たちの話しを聞きました。「宇津ノ谷峠に鬼がいて村人たちを悩ましています。どうかお坊さまの神通力で村人の苦難を救ってください」すると、そのお坊さまは鬼

おとづれきこゆ。
我心うつゝともなしうつの山夢にも遠き昔こふとて
つたかえでしぐれぬひまもうつの山涙に袖の色ぞこがる、
こよひはてごしといふところにとゞまる。なにがしの僧正とかやのぼるとて、いと人しげし。やどかりかねたりつれど、さすがに人のなきやどもありけり。(注4)

『十六夜日記』に関しては『伊勢物語』の東下りの段の影響が以前より指摘されている。うつの山で業平と同様に山伏に出会ったが、急ぎの旅でもあるので文も十分には書くことができなかったとしている。

さて、一三世紀後半までの紀行文に描かれた蔦の細道は、まるで『伊勢物語』のように作中で宇津の山越えの折に修行者と出会っている。これらの作品の特長は歌枕としての紹介や本歌取りの和歌に終始していることが特徴といえる。ただし、一三世紀代の文学上では『伊勢物語』と同様に〝宇津の山〟と記され、わずかに一三世紀前半成立の『海道記』中に〝蔦の下道〟とのみ記されていた。

南北朝から室町時代にかけての宇津ノ谷峠に関する記述は管見ではほとんどなく、戦国時代に入ると、守護大名から戦国大名へと脱皮した今川氏親の家臣であった連歌師の宗長が『宇津山記』『宗長日記』に「宇津の山」のことを記している。宗長は丸子の泉が谷に庵を結び(現在の静岡市駿河区内柴屋寺)、今川氏親の庇護を受けていた。『宇津山記』では、冒頭に「駿河国宇津の山は斎藤加賀守安友しる所より十七八町川につきてくだる。さながら鈴鹿の関こえし心地ぞする」とあり、斎藤加賀守の所領であった丸子から川を遡った場所で、鈴鹿関の辺りと似た場所と記している。また、『宗長日記』では「折節夕立して宇津の山に雨やどり、此茶屋むかしよりの名物十だんごといふ、一杓子の十づゝ、かならずめろうなどにすくはせ興じて、夜に入て着府(後略)。」のように何度も「宇津の山」という表現が登場するが、「蔦の細道」や「宇津の谷」という記述はない。どうやら中世には、宇津の谷は峠ではなく、「宇津の山」が地域名として使われていたと考えられる。

□ 仏教説話の世界

次に、鎌倉期に成立した仏教説話を見ていきたい。

・『閑居の友』　慶政上人が著したといわれる『閑居の友』は承久四年(一二二二)頃に成立した鎌倉時代初期の仏教説話集で、遁世者たちの心のありさまを伝え、それを結縁のよすがとし、教化することを目的として記されていた。

十五　するがの國うつの山にいゑゐるせる僧の事
むげにちかき事にや、するがの國うつの山に、そこともなくさそひありく僧ありけり。つねはあやしのむしろごもかた〳〵と、つちにてつくりたる鍋や、いときたなげなるおけ・ひさごなどかた〳〵としどけなげにになひてぞありける。さてゆきどまる所にてむしろごもめぐりにひきまはして、さるべきやうにいゑゐしつゝ、ひでものしてくひなどしける。つねにはそのさとのものどもにつかはれて、ひんくなる事をばいみじく心えてしければ、びんぎ房とぞつけたりける。ただの乞食などは、さすがにおぼえず、おもへる所あるにしなんみえける。ある人たづねゆきて、さても僧のまねがたにてかくは侍ど、まめやかにいかにして世をいづべしともおぼえ侍らず、(中略)
あるときは木のしたにもゐけり。そのおはりには、このほどなやましくおぼえ侍ればとて、人のもとをいでゝつねの山のこかげにゆきて、二日ばかりありて、西にむかひてぞしにたりける。
この人のすみ所こそ、あはれにきこえ侍れ。つたの下道心ぼそくゝらがりて、おりにふれつゝ、いかにすみわたり侍けむ。むかしみし人もさだめてあひけんものを、おもひをくふしなくば、せうそこする事もあらじとあはれ也。(注5)

図4　宇津の山図　山本探山／静岡県立美術館所蔵

ここでは、宇津の山をさすらい歩く僧の遁世場としている。また宇津の山にある道を『海道記』と同様に「つたの下道」としており、一三世紀前半には、蔦の細道とは呼ばれていない。

・『撰集抄』　建長二年(一二五〇)頃成立と考えられており、神仏の霊験や寺院の縁起・高僧・往生・発心遁世譚等を載せている。西行が自らの諸国行脚の見聞きを記したかのような体裁を

どのように変化していったかを見ていくこととする。少し長文となるが、宇津ノ谷峠の雰囲気も伝わるため、関係箇所の全文を載せていく。

・『海道記』　貞応二年（一二二三）成立とされる。伝鴨長明・源光行著とされるが、詳細は不明

　岡部の里をすぎて遙かに行けば宇津の山にかかる。この山は、山の中に愛するたくみの削りなせる山なり。碧岩の下には砂長うして巌を立て、翠嶺の上には葉落ちてつちくれをつく。肢を背に負ひ、面を胸に抱きて漸くに登れば、汗、肩袒の膚に流れて単衣おもしといへども、懐中の扇を手に動かして微風の扶持可なり。かくて森々たる林を分けて、峨々たる峯を越ゆれば、貴名の譽れはこの山に高し。おほかた遠近の木立に心もわけられて、一方ならぬ感望に思ひ亂れてすぐれば、朝雲、峯くらし、虎、李將軍が住みかを去り、暮風、谷寒し、鶴、鄭太尉が跡に住む。既にして赤羽西に飛ぶ。目に遮るものは檜原、槇の葉、老の力ここに疲れたり。足に任するものは、苔の岩根、蔦の下路、嶮難に堪へず。暫く打休めば、修行者一兩客、繩床、そばに立てて又休む。

立ちかへる宇津の山臥ことづてん
みやこ恋ひつつひとり越えきと

　行く行く思へば、過ぎ來ぬるこのあひだの山河は、夢に見つるか、うつつに見つるか。昨日とやいはん、今日とやいはん、昔を今と思へば我が身老いたり、今を昔と思へば我が心若し。古今を隔つるものは我が心の中懐なり。生死涅般、猶如昨夢といへるも、あはれにこそ覺ゆれ。昨日すぎにし跡は今日の夢となり、今日ここを過ぐる、明日いづれの處にして今は昨日といはん。誠にこれ、過ぎぬる方の歳月を、夢より夢に移りぬ。昨日今日の山路は、雲より雲に入る。

あすや又きのふの雲におどろかん
今日はうつつのうつの山ごえ

　手越の宿に泊りて足を休む。（注2）

・『東関紀行』　仁治三年（一二四二）成立、作者不明

　前嶋宿を立ちて、岡辺の今宿うち過ぐるほどに、片山の松の陰に立寄て、かれいゐなど取出たるに、風冷じく、梢にひゞきわたりて、夏のまゝなる旅衣、うすき袂もさむくおぼゆ。

　これぞこのたのむ木のもと岡べなる松のあらしよ心して吹け

　宇津の山を越ゆれば、蔦かづらはしげりて、昔の跡たえず。業平が修行者にことづてしけん程、いづくならむと見行く程に、道のほとりに札立てたるを見れば、無縁の世捨て人あるよしを書けり。道より近きあたりなれば、少し立ち入て見るに、わづかなる草の庵のうちに独の僧有。画像の阿弥陀仏をかけたてまつりて、浄土の法門などをかけり。その外に身ゆる者なし。発心のはじめ尋ねければ、「我身はもとこの国のもの也。さして思ひ入たる道心も侍らぬうへ、其身堪たるかたなければ、理を観ずるに心くらく、仏を念ずる性ものうし。難行易行の二道ともかけたりといへども、山中に眠れるは、里にありて勤めたるにまされるよし、ある人のをしへにつきて、この山に庵をむすびつゝ、あまたの年月を送るよしを答ふ。（注3）

　『海道記』、『東関紀行』ともに鎌倉時代前半の紀行文である。双方とも『伊勢物語』の故事にならい、世の無常に心を打たれて、業平が修行者に出会ったのはどこであろうか、と古典に思いを馳せている。特に『東関紀行』の筆者は、『伊勢物語』の主人公が修行者に会った場所を探して行くうちに、世を捨てた僧が結んだ庵を見つけたといい、僧の素性に思いを寄せている。これらは文学としての引用に他ならない。また、後に述べる仏教説話集のなかでも鎌倉時代に特徴的な隠遁僧の説話の影響をも窺い知ることができる。

・『十六夜日記』　弘安六年（一二八三）頃成立といわれる。所領紛争の訴訟のため京都から鎌倉へと下る藤原為家の側室の阿仏尼によって記された紀行文で、女流歌人でもある阿仏尼は各地で風物、名所旧跡、感慨を記す一方で、それらを和歌に読み込んでいる。

　（十月：筆者記入）廿五日、きく川をいでて、けふは大井川といふ河をわたる。水いとあせて、きゝしにはたがひてわづらひなし。かはらいくりとかや、いとはるか也。水のいでたらんおもかげおしはからる。

思ひいづる都のことは大井河幾瀬の石のかずもおよばじ

うつの山こゆるほどにしも、あざりのみしりたる山ぶしゆきあひたり。夢にも人をなど、むかしをわざとまねびたらん心地して、いとめづらかに、をかしくもあはれにもやさしくもおぼゆ。いそぐ道なり、といへば、文もあまたはえかゝず。たゞやむごとなきところひとつにぞ、

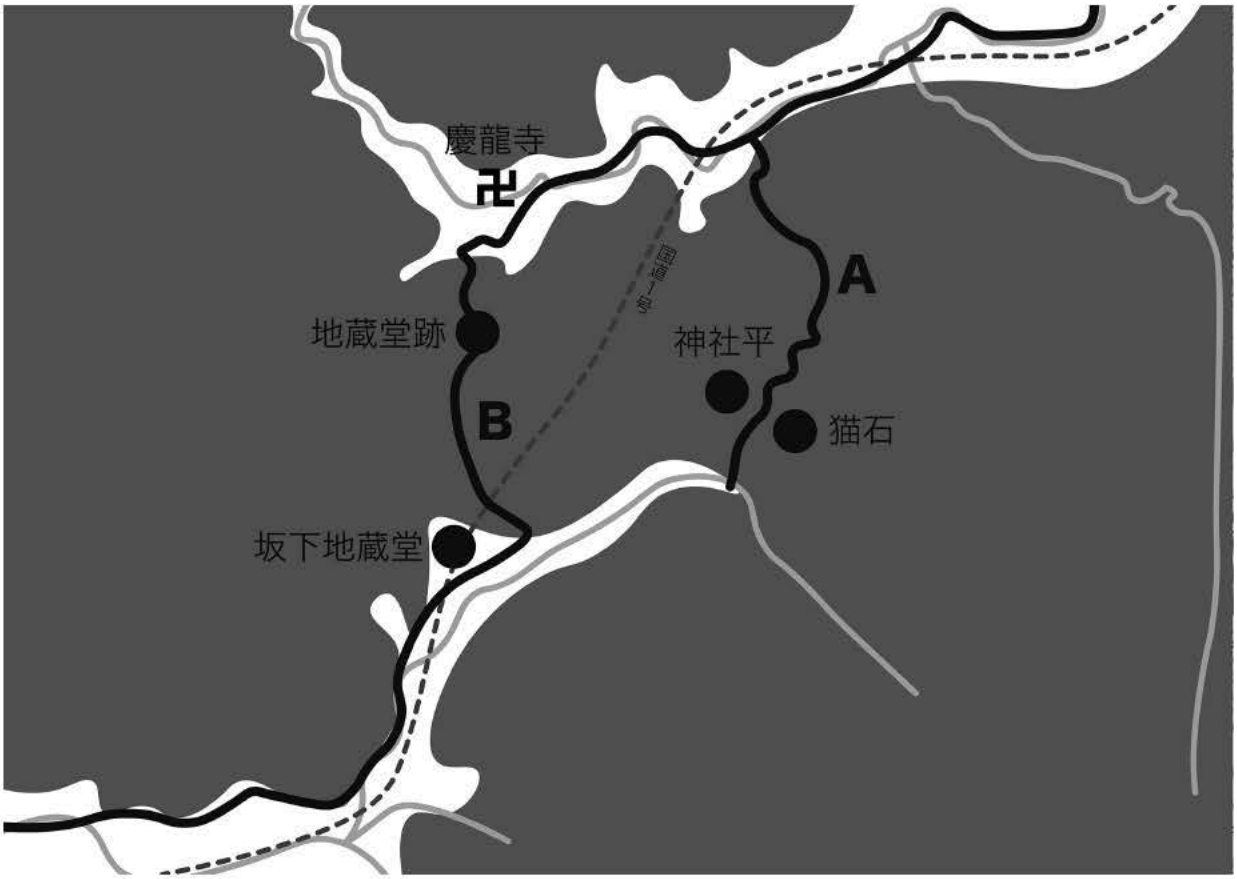



図2　宇津ノ谷峠周辺図／地理院地図（国土地理院）より作成

道図」が描かれていった。また、「蔦の細道」を意識した紅葉の赤や緑の蔦の意匠が加えられることが多くなる（図3）。『伊勢物語』では「富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり」とあるように、新暦で六月のことなのに意匠としては深江蘆舟が描いたような色づく秋の風景となっていく。作品の多くは蔦の細道を登る在原業平と修行者が出会い、文を託す部分が描かれている。これらの意匠は絵画だけでなく、漆芸や陶磁器にも使われており、時代が降ったり、小さな器物に描かれる場合には蔦や修行者が背負う笈だけであったり、道を表す直線状の線と蔦の葉のみが描かれて「蔦の細道図」を指す場合があり、次第に様式化していく経過を見ることができる。

図3　蔦の細道図屏風　深江芦舟／東京国立博物館所蔵　Image：TNM Image Archives

さて、それではどうして宇津ノ谷峠が『伊勢物語』の舞台に選ばれたのかを考えていきたい。

□紀行文の世界

まず、『伊勢物語』以降の文学の世界では、宇津ノ谷峠はどのように扱われていたのか、紀行文から見ていく。そして、極力時代を追いながら、表現の方法は変わっても当時の宇津ノ谷峠のイメージがどのようだったのか、また、

# 伊勢物語の風景
## ―蔦の細道図の意匠と宇津の山―

一般財団法人清水港湾博物館　椿原靖弘

はじめに

駿河国の中央部、現在の静岡市と藤枝市の境に宇津ノ谷峠がある。宇津ノ谷峠は江戸時代には東海道の間の宿・宇津之谷と岡部宿の間にある峠のことをいい、多くの紀行文や浮世絵の題材となった名所であり、現在ではハイキングコースとして親しまれている。それというのも平安時代初めの成立とされる『伊勢物語』で、三十六歌仙の一人に数えられた在原業平が東へ下る舞台となり、歌枕として知られてきた。加えて絵画や工芸品の意匠として「蔦の細道」が描かれていくこととなった。ところが、筆者はこの蔦の細道図の意匠に違和感をもっていたことから、少し解説を行いたいと考えた。また、「蔦の細道」と「宇津ノ谷」を考究することにより地域史を読み解くことができると考えた。

なお、現在の地名表記は「宇津ノ谷」であり、歴史的には宇都谷、宇津之谷、宇津の谷など定まらないため本稿では、現在の地域名を「宇津ノ谷」と表記し、郷名を示す場合は宇都谷郷もしくは内谷郷を使った。

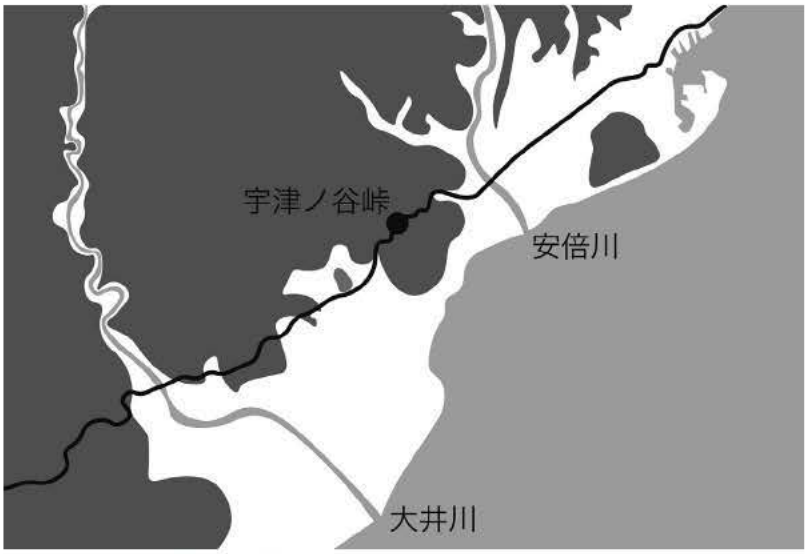



図1　宇津ノ谷峠位置図／地理院地図（国土地理院）より作成

### 一　宇津の山図の意匠

□『伊勢物語』に描かれた宇津ノ谷峠

宇津ノ谷峠は駿河の府中（現静岡市街地）から丸子川に沿い西へと深く入り込んだ谷の最も奥の部分に当たり、ここを越えれば駿河国西部の志太平野へと通じている。反対に京から坂東へと東海道を降る時は大井川を越えて、街道は山沿いを島田宿・藤枝宿を経て、岡部宿を過ぎて約2㎞で宇津ノ谷峠へと通じている（図1）。

宇津ノ谷峠を越える道は二つが知られていた。図2にあるように木和田川を遡上し、谷の奥部で一気に稜線の鞍部へと登る道（図2のA路）が古くから使われたと伝えられ、これが現在は「蔦の細道」と呼ばれている。いまひとつは、坂下の地蔵堂東側から山腹斜面を緩やかに登り、鞍部を越えて宇津ノ谷の集落へと下る道（同B路）である。このうち、「蔦の細道」と称されているA路が『伊勢物語』の舞台となった峠道とされており、B路は天正十九年（一五九〇）の豊臣秀吉による小田原攻略に伴って整備され、以降は江戸時代から明治時代に至るまで使用された東海道である。

さて、それでは宇津ノ谷峠が知られるところとなった『伊勢物語』を見ていこう。

『伊勢物語』は全一二五段あり、宇津ノ谷峠は前半部分の第九段「東下り」で舞台となっている。「昔、男ありけり」と記された主人公の在原業平は、清和天皇の女御で後に陽成天皇の母となる藤原高子との悲恋の咎により東国へと流離することとなった。

本段で業平は三河、遠江を経て駿河国に入っていた。

行き〳〵て、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わがいらむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつゝにも夢にも人にあわぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。（注1）

業平は、宇津の山で知り合いの修行者に会い、京の愛しい人への消息文を届けるよう頼んだのである。

これ以降、業平の作を本歌とした和歌が多くつくられ、宇津ノ谷峠は歌枕として知られていくこととなり、峠を降る笈を背負った修行者と、高貴な身なりの男が出会う「蔦の細

# 2023（令和5）年度 静岡県博物館協会　役員会、総会、事業報告

## 概　要

今年度はコロナ禍以後初めて、ご参集頂いての役員会、総会を開催した。
議案は全て原案通り可決され、事業計画に沿って、今年度も協会活動は進められた。

## 役員会、総会の実施について

静岡県立美術館講座室
5月23日（火）
13：30～14：30　役員会
15：00～16：30　総会

## 今年度の地域セミナーについて

公益財団法人佐野美術館「日本刀の匠たち」展関連イベント　→￥100,000-
駿府博物館「短期歴史講座　静岡が舞台となった日本の政局」　→￥100,000-

コロナ禍の間、イベント開催が困難になっていることに鑑み、秋季も地域セミナーを開催してきたが、新型コロナ5類への引き下げに伴い、今年度は秋季の募集を行わなかった。
その分年度当初予算案内に防災対策費、予備費を設けた。

## 研修会、講習会について

事業計画として、年間2、3回の研修会や講習会の実施を承認して頂いており、ほぼ平時の状態で講習会を企画することが出来た。このため講習会は、以下の二つとした。
「袋井市森町 史跡視察」1月31日（水）　会場：安養山西楽寺、森町立歴史民俗資料館ほか（参加者15名）
「文化財救済と史料ネット」3月10日（日）　会場：静岡文化芸術大学（本稿入稿時未実施）

（事務局 新田）

（参考）

## 2023（令和5）年度 事業計画

### 1 役員会・総会の開催

新型コロナ禍が終息の傾向にあると思われることを受け、今年度は対面開催を基本とし、
会場への出席が難しい会員の便を図るため、オンラインでの参加も可とした。

議事：（1）令和4年度事業報告及び決算
（2）令和5年度事業計画及び予算
（3）令和5年度地域セミナーについて
（4）退会館園について
（5）新規入会希望館園について
（6）協会規約の改正について

### 2 研修会・講習会の実施

新型コロナ禍が終息の傾向にあると思われることを受け、対面での開催を基本に、
2、3回程度の開催を考えていきたい。

### 3 地域セミナーの開催

採択案は上述「今年度の地域セミナーについて」を参照。

### 4 講演会等の共催・後援

### 5 静岡県博物館協会研究紀要 第47号の刊行

### 6 静岡県博物館協会ホームページの保守・運営、会員館園ウェブ環境支援

当協会ホームページの保守・運営、会員館園向けの動画制作機材貸出、
オンライン研究会や講習会配信のためのZOOMアカウントの保持等を引き続き行ないたい。

### 7 東海地区博物館連絡協議会理事会及び総会への出席

通例、静岡→愛知→山梨→神奈川→岐阜の順に開催しており、今年度は愛知県が当番である。

### 8 防災事業

ウェブサイトに加え、SNSでの情報発信について検討する。

### 9 広報及び情報交換

### 10 事業推進グループによる事業の推進

・メンバーの任期は2年、2024（令和6）年度末まで。
・事業推進グループ会合は年間4回程度開催。

# 静岡県博物館協会　研究紀要投稿規程

## 1. 投稿を受け付ける原稿

### (1) 内容規定

加盟館園職員が従事している職務（展示・調査研究・保存・教育普及・その他）に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

### (2) 執筆者規定

加盟館園職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の1/3が加盟館園職員であることを条件とします。
※会員活動の報告や論評等で意義が認められる場合、例外を認めることがあります。

## 2. 入稿規定

### (1) 原稿の種類

日本語による原稿を基本とします。

### (2) 入稿の方法

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版（ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等）等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

### (3) 分量

| ページ数目安（1ページ当たり） | | | | 事例報告等（1～4ページ分程度） | | | 事例報告等（1/2ページ分） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | 縦書き | 写真無しの場合 | 2,000字 | 縦書き | 写真無しの場合 | 2,000字 | 縦書き | 写真無しの場合 | 1,100字 |
| | | 写真有りの場合 | 1,600字 | | 写真有りの場合 | 1,600字 | | 写真有りの場合 | 900字 |
| | 横書き | 写真無しの場合 | 2,000字 | 横書き | 写真無しの場合 | 2,000字 | 横書き | 写真無しの場合 | 1,100字 |
| | | 写真有りの場合 | 1,600字 | | 写真有りの場合 | 1,600字 | | 写真有りの場合 | 900字 |

### (4) 文字原稿（印字原稿は次の書式でご提出下さい）

字数（1シート）　A4版　40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

### (5) 図版原稿（1ページの版面はA4）

カラー（巻頭図版）　掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ　すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

### (6) 図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。なお、当協会紀要は協会ウェブサイトにもアップされます。

### (7) 執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地（それぞれ〒、Tel.、Fax.番号）・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

### (8) キーワードの設定

ウェブ上での検索を容易にするため、記事のキーワードを設定して下さい。

## 3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田53-2　静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax. 054-263-5742

## 4. 日程および申込・校正手順

### (1) 日程（予定）

申込締切　2024年 11月末日
入稿締切　2025年 1月末日
発行予定　2025年 3月末日

### (2) 申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- 執筆者　（複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記）
- 題名　（仮題で可）
- 分量見込（レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。）
- 縦書き、横書きの希望

※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

### (3) 申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行ないます。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

### (4) 入稿の方法及び原稿の掲載

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4-(3) で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

### (5) 校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正（図版等を含む）2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

### (6) レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

## 5. その他

### (1) 文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

### (2) 執筆者への成果品割当

執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

### (3) 抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。